

孔子様がおつしやるやう、『君子は公平で思ひやりがあるから、其部下として事へるのはやさしいが、ごきげんはとりにくい。喜ばせようと思つても、正しい道を以てしなければ喜ばないからである。しかし人を使ふには、各人を其の才能に應じて働かせて、無理な注文をしないから、つとめよいのである。これに反して小人は、私心があつて苛酷だから、下の者がつとめにくい。が、ごきげんはとりよい。すなはちへつらひとかまいなひとか道ならぬことをしてもよろこぶから、よろこばせよ。が、人を使ふのに一人の身にすべての事が備はることを求めて責めつかふから、甚だ事へにくいのである。

「備ハランコトヲ求ム」といふことは、夫婦や姑嫁の間でもよほど注意しないとイケない。互の要求や期待があまり大き過ぎることが、結局不和のもとだ。古註の左の説明が要領を得てゐる。

『君子ハ、己ヲ持スルノ道甚ダ嚴ニシテ人ヲ待ツノ心甚ダ恕ナリ。小人ハ、己ヲ治ムルノ方甚ダ寬ニシテ人ヲ責ムルノ意甚ダ刻ナリ。君子ハ人ノ理ニ順フヲ説ビ、小人ハ人ノ己ニ順フヲ喜ブ。君子ハ人材ヲ貴重シ、才器ニ隨ヒテコレヲ使フ。故ニ天下ニ用フベカラザルノ人ナシ。小人ハ人ヲ輕視ス。故ニ全キヲ求メ備ハ

X X X X X

ルヲ責メテ、卒ニ用フベキノ人ナキニ至ル。』

三二八 子ノタマハク、君子ハ泰クシテ驕ラズ、小人ハ驕リテ泰カラズ。

「泰」とはユツタリとしてゐてコセコセしないこと。「驕」は尊大。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『君子はおちつきがあつていばらない。小人はいばつてゐておちつきがなす。』

前に「坦蕩蕩」「長戚戚」とある(一八三)のに對する。

三二九 子ノタマハク、剛毅木訥ハ仁ニ近シ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「意志強固・氣性勇敢・容態質朴・言語寡黙なのは、仁に近す。」

例の「巧言令色」(三)の反対だが、「鮮シ仁」と言つて「仁無シ」と言はず、「仁ニ近シ」として「仁ソノモノ」としない所に注目すべきである。

三三〇

子路イハク、イカナルヲココニコレヲ士ト謂フベキカ。子ノタマハク、切切・
惇惇・怡怡如タルヲ士ト謂フベシ。朋友ニハ切切惇惇、兄弟ニハ怡怡。

古註に、「切切」は「懇到」、「惇惇」は「詳勉」、「怡怡」は「和悦」とある。最後が「怡怡如也」となつてゐる本もある。

× × × × ×

子路が『どういふのを士と申すべきでせうか。』とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、「切切すなはち「ネンゴロニユキトドク」こと、惇惇すなはち「ツマビラカニツトメハゲマス」こと、怡怡如すなはち「ヤハラギヨロコブ」こと、此三つがそろつてはじめて士と謂へる。朋友には切切

惇惇ぢやぞよ、兄弟には怡怡ぢやぞよ。』

此三者が子路には苦が手らしい。これも例の應病與藥だ。中井履軒念を押して曰く、

『下文ニ覆説スル者ハ、朋友ニハ切惇ヲ主トシ兄弟ニハ怡怡ヲ主トスルヲ謂フナリ。朋友ニハ全ク怡怡ヲ須ヒズ兄弟ニハ全ク切惇ヲ須ヒズト謂フニアラズ。』

三三一

子ノタマハク、善人民ヲ教フルコト七年、亦以テ戎ニ即カシムベシ。

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『有徳の君子が人民を七年も教化訓練したならば、はじめて戦争に使ひ得るだらう。』

古語に曰く、

『コレニ教フルニ孝悌忠信ノ行ト農ヲ務メ武ヲ講ズルノ法トヲ以テスレバ、民其上ニ親シミ其老ニ和スルヲ知ル、故ニ以テ戎ニ即カシムベシ。』

三三三 子ノタマハク、教ヘザル民ヲ以ヒテ戦フ、コレコレヲ棄ツト謂フ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『十分に教化訓練してない人民を騙つて戦争すれば、必ず敗戦にさまたつてゐるから、人民を捨て殺しにするといふものぢや。』

前章と併せ読んで、かくまで戦争を慎んだ孔子様が(一五九)今度の戦争を何と言はれるだらうと、感慨無量である。

憲問第十四

此篇には列國の士大夫についての評論が相當に多し。

三三三

憲恥ヲ問フ。子ノタマハク、邦道有レバ殺ス。邦道無クシテ殺スルハ恥ナリト。克伐怨欲行ハレズンバ以テ仁ト爲スベキカ。子ノタマハク以テ難シト爲スベシ。仁ハスナハチワレ知ラザルナリ。』

「憲」は門人原思の名。例の粟九百を辭した人(一一二)。

本章を二章にわけてある本もある。おそらく最初はさうだつたのが「憲問曰」が落ちて續いてしまつたのだらう。

X

X

X

X

原憲が、何が恥づべきことか、をおたづねした。孔子様がおつしやるやう、『國に道が行はれて

ある際仕へて俸祿を受けるのは恥ではないが、國に道が無くて亂れてゐる場合に、いさぎよく退くことが出来ないでむなしく祿をはんでゐるのは、恥づべきことぢや。』さらに又『人間はとかく人に勝つことを好み、自ら其功にほこり、人をうらみ、貪つてあくなきものでありますが、この克伐怨欲の四情を抑へることが出来ましたら、仁と申せませうか。』とおたづねしたら、孔子様がおつしやるやう、『それは中々むづかしい事でそれができたらえらいものだが、それだけで仁であるかどうか、わしは知らん。』

すなはち「克伐怨欲行ハレズ」だけではまだ消極的で、仁とはいへない、仁はモット積極的な徳だと云はれるのであつて、例によつてたやすく仁を許されない。

前段を「邦道有ルニ穀シ、邦道無キニ穀スルハ恥ナリ。」とよんで

『邦道有ルニ爲ス有ルコト能ハズ、邦道無キニ獨リ善クスルコト能ハズ、而シテタダ祿ヲ食ムコトヲ知ルハ皆恥ツベキナリ。憲ノ狷介ナル、ソノ邦道無クシテ穀スルノ恥ツベキハモトヨリコレヲ知ル、邦道有リテ穀スルノ恥ツベキニ至リテハ、スナハチ未ダ必ズシモ知ラザルナリ。故ニ夫子其間ニ因リテ、併セテコレヲ云ヒ、以テ其志ヲ廣メ、自ラ勉ムル所以ヲ知リテ爲ス有ルニ進マシムルナリ。』

と説明する人もある。しかし前に「邦道有リテ貧シク且賤シキハ恥ナリ」(一九七) とあるのを見ても、前記

の通りよみ且解するのが正し。

三三四

子ノタマハク、士ニシテ居ヲ懷フハ、以テ士ト爲スニ足ラズ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『いやしくも士たる者は、四方に出勤して天下を經營する意氣込がなくてはならぬ。家庭の爐邊ばかり戀しがらうなことでは、士とは謂へぬぞ。』

前に「居安キヲ求ムルコト無シ」(一四) とあるのと對應する。

三三五

子ノタマハク、邦道有レバ言ヲ危クシ行ヲ危クス。邦道無ケレバ行ヲ危クシ言孫フ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『國が治まつて道が行はれてゐる場合には、正しと信ずる所を遠慮な

く言ひ斷乎として行ふ。國が亂れて道が行はれない場合には、正しきを行ふべきは少しも變りがないが、言葉は當りさばりないやう注意せねばならぬ。』

これは相當議論のあるべき所で、孔子様もけつして盲從的大勢順應をよしとされるのではあるまい。いかなる場合にも言ふべきだけの事は言はねばならぬ筈だが、實際上言ひがひのある場合もあり、ない場合もあり、無益の波瀾を起し思はぬ舌禍筆禍を招いてもつまらぬ次第故、物を言ふには時と場合の見はからひが大切であることは間違ひなし。

古註に

『君子ノ身ヲ持スルハ變ズベカラザルナリ。言ニ至リテハ、スナハチ時アリテ敢テ盡サズ、以テ禍ヲ避クルナリ。然レバスナハチ國ヲ爲ムル者、士ノ言ヲシテ孫ナラシムルハ、アニ殉カラズヤ。』
とあるのを讀むと、戦争後期のわが國に正にあてはまるので、苦笑の外ない。

三三六 子ノタマハク、徳有ル者ハ必ズ言有リ、言有ル者ハ必ズシモ徳有ラズ。 仁者ハ必ズ勇有リ、勇者ハ必ズシモ仁有ラズ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「徳の有る人には必ず善い言葉がある。なぜならば、心中に蓄積された盛徳がおのづから外にあふれ出て言葉となるからだ。しかし善い言葉のある人が必ずしも徳のある人ではない。何故ならば、言葉は其人の眞情から出るものとばかりは限らず、口先のみのものであるからだ。仁者は必ず勇者である。なぜならば、心に私なく正義を斷行するからだ。しかし勇者は必ずしも仁者ではない。なぜならば、勇には正義によらぬ血氣の勇もあるからだ。」

三三七

南宮适孔子ニ問ヒテイハク、羿ハ射ヲ善クシ、臯ハ舟ヲ盪カス。俱ニ其死ノ然ルヲ得ズ。禹稷ハ自ラ稼シテ天下ヲ有ツ。夫子答ヘズ。南宮适出ヅ。子ノタマハク、君子ナルカナ、カクノ如キ人。徳ヲ尙ブカナ、カクノ如キ人。

「南宮适」は魯の大夫南宮敬叔だといふ説と、門人南容のことだといふ説とある。「孔子ニ問ヒテイハク」といふ書き方から見ると前者らしい。

「羿」は夏の時の諸侯で有窮國の君、夏の天子相を滅ぼして其位を奪つたが、其臣寒浞が羿を殺してこれに代

つた。「寡」は涙の子で相の子の小康に誅された。

X X X X X

南宮适が孔子に「昔羿は弓の上手であり、又寡は大船を動かす程の大力だったが、二人共に非業の死を遂げた。しかるに禹は治水に骨折り后稷は自身耕作をして、特に武藝に秀で大力だといふのではなかつたが、禹は舜の譲を受けて天子となり、又稷の後は周の武王に至つて天子となつた。それはどういふわけでありませうか。」とたづねたところ、孔子は答へなかつた。南宮适が其場を去つて後、孔子様がおつしやるやう、「君子であるわい、あの人は。力を重んぜずして徳を尊ぶかな、あの人は。」

孔子様がなぜ答へなかつたかは、十分にわからない。南宮适が、あなたの如き有徳の君子は天下をたもつても然るべきだ、といふ意味で言つたので、返事することをばかられ、南宮适が力を賤しみ徳を尊ぶのに賛成するだけの形にしてしまはれたのだらうといふ。

三三八 子ノタマハク、君子ニシテ仁ナラザル者ハ有ランカ、未ダ小人ニシテ仁ナル者

ハ有ラザルナリ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「君子は常に仁を志すが、まだ聖人の如く圓滿具足の域に達してはゐないから、時には知らず識らず不仁に陥る者があるかも知れない。しかし小人は元來が仁に志さぬのだから、仁者であり得るはずがない。」

三三九 子ノタマハク、コレヲ愛シテハ能ク勞セシムルコトナカラシヤ。コレニ忠ニシテ能ク誨フルコトナカラシヤ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「人を愛する以上、これに苦勞をさせて其人物を鍛えないでよからうか。人に忠實である以上、これを教訓し忠告善導しないでよからうか。」

前段は「はゆる」可愛「子には旅をさせる」の意味。

後段の「忠」を「君に忠」の意に解する人もあるが、前段との続きからも、又「誨」の字からも、やはり子弟友人の意に解するがよからう。

三四〇 子ノタマハク、命ヲ爲ルニ裨謀コレヲ草創シ、世叔コレヲ討論シ、行人子羽コレヲ修飾シ、東里ノ子産コレヲ潤色ス。

「命」は諸侯と應對する「辭命」の書、すなはち外交文書。

「行人」は使事をつかさどる官、すなはち外交官。

「東里」は子産の住所。

此四人は鄭國の賢大夫であつて、中でも子産が總理大臣格であり、左傳（襄公三十一年）にも「子産ノ政ニ從フヤ能ヲ擇ビテコレヲ使フ。」とあるやうに、外交文書一つ作るにも衆智を集めたので、小國を以て晋楚兩大國の間にはさまりながら滅びないのだと、孔子様がほめられたのである。

×

×

×

×

孔子様がおつしやあやう、『鄭の國では外交文書を作るのにも、まづ裨謀が大體の要項を立案し、

世叔が故實をただし論理を合はせ、外交官子羽が文章を添削整理し、最後に東里の子産の手元で文飾を加へて仕上げをする。さても念の入つたことかな。』

三四一 或ヒト子産ヲ問フ。子ノタマハク、惠人ナリ。子西ヲ問フ。ノタマハク、カレヲヤ、カレヲヤ。管仲ヲ問フ。ノタマハク、人ヤ。伯氏ノ駢邑三百ヲ奪フ、疏食ヲ飯ヒ、鬻ヲ没スルマデ怨言無カリキ。

本章は三人の賢大夫、鄭の子産・楚の子西・齊の管仲の批評である。子産と管仲は前に出た（一〇七・六一一）。子西については、古註に

『子西ハ楚ノ公子申、能ク楚ノ國ヲ瀕リ、昭王ヲ立テテ其政ヲ改紀ス。亦賢大夫ナリ。然レドモ其ノ僭王ノ號ヲ革ムル能ハズ。昭王孔子ヲ用ヒント欲シテ又コレヲ沮止ス。其後チツヒニ白公ヲ召キテ禍亂ヲ致ス。スナハチソノ人ト爲リ知ルベシ。』

とある。それ故孔子様は問題にされなかつたのだ。

「三百」は「三百家」といふ説と「三百里」といふ説とある。「里」は前にあつたやうに（一一二）二十五家だから、後説だと合計七千五百家になる。戸数の多い方が話が面白いから後説を採らう。

或人が子産の人物をおたづねしたら、孔子様が『仁愛の人ぢや。』とおつしやつた。子西をおたづねしたら、『あの人は、あの人は。』と云はれて問題にされなかつた。さらに管仲の人物をおたづねしたら、孔子様がおつしやるやう、『あれは人物ぢや。國政を執つたとき、大夫伯偃の罪をただして、駢邑へんいといふ七千五百戸もある大きな領地を沒收し、そのために伯偃は困窮して、食ふや食はずで一生を送つたが、死ぬまでうらみごとを言はなかつた。すなはち其處置が公明正大で、處分された者をも心服させたのである。』

X X X X

三四二

子ノタマハク、貧ニシテ怨ムコト無キハ難シ。富ミテ驕ルコト無キハ易シ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『生活に困ると、とかく人を怨む心を生ずるものだから、貧困でも天命に安んじて怨みがましいことのないのは、すこぶるむつかしいことぢや。それにくらべると、富んでもおごらぬといふことは、少しく眞理をわきまへた者にはやさしいことなのだが、しかしその

やさしいことすらできぬ者が多いのだから、お前達は、その難きをつとめ、その易きをゆるがせにせぬやうにせよ。』

三四三

子ノタマハク、孟公綽ハ、趙魏ノ老ト爲ラバヌナハチ優ナリ、以テ滕薛ノ大夫ト爲スベカラズ。

X X X X

「孟公綽」は魯の大夫。次章によれば無欲の人だつたとのことだが、政治的手腕はなかつたらしい。

孔子様がおつしやるやう、『孟公綽は、晋の趙家や魏家のやうな大家でも一家の家老としては十分だが、滕や薛のやうな小國でも、一國の大夫として國政を執るには不適當だ。』

「はんや滕や薛よりも大きな魯の大夫としては、の意味が含まれてゐる。

「老」は家臣の長だが、古註に

『大家ハ勢重クシテ諸侯ノ事績無ク、家老ハ望尊クシテ官守ノ責無シ。』

とあつて、手腕はなくとも人格者ならばとまるのである。

三四四

子路成人ヲ聞フ。子ノタマハク、臧武仲ノ智、公綽ノ不欲、卞莊子ノ勇、冉求ノ藝ノゴトクニシテ、コレヲ文ルニ禮樂ヲ以テセバ、亦以テ成人ト爲スベシ。ノタマハク、今ノ成人トハ、何ゾ必ズシモ然ラン。利ヲ見テハ義ヲ思ヒ、危キヲ見テハ命ヲ授ケ、久要平生ノ言ヲ忘レズンバ、亦以テ成人ト爲スベシ。

「臧武仲」は魯の大夫、名は紇、小男で智者だつたと云ふ。

「卞莊子」は魯の卞邑の大夫、虎を刺したので有名。

「冉求」については前に「求ヲ藝」(二二五)とある。後段は子路の言葉だとする説があるが、やはり孔子様の言葉で、一旦話を切つて再び言はれた意味で「曰」がはさんであるのだ。

X X X X X

子路が、成人すなはち完成された人格者とは何か、をおたづねしたら、孔子様が、「臧武仲の才智と、孟公綽の無欲と、冉求の多藝とを兼ね、これをさりもりするのに禮を以てし、これをやはら

げるのに樂を以てしたならば、正に成人と謂へよう。」と語られたが、さらに言葉をあらためておつしやるやう、『今の亂世では、そこまでの成人は望めぬかも知れぬ。利得問題に當つてはそれを取るが義が取らざるが義かを思ひ、君國の危急に際しては一命を投げ出し、古い約束や平生の言葉を忘れずに實行する、さういふ人物ならばまづまづ成人と謂つてよからう。』

前段について、古註には

『言フ心ハ、上四人ノ才智ヲ備有シ、又スベカラク、禮樂ヲ加ヘテ以テコレヲ文飾スベキナリ。』とあるが、伊藤仁齋はこれに反對して、

『四子ノ長ノゴトキハ、皆以テ世ニ立チ名ヲ成スニ足ル。而シテマタ禮樂ヲ以テコレヲ文リ、スナハチ偏レルヲ救ヒ闕ケタルヲ補フ。以テ成人ノ名ニ當ルニ足ル。舊註ニ以テ四子ノ長ヲ兼ヌト謂フハ非ナリ。コレケダシ聖ノ能クセザル所、アニコレヲ學者ニ望ムベケンヤ。』

と言ひ、荻生徂徠もこれに賛成してゐる。しかしそれではかへつて「今ノ成人」より軽くなりさうだから、やはり舊説の方がよいと思ふ。

「平生ノ言」を『古い約束をした當時の言葉』と解するのが通説だが、前記の方がわかりよいと思つて、自己流を立てた。

三四五 子、公叔文子ヲ公明賈ニ問フ。ノタマハク、信ナルカ、夫子言ハズ笑ハズ取ラザルカ。公明賈對ヘテイハク、以テ告グル者ノ過テルナリ。夫子時有リテ然ル後ニ言フ。人其ノ言フコトヲ厭ハズ。樂ミテ然ル後ニ笑フ。人ソノ笑フコトヲ厭ハズ。義アリテ然ル後ニ取ル。人ソノ取ルコトヲ厭ハズ。子ノタマハク、ソレ然リ、アニソレ然ランヤ。

「公叔文子」は衛の大夫公孫拔。「公明賈」も衛の人。

X X X X X

孔子様が公叔文子の事を公孫賈にたづねて、『本當ですか、太夫殿は、言はない、笑はない、取らない、といふのは。』と云はれたら、公孫賈が『それはうはさした者のまちがひであります。公叔文子も言つたり笑つたり取つたりしますが、言ふべき時に言ふから人がその言つたことに気がつかないのです。心から楽しく思つて笑ふから人がその笑つたことに気がつかないのです。取る義理のある時に取るから人がその取つたことに気がつかないのです。』と答へた。孔子様が感服してお

つしやるやう、『なるほど其通りだらう、どうしてうはさ通りであらうぞ。』

「ソレ然リ、アニソレ然ランヤ」は、今日では「ほんとにさうかね」といふくらゐのうたがひ乃至ひやかしに用ひられる。本章でも『其通りなら大したものだが、どうもさうではあるまい。』といふ意味に解するのが通説のやうだ。しかし公孫賈がせつかく名答をしたのをうたがひやかすのは孔子様らしくない故、前記の如く解する説を採つた。

三四六 子ノタマハク、臧武仲、防ヲ以テ後ヲ爲サンコトヲ求ム。君ヲ要セズト曰フト雖モ、ワレハ信ゼザルナリ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『臧武仲が罪を得て魯の國を出奔するとき、其領地の防に踏み止まつて、そこから臧家の後繼を立てていただきたいと請願し、もしそれを許してくだされば防をあけわたして他國へ立ちのきますと申し出た。そして其請願が通つたので齊の國におもむいた。言葉は歎願的だつたけれども、結局もし許されなければ防に立てこもつて謀叛を起すといふ勢を示したので

あつて、主君を威嚇強迫したのではないと辯解しても、わしは信じない。」

古註にも左の如く説明してある。

『武仲ノ邑ハコレヲ君ニ受ク。罪ヲ得テ出デ奔ル、スナハチ後ヲ立ツルハ君ニ在リ、已レノ専ラニスルヲ得ル所ニアラズ。而シテ邑ニ據リテ以テ請フ。ソノ知ヲ好ンデ(三四四)學ヲ好マザルニ由ルナリ。』

三四七

子ノタマハク、晉ノ文公ハ譎リテ正シカラズ、齊ノ桓公ハ正シクシテ譎ラズ。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『晉の文公も齊の桓公も、共に覇者すなはち諸侯の盟主となり、夷狄を攘ひ周室を尊んだ大功があるが、文公は謀略を好んで正道によらず、桓公は正道を踏んで謀略を用ひなかつた。そこに兩公の間の大きな相違がある。』

三四八

子路イハク、桓公公子糾ヲ殺ス。召忽ハコレニ死シ、管仲ハ死セズ。イハク未ダ仁ナラザルカ。子ノタマハク、桓公諸侯ヲ九合スルニ兵車ヲ以テセザリシハ

管仲ノカナリ。其仁ニ如カンヤ、其仁ニ如カンヤ。

「九合」の九は數ではなくて「糾」と同字。すなはち「糾合」。

本文の事件を春秋左氏傳(莊子、八・九年)の記事によつて抄録すると、

『齊ノ襄公(僖公ノ嫡子)無道ナリ。鮑叔牙公子小白(僖公ノ庶子)ヲ奉ジテ莒ニ奔ル。公孫無知(僖公ノ母弟夷仲年ノ子)襄公ヲ弑スルニ及ビ、管夷吾(管仲)、召忽、公子糾(小白ノ庶兄)ヲ奉ジテ魯ニ奔ル。魯兵ヲ以テ子糾ヲ納ル。コノ時小白スデニ立ツ。遂ニ與ニ戰ヒ、魯兵大ニ敗ル。小白入ル。コレヲ桓公ト爲ス。魯ヲシテ子糾ヲ殺サシメ、管、召ヲ請フ。召忽コレニ死ス。管仲囚ハレンコトヲ請フ。鮑叔牙桓公ニ言ヒテ以テ相ト爲ス。』

といふのである。ただし糾と小白といづれが兄か、については異説があつて、次章に引く古註は、小白が兄とすふことで立論してゐる。

×

×

×

×

子路が齊の桓公が公子糾を殺したとき召忽は義を守つて死し管仲は死せざるのみならず君の仇の桓公に事へたのを其意を得ずとして、『管仲は仁とは申せまします。』とおたづねしたところ、孔子様がおつしやるやう、『當時周の王室が衰へて諸侯服せず、夷狄侵入して中國危からんとした際、

桓公が武力を用ひず血を流さずして諸侯を聯合させ、尊王攘夷を實行して天下の人民を安堵休息させたのは、全く管仲輔佐の功績である。たとひ公子糾のために死ななかつた小過失はあらうとも、天下を平かにし萬民を安んじた偉大な仁に誰が及ばうや、誰が其仁に及ばうや。』

三四九

子貢イハク、管仲ハ仁者ニアラザルカ。桓公公子糾ヲ殺スニ死スルコト能ハズ、又コレヲ相ク。子ノタマハク、管仲桓公ヲ相ケテ諸侯ニ覇タラシメ、一タビ天下ヲ匡ス。民今ニ到ルマデ其賜ヲ受ク。管仲ナカリセバ、ワレソレ髮ヲ被リ衽ヲ左ニセン。アニ匹夫匹婦ノ諒ヲ爲シ、自ラ溝瀆ニ經レテコレヲ知ラルルナキガゴトクナランヤ。

X

X

X

X

子貢もまた疑つて、『管仲は仁者でないのではありますまいか。桓公が公子糾を殺した時、主と共に死ぬことができず、かへつて主の仇たる桓公に事へたのは、どうも其意を得ませぬ。』と言つた。孔子様がおつしやるやう、『管仲は桓公を輔佐して諸侯聯盟の旗頭たらしめ、たちまち天下を肅正安定し、人民が今日までも其恩澤に浴してゐる。もし管仲がなかつたなら、われわれは夷狄に征服

されて、髪よりみだし着物を左前にきる野蠻人の風俗にされてゐたであらう。管仲が其前主のために死ななかつたのをかれこれ申すが、管仲の如き大志を抱く者が、小さな義理人情にこだはつてみぞどぶの中で自らくびれ誰にも知られず死んでしまふ平凡男女のやうであつてよいものだらうか。』

子貢も亦子路と同じ疑を起したのに對して、孔子様が相手が「言語」の子貢(二五五)だけに、さらに「さう言葉を盡して管仲を辯護して居られる。しかし此點は大い問題であつて、私も子路・子貢と共に釋然たさるものがある。孔子様は前には管仲が禮を知らぬことをきびしく責めて、『器小ナルカナ』と言つて居られるのだから(六二)、此場合にも、其大功は認めつつも、最初の出處進退を誤つたのは惜しい事だと論じた方が、筋が通るのではあるまいか。この二章ではあまりにも成功主義實績主義のやうで、周の粟を食ますわらびを食べて餓死した伯夷・叔齊を絶讃される孔子様に似合はしくない。殊に最後の匹夫匹婦のたとへに至つては正に明治初年に物議をかもしたかの「權助首くり論」であつて、甚だ以て孔子様らしくないのみならず、差當り殉死の忠臣召忽に對して苛酷失禮ではないだらうか。そこで學者間にも色々議論があり、或古註は

『桓公ハ兄ナリ、子糾ハ弟ナリ。仲、事フル所(子糾)ニ私シ、コレヲ輔ケテ以テ國ヲ争フハ義ニ非ザルナリ。桓公ノコレ(子糾)ヲ殺セルハ過テリト雖モ、而カモ糾ノ死ハ實ニ當レリ。仲始メコレト謀ヲ同ジクセバ、遂ニコレト同ジク死シテ可ナリ。コレヲ輔ケテ争フコトノ不義タルヲ知リテ、將ニ自ラ免レテ以テ後功

ヲ圖ラントスルモ亦可ナリ。故ニ聖人其死ヲ責メズシテ其功ヲ稱ス。モシ桓弟ニシテ糾見クランメバ、管仲輔クル所ノ者正シ。桓其國ヲ奪ヒテコレヲ殺サバ、管仲ト桓トハ世ヲ同ジクスベカラザルノ讐ナリ。モシ其ノ後功ヲ計リテソノ桓ニ事フルヲ與サバ、聖人ノ言、スナハチ義ヲ害スルノ甚シクシテ、萬世反覆不忠ノ亂ヲ啓クコトナカラシヤ。唐ノ王珪・魏徵、建成（唐高祖ノ太子）ノ難ニ死セズシテ、太宗（建成ノ弟）ニ從ヒシ如キハ、義ニ害アリト謂フベシ。後ニ功有リト雖モ、何ゾ贖フニ足ランヤ。」

と辯明してゐるが、すこぶる苦しい議論であるのみならず、前記の通り桓公と糾といづれが兄か弟かといふところが問題なのだから、立論の根據が薄弱だ。要するに「大行ハ細謹ヲ顧ミズ」の觀念が濫用されると、それこそ論者のいはゆる「萬世反覆不忠ノ亂ヲ啓」きはせぬか、といふことを私は心配する。聖人といはれる孔子様も稀には意地になつてかやうな極論をされることもある人間味を私はむしろ面白くも思つて、私も敢て極論を試みたが、寛容な孔子様がお聞きになつたならば、『丘ヤ幸ナリ、イヤシクモ過チ有レバ人必ズコレヲ知ル。』（一七七）とおつしやるだらうか。

三五〇 公叔文子ノ臣大夫僕、文子ト同ジク諸公ニ升ル。子コレヲ聞キテノタマハク、以テ文ト爲スベシ。

X X X X

衛の大夫の公叔文子の家臣で其家の大夫だつた僕が、主人の文子と同列の衛の朝臣に昇進した。文子の歿後孔子様が賞讃しておつしやるやう、『自分の家來でも賢人と知れば推薦して自分の同僚に引立てるとは、文子とおくり名されたのももつともぢや。』

三五一 子衛ノ靈公ノ無道ヲ言フ。康子イハク、ソレカクノ如クニシテナンゾ喪ビザル。孔子イハク、仲叔圉ハ賓客ヲ治メ、祝鮀ハ宗廟ヲ治メ、王孫賈ハ軍旅ヲ治ム。ソレカクノ如クニシテナンゾソレ喪ビン。

X X X X

「康子」は魯の大夫季康子。おそらく「季」の字が落ちたのだらう。

孔子様が衛の靈公の無道であることを語つたので、季康子が『さやうに無道でどうして國が亡びないのですか。』とたづねた。孔子が申すやう、『衛の國では、仲叔圉が外交に當り、祝鮀が祭祀を

つかさどり、王孫賈が國防に任じてゐます。かく適材適處に國の大事を負擔してゐる以上、どうして中々亡びませうや。』

「喪」は君が其位をうしなふことだが、日本流に「國が亡びる」として置いた。古註に曰く、

『衛ノ靈公ノ無道ナル、宜シク喪ブベシ。シカルニ能ク此三人ヲ用フレバ猶ホ以テ其國ヲ保ツニ足ル。シカモイハンヤ有道ノ君ニシテ能ク天下ノ賢才ヲ用フル者ヲヤ。』

三五二 子ノタマハク、ソノコレヲ言フコト作ヂザレバ、スナハチコレヲ爲スヤ難シ。

× × × × × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『はづかしげもなく大言壯語する者は、始めから必ずしようといふ氣持もなく、自分にできるかできぬかも考へずに放言するのだから、その言つた事を實行することがむづかしいのは當然ぢや。』

三五三 陳成子簡公ヲ弑ス。孔子沐浴シテ朝シ、哀公ニ告ゲテイハク、陳桓其君ヲ弑セ

リ、請フコレヲ討タント。公イハク、カノ三子ニ告ゲヨ。孔子イハク、ワレ大夫ノ後ニ從フヲ以テ、敢テ告ゲズンバアラザルナリ。君イハク、カノ三子者ニ告ゲヨト。三子ニユキテ告グ、可カズ。孔子イハク、ワレ大夫ノ後ニ從フヲ以テ敢テ告ゲズンバアラザルナリ。

「陳成子」は齊の大夫、名は恒、成はおくり名。

「沐浴」は髪あらひ湯あみすること。祭祀其他大事に當る場合のいはゆる「齋戒沐浴」。

× × × × × × × ×

齊の陳成子が其君簡公を弑した。孔子様は時に年七十一で、とくに隱退して居られたが、隣國の事ながらこれは大義名分に關する天下の一大事なりと考へ、齋戒沐浴して身をきよめた後朝廷へ出て、『齊の陳恒が其君を弑しました。打ち捨て置かれぬ大逆でござります故、兵を起して討伐なされたいものと存じます。』と哀公に申し上げた。ところが當時魯の公室衰へて政權は大夫孟孫・叔孫 季孫の三家に在つたので、哀公は自ら決斷し得ず、『あの三人に申せ。』と云はれた。孔子様は失望して御前をさがり、『自分も大夫の席末をけがした身故、此一大事はどうしても申し上げなけ

ればならなかつたのだが、わが君は御決断が附かず、「カノ三子者ニ告ゲヨ。」と仰せられるとは。」と歎息しつつ、ともかくも君命なれば三家に告げたが、三家はさかなかつた。齊の強大を恐れたのみならず、問題が大夫の不臣といふ事で、自分たちも「さづもつすね」で觸れなくなかつたのだらう。孔子様も現役ではないから其上の議論もできず、やむを得ず引きさがつたが、「自分も大夫の席末をけがした身故、此一大事はどうしても申し上げねばならなかつたのだが。」と、かへすがへすも残念がられた。

三五四 子路君ニ事フルコトヲ問フ。子ノタマハク、欺クコトナカレ。而シテコレヲ犯セ。

この「欺」は「侮」の意味。わが國の軍記物などにもよく、敵に向つて廣言をはき、「あざむいてこそ立つたりけれ」などある。

この「而」は「しかるのちに」の意味だから、「シカウシテ」と力を入れてよまなければいけない。

X X X X X

子路が君に事へる道をおたづねした。孔子様がおつしやるやう。君を侮つてはいけない。十分の敬意を盡した上で、場合によつてはごきげんを損じようとも面を犯して諫め争へ。

子路は例の「行々如」(二六五)で主人をバカにしてかかりさうだから、特に其點をいましめられたのである。古註に曰く、

『犯スハ子路ノ難シトズル所ニアラズ、而シテ欺カザルヲ以テ難シト爲ス。故ニ夫子先ヅ欺クナクシテ後ニ犯セト教ヘシナリ。』

三五五 子ノタマハク、君子ハ上達シ、小人ハ下達ス。

「上達」は今では學藝が上手になることに用ひるが、後にも「下學而上達」(三六七)とあつて、元來は「向上シテ其極ニ達ス」ること。「下達」は其反對で、さういふ言葉はないが「向下」である。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「君子は道義に従つて日夜勉學修養するから、だんだんと向上して聖

賢のてつべんにも達するが、小人は利欲にのみ志して一時の安樂をむさぼるから、おひおひに墮落して狂愚のどんどこにも達する。』

中井履軒曰く、

『君子ハ一ニ義ニ志ス。故ニ日月ニ益々上リテツヒニ極ニ至ル。小人ハ一ニ利ニ志ス。故ニ日月ニ益々下リテツヒニ亦極ニ至ル。』
「君子喻於義」ノ章（八二）ト立言同ジカラザレドモ、而カモ語意ハ相通ズ。』

三五六 子ノタマハク、古ノ學者ハ己ノ爲メニシ、今ノ學者ハ人ノ爲メニス。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「昔の人の學問は自分の修養のためだったが、今の人の學問はただ人に知られんがためである。』

「己ノ爲メ」といふのは、自分の立身出世のためといふ意味でないこともちろんであつて、まづ身を修めて天下國家の役に立たうといふのである。

三五七

蘧伯玉人ヲ孔子ニ使ハス。孔子コレニ座ヲ與ヘテ問ヒテイハク、夫子何ヲカ爲スト。對ヘテイハク、夫子過チヲ寡クセント欲シテ未ダ能ハズト。使者出ヅ。子ノタマハク、使ナルカナ、使ナルカナ。

「蘧伯玉」は衛の大夫名は蘧。有名な賢人で、孔子様が衛に行かれた時、其家に宿泊した緣故がある。

X

X

X

X

蘧伯玉が孔子様の所へ使者をよこした。用談終つて後、まあすはりなさいと座を與へて、『御主人は昨今何をしてござるか。』とたづねられたら、使者が、『何とかして過ちを少くしたいと心がけて居りますが、中々左様に參らぬので困つて居ります。』と答へた。使者が歸つた後に孔子様が、『大した使者ぢや、大した使者ぢや。』とほめられた。

孔子様がどうしてそんなに感心されたのか。伊藤仁齋曰く、

『オヨソ使ナル者ハ必ズ詞ヲ飾リ言ヲ修イニシテ其主ノ賢ヲ擧グルラ常トス。シカルニ伯玉ノ使ハ、其徳ヲ

稱セズシテ其心ノ足ラザル所ノモノヲ以テ答へ、其主ノ賢ナルコト愈々信ズルニ足ル。故ニ夫子再ビ使ヒナ
 ルカナト言ヒテ、以テ重ネテコレヲ美メシナリ。(中略)道ノ窮リ無キヲ知リテ、シカル後ニ人ノ過チ無キ
 コト能ハザルヲ知ル。故ニ「過チテ改メザル、コレヲ過チト謂フ。」ト曰ヘリ(四〇五)。ケダシ過チノ深ク
 答ムベカラズシテ、改メザルニ至リ然ル後ニ實ノ過チト爲スヲ言フナリ。伯玉ノ使、ソノ過チ無カラント欲
 スト曰ハズシテ、過チヲ寡クセント欲スト曰ヒ、能ク過チヲ寡クスト曰ハズシテ、未ダ能ハズト曰フ。ケダ
 シ深ク聖人ノ心ニ合フ有リ。宜ベナルカナ、夫子深クコレヲ歎ゼルヤ。』

三五八 子ノタマハク、其位ニ在ラザレバ、其政ヲ謀ラズト。曾子イハク、君子ハ思フ
 コト其位ヲ出デズ。

前半ハ重出(一九八)。

X

X

X

X

孔子様が「ソノ位ニ在ラザレバ其政ヲ謀ラズ。」と言はれたについて、曾子が説明して言ふやう、
 「君子は其時々^ニの地位に應じて其本分以外の事を考へず、ただ當面の責任を全くせんことを思へ、

との御趣意である。』

三五九 子ノタマハク、君子ハ其言ノ其行ニ過タルヲ恥ヅ。

「其言之」が「其言而」になつてゐる本がある。それだと「君子ハ其言ヲ恥ヂテ其行ヲ過ゴス。」とよむ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「君子たる者は、言葉が行よりも大げさなのを恥ぢる。』

参照——八八

三六〇 子ノタマハク、君子ノ道ナルモノ三ツ、ワレ能クスルコト無シ。仁者ハ憂ヘズ。
 知者ハ惑ハズ。勇者ハ懼レズ。子貢イハク、夫子自ラ道フナリ。

本文「仁智勇」の三句は前にも出てゐるが、ここでは「知仁勇」の順序になつてゐる(二三三)。ここは徳

そのものの順序であり、前のは進學の順序である、などと學者が言ふがそれ程の意味もあるまい。

X X X X

孔子様が『君子の道とすべき所のものが三つある。「仁者ハ憂ヘズ。知者ハ惑ハズ。勇者ハ懼レズ。」であるが、わしにはどれ一つ満足には出來ない。』と謙遜されたので、子貢が申すやう、『その三つこそ正に先生御自身の事を云つたやうなものであります。』

三六一 子貢人ヲ方^{マクラ}ブ。子ノタマハク、賜ヤ賢ナルカナ、ワレハスナハチ暇^{イト}アラズ。

X X X X

子貢は好んで他人を比較論評した。孔子様がおつしやるやう、『賜はかしこいことかな。わしにはとてもそんなひまはない。』

子貢が子張と子夏とを「タクラベ」たことが前に出てゐる(二六八)。孔子様も中々皮肉を言はれることかな。

三六二 子ノタマハク、人ノ己^{オノレ}ヲ知ラザルヲ患^{ウレ}ヘズ、己ノ能クスル無キヲ患フ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『人が自分を知らないことを心配するな。自分に知られるだけの能力のないことを心配せよ。』

これは孔子様がいつも言はれることで、外にも同趣旨が三箇所に出てゐるが(一六・八〇・三九四)、一々文句がちがふ。

三六三 子ノタマハク、詐^{イツハリ}ヲ逆^{ムカ}ヘズ、信ゼラレザルヲ億^{ヒカ}ラズ、ソモソモ先ヅ覺^{サト}ル者ハコレ賢カ。

古註に『逆ハ未ダ至ラズシテコレヲ迎フルナリ、億ハ未ダ見ズシテコレヲ意^{オモ}フナリ。』とある。

今日の「先覺者」といふ言葉はここから出てゐるのだらうが、多少意味がちがふ。この先覺はむしろ「直

感」といふやうな意味。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「人が自分をだましはせぬかとこちらからあらかじめ迎へてかかつたり、人が自分を疑つて信用せぬのではないかと取越苦勞したりしないで、正心誠意に人に接しながら、しかも相手のいつはりや疑ひが鏡の如くこちらに映るやうになつたら、それこそ賢人といふものだらうか。』

三六四

微生畝孔子ニ謂ヒテイハク、丘ヨ、何ゾコノ栖々タル者ヲ爲スカ。スナハチ倭ヲ爲スコト無カラシヤ。孔子イハク、敢テ倭ヲ爲スニアラズ、固ヲ疾ムナリ。

「微生畝」については、荻生徂徠が

「何人タルカヲ知ラズ。ケダシ亦郷先生ニシテ、孔子ニ於テ先輩タリ。何ゾヤ、ソノ孔子ヲ名イフヲ以テナ

リ。』
と言つてゐる。人生を超越して獨り高しとする老莊者流であらう。

X X X X X

微生畝が孔子に向つて、「丘よ、何だつてそんなにアクセクしてゐるのか。いたづらに辯を好むきらひがあるではないか。」と言つた。孔子が風に柳と受け流して、「イヤ辯を好むわけではありませんが、獨善にこりかたまつて世間を白眼視することがさらひだものですから。』

天下を憂へ生民を愛して東奔西走される孔子の素志悲願を知らずして冷笑をあびせるいはゆる隱君子も相當にあつたことが、論語中にもいくつか見える。此場合の孔子様の答は、相手が長老なので言葉は丁寧だが、相當にあてつけがまし。

三六五

子ノタマハク、驥ハ其力ヲ稱セズ、其德ヲ稱スルナリ。

名馬は冀北に産するといふところから、「驥」といふ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『名馬といふのは、日に千里を走るといふやうな其力をほめるのではなくて、順良で悪癖がないといふ其徳をたたへるのぢや。』

・もちろん人にたとへたのだが、『イハンヤ人ニ於テオヤ』といふやうな蛇足を添えない所が、論語の文章の簡潔さである。

三六六

或ヒトイハク、徳ヲ以テ怨ニ報ヒバイカン。子ノタマハク、何ヲ以テカ徳ニ報ヒン。直キヲ以テ怨ニ報ヒ、徳ヲ以テ徳ニ報フ。

X X X X

或人が『怨に報いるのに徳を以てしたらどんなものでせうか、實に高尚な事と思ひますが。』とおたづねしたところ、孔子様がおつしやるやう、『怨に報いるに徳を以てするなら、徳に報いるには何を以てしたらよいだらうか。釣合の取れぬことになりさうだ。怨に報いるには公平無私の正しさ道を以てし、徳に報いるに徳を以てすべきぢや。』

老子は『怨ニ報フルニ徳ヲ以テス。』と云ひ(恩始章)、キリストは『汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。』と説く、(馬太傳五ノ四四)。理想主義として又宗教心としては正に然かあるべきだが、孔子様の教は實際的常識的で、凡人のできさうな所をねらふ。しかしわれわれ凡人としては、むしろ老子流キリスト流に心がけて辛うじて孔子流まで行けるのではないだらうか。

終戦後特に男を上げたのは蔣介石である。日本に對する其態度は、正に『直キヲ以テ怨ニ報イル』ものやうだ。

三六七

子ノタマハク、ワレヲ知ルコトナキカナ。子貢イハク、何スレゾソレ子ヲ知ルコトナカラシヤ。子ノタマハク、天ヲ怨ミズ、人ヲ尤メズ、下學シテ上達ス。ワレヲ知ル者ハソレ天カ。

X X X X

これは孔子様七十一歳の時のこと。『たうとうわしを知つてくれる者が無かつたことかな。』と歎息された。そこで子貢が慰め顔に、『どうして先生を知らない者がござりませうや。私ども門人をはじめ天下の心ある者は皆先生の聖人たることを知つて、隨喜渴仰してゐることです。』と

言つた。すると孔子様がおつしやるやう、『イヤイヤ、わしが言ふのはわしを知つて國政をまかせてくれる國君がなかつたことをいふのだが、わしの理想なる先王の道を現代に行ふことが出来なかつたのを遺憾とするので、人に知られなかつたことを怨むのではない。知られようと知られまいと用ひられようと用ひられまいと、いづれも天命だから、わしは天をも怨まず人をもとがめず、下は卑近な人事から學び始めて、上は高尚な天理まで一通りきはめつくした故、わしはそれで満足で、たとひ人は知らずとも、わしを知つてくれるのは天であると確信して、天命に安んじてゐるぞよ、心配するな。』

「何スレゾ子ヲ知ルコトナキカ。」とよむ人もあつて、それだと、「どうして先生を知らないのでせうか」といふことになり、子貢の言葉の意味は違つて來るが、いづれにしても孔子様の言葉には變りがない。

伊藤仁齋曰く

「何ヲカ天コレヲ知ルト謂フヤ。イハク天ニ心無シ、人ノ心ヲ以テ心ト爲ス。直ナルトキハスナハチ喜ビ、誠ナルトキハスナハチ信ズ。理到ルノ言ハ、人服セザルコト能ハズ。コレ天下ノ公是ニシテ、而シテ人心ノ同ジク然ル所、コレヲ以テ自ラ樂シム。故ニイハク、ワレヲ知ル者ハソレ天カト。コノ理ヤ磨レドモ磷ガズ、推ケドモ毀ラレズ。當時ニ赫著ナラザリシト雖モ、然カレドモ千載ノ下必ズコレヲ識ル者アリ。コレ聖

人ノ自ラ恃ミテ欣然トシテ樂シミ、以テ其身ヲ終ヘン所以ナリ。」

三六八

公伯寮子路ヲ季孫ニ懇フ。子服景伯以テ告ゲテイハク、夫子モトヨリ公伯寮ニ感志有リ。ワガカナホ能クコレヲ市朝ニ肆サン。子ノタマハク、道ノ將ニ行ハレントスルヤ命ナリ。道ノ將ニ廢レントスルヤ命ナリ。公伯寮ソレ命ヲイカンセン。

・「公伯寮」は魯の人。史記には門人の一人のやうに書いてあるが、さうではないらしい。

「子服景伯」は魯の大夫。子服は氏、景はおくり名、伯は字、名は何。

「肆」は罪人の死骸をさらしものにする事。「大夫ハ朝ニ於テシ、士民ハ市ニ於テス。」とある。

X X X X X

公伯寮が子路を季孫に讒言した。子服景伯が憤慨してこれを孔子に告げ、季孫は元來公伯寮を疑つてゐるのですから、私の力でもかれを誅して、街頭なり、役所なりにさらしものにする事ができます。やつつけてしまひませう。』といさました。孔子が言はるるやう、『イヤイヤ捨て置かれ

い。道が行はれるのも天命です。道がすたれるのも天命です。公伯寮ごときが天命をどうし得ませうぞ。御心配あるな。子路も安心せよ。』

「夫子モトヨリ云々」を、季孫は公伯寮に迷はされて子路を疑ふ氣持があるから打捨て置かれませんか、の意味に解する人もあるが、日本文に読み下しての口調からいふと、どうもさうではないらしい。

三六九 子ノタマハク、賢者ハ世ヲ辟ク。其次ハ地ヲ辟ク。其次ハ色ヲ辟ク。其次ハ言ヲ辟ク。子ノタマハク、作ッ者七人。

二章にした本もあるが、後段がそれだけでは意味をなさぬ故接続させた。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「賢人が仕へずに避け隠れる場合が四つある。第一は、天下無道なれば隠れる。第二に、亂國を去つて治邦に行く。第三に、君の容貌態度が禮を失へば去る。第四に、君を諫めて意見が合はなければ退く。かやうな行動をとつた昔の賢人が七人ある。』

「七人」をかぞへ立てる人もあるが、結局當推量だ。前にも云つたやうに此邊は支那當時の國情についての話故、深く論ずることもあるまい。「其次」「其次」とある所を見ると早く見限りを附けた方がより賢明、といふ意味がありさうだ。しかし孔子様自身此「賢人」たちにならうとはされなかつたのである。

三七〇 子路石門ニ宿ス。晨門シンモンイハク、イヅレヨリスル。子路イハク、孔氏ヨリス。イハク、コレソノ不可ナルヲ知リテコレヲ爲ス者カ。

「晨門」は早朝に開門する役、すなはち門番。

X

X

X

X

子路が魯の國境の石門といふ關所の手前に一泊して、翌朝門を通らうとしたら、門番が「どこから来たか。」とたづねた。子路が「孔家の者だ。」と答へたところ、門番の言ふやう、「それではあのだめだと知りながらあちこちしてゐる人の所からか。どうも御苦勞様な事ぢや。』

「晨門」も前章「七人」の類であらう。此門番や次章のモッコかつぎのやうに、「だめだと知りながら」とひやかす「賢人」たちが相當あつたらしいが、「だめだと知りながら」やむにやまれぬ所が、孔子様なのだ。古註に曰く、

「晨門ハ世ノ不可ナルヲ知ツテ爲サズ。故ニコレヲ以テ孔子ヲ譏ル。然レドモ聖人ノ天下ヲ視ルコト爲スベカラザルノ時無キヲ知ラザルナリ。」

三七一

子磬^{ケイ}ヲ衛ニ撃ツ。蕢^キヲ荷^{コナ}ヒテ孔子ノ門ヲ過^ワグル者アリ。イハク、心有ルカナ磬ヲ撃ツヤト。既ニシテイハク、鄙^イシキカナ磬^コ々^コ乎^コタリ。己ヲ知ルコトナクンバコレヤマンノミ。深^シケレバスナハチ厲^{レイ}シ、淺^シケレバスナハチ揭^{ケイ}スト。子ノタマハク、果^{クワ}ナルカナ。コレ難キコトナシ。

「磬」は矩形の石をつるした打楽器。朝鮮李王家の樂部で、「編磬」として一オクターヴをなす十二律の磬を連ねかけた珍しい樂器を見たことがある。「編鐘」といふのもあつた。

「深則厲。淺則揭。」は詩經の句。水が深ければ下ばきをぬぎ、水が淺ければ裾をまくる。臨機應變に行動するの意。

X X X X X

孔子様が衛に滞在中、つれづれなるままに磬を打つて楽しんで居られた。すると旅宿の門前をモッコをかついで通りかかつた賤^シの男^ヲが、それを聞きつけ、「ハテ心有りげな磬の打ちやうかな。』としばらく耳を傾けてゐたが、『どうもコチコチしたいやしい音色ぢや。天下國家を忘れ得ずして知られず用ひられざるをなげく氣持があらはれてゐるが、知られず用ひられなければやめるだけの話ぢやないか。「深ケレバ厲シ、淺ケレバ揭ス。」といふ詩があるが、此人は脊も立たぬ深い川を着物をきたまま渡らうとするわい。』かう言ひすてて行つてしまつた。門人がそれを聞いて、只今からかう申して通り過ぎた者がござりました、と申し上げたところ、孔子様が歎息しておつしやるやう『さても思ひ切りのよいことかな。さう思ひ切れるくらゐならば、何もむつかしいことはない。』

實にいい文章で、一場の好寸劇だ。古註に曰く、

「聖人ノ心ハ天地ニ同ジ。天下ヲ視ルコト猶ホ一家ノ如ク、中國猶ホ一人ノ如シ、一日モ忘ルルコト能ハザルナリ。故ニ蕢ヲ荷フ者ノ言ヲ聞イテ、ソノ世ヲ忘ルルノ果ナルヲ歎ジ、且人ノ出所モシタダカクノ如クンバスナハチ難キ所無キヲ言ヘルナリ。」

三七二 子張イハク、書ニ云フ、高宗諒陰三年言ハズトハ、何ノ謂ゾヤ。子ノタマハク、何ゾ必ズシモ高宗ノミナラン、古ノ人皆然リ。君薨ズレバ、百官己レヲ總ベテ、以テ冢宰ニ聽クコト三年ナリ。

「書」は書經周書無逸篇。「高宗」は殷の中興の王武丁。「諒陰」は諒闇、人君が喪に在ること。「冢宰」は大宰、すなはち總理大臣。

X X X X X X

子張が『書經に「高宗諒陰三年不言」とありますが、どういふわけですか。三年の喪中であつても、君が全然命令を出さなかつたら、國政が動かないではござりませうか。』とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、『必ずしも高宗のみであらうか。昔の人は皆さうであつた。君主が薨去になると、百官は各自の職務を引き締めて首相の指揮に従ふこと三年であつたから、其間君主が喪に在つて「三年言ハズ」でも、國政には差支なかつたのぢや。』

三七三 子ノタマハク、上禮ヲ好メバ、スナハチ民使ヒ易シ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『上に立つ爲政者が禮を好んで民に臨めば、人民も其風に化せられて禮を好むに至り、上下の分が定まつて、統治しやすくなるものだ。』

三七四 子路君子ヲ問フ。子ノタマハク、己ヲ脩ムルニ敬ヲ以テス。イハク、カクノ如キノミカ。ノタマハク、己ヲ脩メテ以テ人ヲ安ンズ。イハク、カクノ如キノミカ。ノタマハク、己ヲ脩メテ以テ百姓ヲ安ンズ。己ヲ脩メテ以テ百姓ヲ安ンズルハ、堯舜モソレ猶ホコレヲ病メリ。

X X X X X

子路が、君子とは何か、をおたづねしたら、孔子様が『慎んで怠ることなき自己修養によつて人格完成につとめるのが君子ぢや。』と答へられた。しかし子路には孔子様の眞意がわからず、甚だ物足りなく思つて、『タツタそれだけでござりますか。』と言つたので、かさねて『自己修養によ

つて人を安んずる、すなはち其人の人格完成の影響感化により其周囲の人を安定させそれぞれ其所を得しめるのが、君子の道ぢや。」と言はれた。ところが子路はそれでも満足せず、も一度『タツタそれだけでござりますか。』と押し返した。そこで孔子様がおつしやるやう、『自己修養の結果として百姓を安んずる、すなはち天下萬民が安定してそれぞれ其所を得るに至る、それが君子の道の極致であるが、「己ヲ脩メテ以テ百姓ヲ安ズル」といふことは、聖天子堯舜でさへも御苦心なされた難事であるから、お前などはまつ以て、「己ヲ脩メテ以テ人ヲ安ズル」あたりを目標としなれよ。』

孔子様は子貢に對しても『堯舜モソレ猶ホコレヲ病メリ』とおつしやつた(一四七)。子貢の智・子路の勇、とかく先走りたがるのを抑へられるのである。

三七五

原壤夷シテ俟ツ。子ノタマハク、幼ニシテ孫弟ナラズ、長ジテ述ブル無ク、老イテ死セズ、コレヲ賊ト爲スト。杖ヲ以テ其脛ヲ叩ク。

「原壤」は孔子様の古なじみらしい。母がなくなつた時、孔子様に葬儀萬端の世話をさせ自分は木に登つて歌

つてゐた、と傳へられる禮法無視の偽悪家である。「夷」は「ウヅクマル」とある。膝をだいてゐたのか、アグラをかいてゐたのか。

X

X

X

X

原壤があぐらをかいたままで孔子様の近寄るのを待ち受け、立つて迎へようとしなかつた。昔なじみとはいひながら、今日の孔夫子に對する禮でない。さすがの孔子様もムツとされて、『おさない時は目上に對して謙遜従順ならず、おとなになつても何一つ稱すべき善行もなく、年を取つても死にもせずに娑婆ふさげをしてゐる、さういふのを壽命盜人といふのぢや。』と言ひながら、持つたる杖で原壤のすねをたたかれた。

孔子様も中々手きびしい。昔なじみ故のたはむれだといふ説もあるが、必ずしもさうではあるまい。無禮不行儀は心安い間柄でも、まあいいわでは済まされないので孔子様である。

三七六

闕黨ノ童子命ヲ將フ。或ヒトコレヲ問ヒテイハク、益スル者カ。子ノタマハク、ワレソノ位ニ居ルヲ見ル。ソノ先生ト竝ビ行クヲ見ル。益ヲ求ムル者ニアラザ

ルナリ、速カニ成ランコトヲ欲スル者ナリ。

×

×

×

×

闕といふ部落出身の少年が孔子様の家で取次役をしてゐるのを見て、或人が『先生が取次をおさせになる所を見ると、よほど出来上つた少年と見えますな。』と言つた。孔子様がおつしやるやう、『イヤさうではありません。實はあの少年は生意氣で困るのです。少年は座敷の隅にすはるべきものなのに、あれはおとなの就くべき席にすはります。又年長者と行くときにはうしろからついて行くべきものであるのに、あれはおとなとならんであるきます。さやうな事では、はやくおとなぶつて速成に甘んじ、大器晩成を期するものとはいへませんから、行儀作法見習のために取次役をさせてゐるのであります。』

衛靈公第十五

此篇は一般的な修身處世の訓言を集めてあつて、特別な色彩傾向はないやうだ。

三七七

衛ノ靈公陳ヲ孔子ニ問フ。孔子對ヘテイハク、俎豆ノ事ハスナハチカツテコレヲ聞ケリ、軍旅ノ事ハ未ダコレヲ學バズト。明日遂ニ行ル。陳ニ在ツテ糧ヲ絶ツ。從者病ミテ能ク興ツナシ。子路慍リ見エテイハク、君子モ亦窮スルコト有ルカ。子ノタマハク、君子モトヨリ窮ス。小人窮スレバココニ濫ス。

はじめの「陳」は「陣」の古字だから、「ジン」とよむ。後のは國名で「チン」。

孔子様が衛から陳に行く途中、匡で其地の軍隊に囲まれて難儀されたことが、前に出てゐる(二一〇・二七五)。本章も同じ御難の時の話らし。

「俎豆」は供物臺とタカツキ等の祭具。

「明日」は「あした」のときは「ミョウニチ」、「あくる日」のときは「メイジツ」とよむ。

衛の靈公が孔子を引見されて戦争の事を問はれたので、孔子が「私も祭具のならば以前に聞いたことがござりますが、軍隊のならばまだ學んだことがござりません。」と答へて、そのあくる日衛の國を去つた。それは、自分に軍事を問はれるやうでは、禮樂を以て國を治めようといふ自分の意見の採用される見込はない、と斷念されたからである。そして楚の國へ行かうと思つて陳の國に通じ、かかつたとき、誤解のために軍隊に包圍され、數日間糧食が絶えたので、御供の門人たちが飢え疲れて立つこともできないほどであつた。そこで子路が孔子様の前に出て、「われわれ如き君子がかやうに窮迫するとは、有らうことか、有るまいことか、誠に心外千萬でござる。」と憤慨した。孔子様が泰然としておつしやるやう、「君子だともちろん窮迫することはある。しかし小人が窮迫すると、取り亂してわるあがきするものぞ。」

すなはち君子と小人との相違は窮境に立つて濫せざると濫するとにある。お前のやうに此くらゐの事できり立つのは小人のしわざぞ、とたしなめられたのである。『小人窮スレバココニ濫ス。』俗語で言へば『貧すりや鈍する。』此言葉は今日のわれわれにヒシヒシとひびく。果して濫してはゐないだらうか、見苦しくジク

バクしてはゐないだらうか、と深く反省したい。東洋の君子國と謂はれた日本がどうしてこんなひどい目にあふのだらうかと悲憤に堪へぬが、君子國であつたかどうかは別問題として、君子國だからとて敗戦はあり得る。孔子様が「モトヨリ」と言はれたのは實に意味が深い。しかしもし「ココニ濫シ」たならば、つひに小人國であつて、永久に君子國たり得ない。そして今日の國歩艱難は相當長く続くだらうから、「久シク約ニ處ル」覺悟が大事だと前に言つたのは（六八）、この事だ。

三七八 子ノタマハク、賜ヤナンヂワレヲ以テ多ク學ビテコレヲ識ル者ト爲スカ。對ヘ
テイハク、然リ、非ナルカ。ノタマハク、非ナリ。ワレ一以テコレヲ貫ク。

孔子様が子貢に向つて、『賜よ。お前はわしを博學な物知りと思ふか。』と言はれた。子貢が『もちろんさやうでござります。さうではないのでござりますか。』と言つた。孔子様がおつしやるやう、『さうではない。わしは仁の一事を以て萬事を貫いてゐるのみぞ。』

「知識」だけではないけない、「見識」をもちたい。私は、自ら物知りと思つてゐるわけではないのだが、人か

らは「雜學博士」といはれる。恥しいことだ。

孔子様は會參に向つても『一以テコレヲ貫ク』と言はれ、會子は『忠恕ノミ』と會得した(八一)。支那の或學者が此點をつかまへて、

『孔子ノ會子ニ於ケル、其問ヲ待タズシテ直チニコレニ告グルニコレヲ以テシ、會子マタ深クコレヲ喻リテ「唯」ト曰ヘリ。子貢ノゴトキハ、スナハチ先ヅ其疑ヲ發シテシカル後コレニ告グ。而シテ子貢終ニ亦會子ノ「唯」ノ如クナルコト能ハザルナリ。二子學ブノ淺深ココニ於テ見ルベシ。』

と論じた。すなはち子貢は會參に及ばぬ、といふのであつて、其見解が相當に行はれたらしいが、他の一學者は駁して、

『世儒ガ子貢ヲ卑視スル所以ハ、ソノ先ニ多學ノ旨ヲ「然リ」トスルガ爲メノミ。コレ然ラズ。子貢聖言ヲ聞クニアタリテ、ニハカニ應ヘテ「否」ト曰ハバ、弟子ノ師ヲ敬スル所以ニアラズ。故ニ對ヘテ「然リ」ト曰ヒ、而シテ繼グニ「非ナルカ」ノ問ヲ以テセリ。アニ知ルコト能ハズト爲サンヤ。』

と論じた。もちろん其通りであつて、本章では子貢が「唯」と言つたかどうかまで書いてないのだが、「與ニ詩ヲ言フベシ」と孔子様にほめられ(一五)、「一ヲ聞イテニヲ知ル」と自ら許した(一〇〇)明敏な子貢のこと故、必ず横手を打つて「なるほど」と感歎したに相違なし。

三七九 子ノタマハク、由ヨ、徳ヲ知ル者ハ鮮シ。

X

X

X

X

孔子様が子路におつしやるやう、『由よ。道德の尊さを知る人のさても少いことよなう。』

本章を前々章と直結して、子路をいましめられた言葉と解する學者が多いやうだが、子路といへば叱られるものときめこんではかわいさうだ。子路は正義派なのだから、ここなどはむしろ、御互のやうに徳を知る者はすくない、と子路に同感を求められたのだらう。

三八〇 子ノタマハク、無爲ニシテ治マル者ハ、ソレ舜カ。ソレ何ヲカ爲スヤ。己ヲ恭シクシ正シク南面スルノミ。

「南面」は天子の座位。易(説卦傳)に「聖人南面シテ天下ヲ聽ク。明ニ嚮ヒテ治ム。」とある。「明治」の元號はここから出たのだらう。

孔子様がおつしやるやう、『自身は何もしないで天下が治まつたのは舜であらうか。舜は一體何をなさつたか。行儀よくキチン、南を向いてすはつてござつただけぢや。』

「無爲而治」は老子の「無爲而化」とは違ふ。政治をしないのではないので、適材適所に賢人を用ひて政治をさせ、自身は何も爲さざるが如く知らん顔をしてゐるのだ。舜が賢人を用ひたことは、論語中三箇所に出てゐる(二〇二・二〇四・三〇〇)。

三八一 子張行ハレンコトヲ問フ。子ノタマハク、言忠信、行篤敬、蠻貊ノ邦ト雖モ行ハレン。言忠信ナラズ、行篤敬ナラズ、州里ト雖モ行ハレンヤ。立テバスナハチ其ノ前ニ參ハルヲ見ル。興ニ在レバソノ衡ニ倚ルヲ見ル。ソレ然ル後ニ行ハレン。子張コレヲ紳ニ書ス。

X . X X X X

子張が「自分の思ひ通りが行はれるにはどうしたら宜しからうか」とおたづねしたら、孔子様が「言ふ事が忠實で信用が置け、する事が眞面目で鄭重であれば、南蠻北狄といふやうな野蠻國に行つても思ひ通りが行はれよう。言ふ事がためであてにならず爲る事が輕薄で不謹慎だつたら、自分の郷里でも思ふやうにはなるまい。忠信篤敬の四字が、立つてゐれば目の前にチラチラするやうに見え、車に乗つてゐればながえのはしの横木にぶらさがつて見えるやうになつて、はじめて自分の思ひ通りのことが行はれるぞよ。」と教へられた。子張が大さう喜んで、忠信篤敬の四字を大帶の垂たれに書き付け、常に目に觸れるやうにして置いた。

澁澤榮一は本章が特に好きで、息子を「篤二」孫を「敬三」と命名した。

三八二 子ノタマハク、直ナルカナ史魚、邦道有レバ矢ノ如ク、邦道無キモ矢ノ如シ。君子ナルカナ蘧伯玉。邦道有レバスナハチ仕へ、邦道無ケレバ卷キテコレヲ懷ニスベシ。

「史魚」は衛の大夫、「史」は姓だといふ説と、史官すなはち官名だといふ説とある。

「懷」を「オサム」とよむ人もある。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『剛直なるかな史魚は。國に道があつて治まれる時に矢のやうに眞直ぐなのはもちろん、國に道なくして亂れてゐるときにも矢の如くまがらない。君子であるかな蘧伯玉は。國に道が行はれば出でて仕へ、國に道が行はなければ才智を卷いて懷にかくしてゐる。』

どちらがまさるとも言はれないが、今までの調子から言ふと、史魚の直は感すべきだが、蘧伯玉の君子たる域には達せぬ、とされるのらしい。此邊が例の支那戰國思想で、われわれには納得し得ないものがある。

三八三

子ノタマハク、與ニ言フベクシテコレト言ハザレバ人ヲ失フ。與ニ言フベカラズシテコレト言ヘバ言ヲ失フ。智者ハ人ヲ失ハズ、亦言ヲ失ハズ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『共に語るに足る人に出あひながらこれと話をしないと、人を失ふ、

すなはちせつかくの善い相手を取りにがす。話してもわからぬ人をつかまへて語ると、言を失ふ、すなはちせつかくの言葉をむだにする。よく相手の人物を見定めて、語るべき時に語り黙すべき時に黙するのが智者といふものぞ。』

「言ヲ失フ」を日本流に言へば、「あつたら口に風を引かせる。」

三八四

子ノタマハク、志士仁人ハ生ヲ求メテ仁ヲ害スルコト無シ。身ヲ殺シテ仁ヲ成スコト有リ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『生きることの大切なのは言ふまでもないが、人が仁ならざるべからざることはさらに大切ぢや。それ故、仁を得た人はもちろん、いやしくも仁に志すほどの者は、命が惜しさに仁の徳を害するやうなことはしない。場合によつては命を捨てても仁を成就するものぞ。』

これは有名な又大した金言だ。宋の文天祥がかの正氣歌を作つた獄中で最後まで懷中にしてゐた「衣帶中ノ

贊」に

『孔ハ仁ヲ成スト曰ヒ、孟ハ義ヲ取ルト曰フ。タダソレ義盡ク、仁至ル所以ナリ。聖賢ノ書ヲ讀ミテ、學ブ所何事ゾ。今ニシテ後、愧ヅルコト無キニ庶幾シ。』

とあるのも、これから出てゐる。佐藤一齋は、

『此章ハ危難ノ際ニ就キテコレヲ言フヲ本トスレドモ、シカモ平常ニモ亦此事アリ。生ヲ營ムニ汲汲トシテ義理ヲ顧ミザルガ如キモ、亦コレ生ヲ求メテ仁ヲ害スルナリ。己ノ私ヲ克治シ以テ心體ヲ完ウスルモ、亦コレ身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成スナリ。』

と説く。今日の窮境に於て、特に此事を痛感する。「身ヲ殺シテ仁ヲ成ス。」には至らずとも、願はくは「生ヲ求メテ仁ヲ害」したくないものだ。

三八五

子貢仁ヲ爲サンコトヲ問フ。子ノタマハク、工其事ヲ善クセント欲スレバ、必ズ先ヅ其器ヲ利クス。コノ邦ニ居ルヤ、其大夫ノ賢ナル者ニ事ヘ、其士ノ仁ナル者ヲ友トセヨ。

X

X

X

X

子貢が仁を行ふ方法をおたづねした。孔子様がおつしやるやう、「大工が善い仕事をしようと思へば、まづ「のみ」をとぐやうなもので、仁を行ふにはまづ以て自身の仁徳をみがかねばならぬ。それには其國々で、大夫の賢い人をえらんでこれに事へ、仁徳あるの士をえらんでこれを友とすることが肝要ぢや。』

三八六

顔淵邦ヲ爲ムルコトヲ問フ。子ノタマハク、夏ノ時ヲ行ヒ、殷ノ輅ニ乘リ、周ノ冕ヲ服シ、樂ハスナハチ韶舞、鄭聲ヲ放チ、佞人ヲ遠ザク。鄭聲ハ淫ニ、佞人ハ危シ。

「クニ」といふ所に「國」を書いたり「邦」を書いたりしてゐるが、「邦」の方が意味が廣いらしい。古註に「顔子ハ王佐ノ才ナリ。故ニ天下ヲ治ムルノ道ヲ問フ。邦ヲ爲ムルハ謙辭ナリ。」とあるのに對し、中井履軒曰く、

『邦ハ國ト天下トニ通ジテ言フ。謙辭ニアラズ。』

X

X

X

X

顔淵が天下を治める道をおたづねした。孔子様がおつしやるやう、「過去歴代の長を探らねばならぬ。すなはち曆法は、夏の大陰曆が農事に便利だから、これを用ひる。車は、殷のものが儉素で堅牢だから、これに乗る。冠は、周のものが華美ならず粗略ならず中正を得てゐるから、これをかぶる。音樂は、申すまでもなくかの善を盡し美を盡した舜の韶の舞樂ぢや。そして鄭の國の歌謠曲のやうな俗樂を放逐し、辯口のみへのつらひ者なる佞人を退け遠ざける。俗樂はみだりがましく、佞人は國を危くするぞよ。」

参照——六五・一六〇・四四九

三八七 子ノタマハク、人遠キ慮^{オモシバカ}リ無ケレバ必ズ近キ憂ヒ有リ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「人に遠い將來までの見通しがないと、たちまち足元からのわざわひが起るぞ。」

「遠慮」といふ言葉が別の意味に轉用されてゐるが、元來は文字通り先の先までを考へて用心することだ。將棋の方では「ヨミ」といふやうだが、名人上手となると、かう行けばあ來る、これを捨ててあれをとると、局面の變化を終盤まで考へて見た上で手をさす。われわれは「へボ將棋王より飛車を大事がり」、目の前だけの行きあたりバツタリで、たまに考へ込んでも、「下手の考へ休むに似たり」だから、勝つことはないのだ。

三八八 子ノタマハク、已⁺ンヌルカナ、ワレ未ダ徳ヲ好ムコト色ヲ好ムガ如クナル者ヲ見ザルナリ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、「困つたことかな、わしはまだ徳を好むことが女色を好む如く熱烈な者を見たことがない。どうかさやうな道德熱情家を見たいものぢや。」

本文は前に一度出てゐるが(二二二)、「已ンヌルカナ」が附いてゐない。「ヤンヌルカナ」は前にもあるが(一一三)、前のは「已矣夫」ここは「已矣乎」と書いてある。前のは「ステニ望ヲ絶チテ歎ズル辭」、ここは「將ニ望ヲ絶クントシテ尙ホ疑フ所アリ、其人ヲ見シコトヲ冀フノ意」と註されてゐる。漢文にはか

ういふ微妙な使ひ分けがあるから、よほど味つて譯さないといけない。日本語でも同じ事だ。例の戦争犯罪裁判は通譯附なので、時々奇妙な行違ひがあるらしい。たとへば、「たしかそうだったと思ひます。」と述べたのを、通譯が「シユアー」とか「シユアリー」とかすなはち「たしかに」と譯するので、まるで違つた意味になる、といふやうなことがしばしばあつた由。

三八九 子ノタマハク、^シ臧文仲ハソレ位ヲ^ヌ竊ム者カ。柳下惠ノ賢ヲ知リテ、而カモ^ト與ニ立タザルナリ。

「臧文仲」は魯の大夫で、「イカンゾソレ知ナラン。」と孔子様に非難されたことが、前に出てゐる（一〇九）。

「柳下惠」は魯の大夫展獲、字は禽、柳下は其食邑の名、惠はおくり名、とあるが、本名よりも「柳下惠」で有名。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『臧文仲は祿盜人よな 柳下惠が賢人であることを知りながら、これ

を推薦して共に朝廷に立つことをしなかつた。』

中々手きびしい。公叔文子を褒めたのと（三五〇）、好對照だ。

古註に曰く、

『モシ賢ヲ知ラズンバコレ不明ナリ。知リテ擧ゲズンバコレ賢ヲ蔽フナリ。不明ノ罪ハ小ナルモ、賢ヲ蔽フノ罪ハ大ナリ。故ニ孔子以テ不仁ト爲シ、又以テ位ヲ竊ムト爲ス。』

三九〇 子ノタマハク、躬自ラ厚クシテ、人ヲ責ムルニ薄クレバ、スナハチ怨ミニ遠ザカル。

「薄ク人ヲ責ムレバ」とよむ人もある。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『自身を責めることが嚴重で、他人を責めることが寛大であれば、人をも怨まず、人からも怨まれないものだ。』

ところが人情とかく逆になるので、うらみつらみが起る。
 伊藤仁齋がかういふ話を傳へてゐる。
 『宋ノ呂祖謙、性ハナハダ偏急ナリ。タマタマ論語ヲ讀ミテココニ至リ、大ニ自ラ感悟シ、後來一向ニ寛厚
 和易ナリ。善ク論語ヲ讀ム者ト謂フベシ。』

三九一 子ノタマハク、コレヲ如何、コレヲ如何、ト曰ハザル者ハ、ワレコレヲ如何ト
 モスルナキノミ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『どうしよう、どうしよう、と言はないやつは、どうしようもないわ
 5。』

論語中最も簡単に最も痛烈な言葉と申したい。前の「啓發」の章(一五五)の結論である。

三九二 子ノタマハク、羣居終日、言義ニ及バズ、好ンデ小慧ヲ行フ。難イカナ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『日がな一日寄りこぞつてゐながら、話題が一度も道德問題に觸れ
 ず、鼻先の小才覚ばかりを得意がるとは、やつかいな事かな。』

「難イカナ」を「以テ德ニ入ルコト無クシテ將ニ患害有ラントスルヲ言フナリ。」とするのが通説だが、モツ
 ト漠然と前記のやうな歎息の言葉として置きたい。
 昨今の私たちはどうだ。寄るとさわるとたべもの話と物價のたかいやすい、かうして闇を買つた、ああし
 て税をまぬかれた、の猿智慧くらべ、「難イカナ難イカナ」。

三九三 子ノタマハク、君子ハ義以テ質ト爲シ、禮以テコレヲ行ヒ、孫以テコレヲ出ダ
 シ、信以テコレヲ成ス。君子ナルカナ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『君子が事を爲すには、道義を以て土臺とする。しかし道義一點張りで押し通さうとすると、人の感情を害しかへつて道義が通らぬ故、禮を以てほどよくこれを行ひ、随つて言葉を出すにも謙遜をむねとし、言行一致の信を以て道義を成就する。それでこそ君子なれ。』

三九四

子ノタマハク、君子ハ能無キヲ病フ、人ノ己ヲ知ラザルヲ病ヘズ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『君子たるべき者は、自分に才能の無いことを心配して、學を修め徳に進まんことを思ふが、人が自分を知らないことを心配しなす。』

前にも言つた通り、此趣旨が四回少しづつ違つた文句で出て来る(一六・八〇・三六二)。

三九五

子ノタマハク、君子ハ世ヲ没スルマデ名ノ稱セラレザルヲ疾ム。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『君子たる者、此世を去るまで名が聞えないやうでは困る。』

たちまち前章と矛盾するやうに聞えるがさうではあるまい。ここで「名」といふのは、いはゆる名譽ではなす。もちろん空名虚譽ではない。古註に

『君子ノ學ハ以テ己ノ爲メニス、人ノ知ルヲ求メズ。然レドモ世ヲ没スルマデ名ノ稱セラレザルハ、善ヲ爲スノ實無キヤ知ルベシ。』

『コノ實有レバスナハチコノ名有リ、名ハソノ實ニ命ズル所以ナリ。其身ヲ終フルマデ實ノ名ヅクベキ無キハ、君子コレヲ疾ム。其名無キヲ疾ムニアラザルナリ、其實無キヲ疾ムナリ。』

などである。又安井息軒も曰く、

『聖賢未ダカツテ名ヲ惡マズ。ソノゴレヲ惡ムハスナハチ老莊ノ徒ノミ。カノ輩隱居放言シテ、名ノ害ヲ致サンコトヲ恐ル。故ニ務メテコレヲ避ケテ敢テ近ヅカズ。聖賢ハスナハチ然ラズ。故ニ孝經ニ曰ク、「名ヲ揚ガ父母ヲ顯ハス」ト。論語ニ曰ク、「四十五ニシテ聞ユルコト無クンバ、コレ亦長ルルニ足ラザルノミ。」ト(二二七)。孟子曰ク、「名ヲ好ムノ人ハ能ク千乘ノ國ヲ讓ル。」ト。及ビ此章ノ如キコレナリ。』

山上憶良は瀕死の病床で、

をのこやもむなしかるべきよろづよにかたりつぐべきなはたすして (萬葉集)

と慷慨したが、しかしこれは歌によつてよろづよに生きてゐる。

三九六 子ノタマハク、君子ハコレヲ己ニ求人、小人ハコレヲ人ニ求ム。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『事がうまく行かないときに、君子は自分の身に立ちかへつて反省するが、小人はすべてを他人の責任にする。』

伊藤仁齋曰く、

『コレ亦孔子ノ家法ナリ。中庸ニ云フ、「射ハ君子ニ似タル有リ、コレヲ正鵠ニ失ハバ反リテコレヲ其身ニ求ム」ト。孟子ニ曰ク、「人ヲ愛シテ親シマレザレバ其仁ニ反リ、人ヲ治メテ治マラザレバ其智ニ反リ、人ヲ禮シテ答ヘラレザレバ其敬ニ反ル」ト。古ノ君子ハ自ら修ムルコトカクノ如シ。故ニ徳日ニ修マリテ、家邦怨ミ無シ。』

三九七 子ノタマハク、君子ハ矜ニシテ争ハズ、羣シテ黨セズ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『君子は謹嚴に構へてゐるが、何でも反対しようといふやうな気がないから、むやみに人と争はない。又たれかれのわけへだてなく人とむれ親しむが、おもねりへつらふ私情がないから、同氣相求めて黨を作るやうなことがない。』

いはゆる「和シテ同ゼズ」(三二五)「泰ニシテ驕ラス」(三二八)である。

三九八 子ノタマハク、君子ハ言ヲ以テ人ヲ擧ゲズ、人ヲ以テ言ヲ廢セズ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『君子は公平でしかも明敏だから、りつばな事を言つたからといふだけでは其人を信用せず、言つた人が悪いとか賤しいとかいふので善い言葉を捨てない。』

三九九 子貢問ヒテイハク、一言ニシテ以テ身ヲ終フルマデコレヲ行フベキ者有リヤ。

子ノタマハク。ソレ恕カ。己ノ欲セザル所人ニ施スナカレ。

「恕」は孔子様のきまり文句の一つだが(八一)、文字を見ても「心」と「如」とを合せたもので、他人の心も己の心の如くなるべしと思ひやることである。

「己ノ欲セザル所」の格言は既に前にも出て居り(二八〇)、そこで説明した。

X

X

X

X

子貢が『ただ一言で一生の行爲の準則たり得るものがござりますか。』とおたづねしたら、孔子様がおつしやるやう、『まづ「恕」かな。恕は結局、自分がされたくないことを人にするなといふことぢや。』

四〇〇

子ノタマハク、ワレノ人ニ於ケル、誰ヲカ毀リ誰ヲカ譽メン。モシ譽ムル所ノ者有ラバ、ソレ試ムル所有ルナリ。斯ノ民ヤ、三代ノ直道ニシテ行ク所以ナリ。

「直道ニシテ行フ」とよむのが普通だが、道だから「ユク」とよんで見た。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『わしは人に對して、誰をそしり誰をほめようぞ。無責任にほめたりそしつたりしない。もしわしがほめたならば、それは實際に其行をためして見た上のことぢや、今日の八民は、ずいぶん悪い事もするが、元來昔の夏殷周三代の純朴の民と同じくまっすぐな一本道を行く徳性をもつてゐるのであつて、それが横道にきれ込むのは、必ずしもかれらの罪ばかりでなく、教育や政治にも責任があるのだから、めつたにほめもそしりもできぬではないか。』

古註に曰く、

『今コノ人民モ亦三代ノ民族ナリ。三代ノ時ニ在リテハ、皆邪惡ノ事ヲ爲サズ、淳良直道ニシテ行ヒシ所ノ者ナリ。而ルニ今時ノ民ノ古ノ如クナラザルハ、天ノオラ降スシカク殊ナルニアラズ、皆政教風化ノ宜シキヲ失フニ因リテ然カルノミ。故ニコノ傷歎アリ。』

四〇一

子ノタマハク、ワレ猶ホ史ノ文ヲ闕キ、馬有ル者ハ人ニ借シコレニ乘ラシムルニ及ベリ。今ハ亡キカナ。

本章には疑問があるのであつて、荻生徂徠も、

『史ノ下モト闕文アリ。故ニ註スルニ「闕文」ノ二字ヲ以テセリ、後人傳寫シテ誤リテ本文ニ入レシナリ。』
と言つてゐる。或はさうかも知れぬが、ともかく一應読み且解して見た。

「借」は古くは「貸」の意にも用ひた。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『昔は記録をつかさどる史官が、少しでも疑點があれば空白にして置いてなほ十分調査した上おぎなつたものであり、又馬の所有者は惜しげなく人に貸して乗らせたまので、わしの若い頃にはまだ其風がのこつてゐて見聞きもしたが、今では其風習もなくなつてしまつた。一事が萬事で、道義の低下、風俗の頹廢、なげかはしい事ぢや。』

四〇二 子ノタマハク、巧言ハ徳ヲ亂リ、小ヲ忍バザレバ大謀ヲ亂ル。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『言葉上手は道德を害し、小勸忍ができぬと大事業が成らぬ。』

「小忍ビザレバ」とよんで、小さな感情を断ち切れぬと、の意に解する人もある。

四〇三 子ノタマハク、衆コレヲ惡ムモ必ズ察シ、衆コレヲ好ムモ必ズ察ス。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『人でも物でも事でも、衆人のにくむ所、衆人の好む所には十分重きをおかねばならぬが、しかし衆人のすきさらひは必ずしも公平適正ではないから、上に立つ人は、衆人がにくんでも必ず其真相をさぐり、衆人が好んでも必ず其實状を察し、其上でにくむべきか好むべきかを判断せねばならぬ。』

これは民主政治の指導者たる者のための金言である(六九)。孟子(梁惠王章句下)の左の一段は、正に本章の解説だ。

『左右皆賢ナリト曰フモ、未ダ可ナラズ。諸大夫皆賢ナリト曰フモ未ダ可ナラズ。國人皆賢ナリト曰ヒテ、』

然ル後ニコレヲ察シ、賢ナルヲ見テ然ル後ニコレヲ用フ。左右皆不可ナリト曰フモ聽クコトナカレ。諸大夫皆不可ナリト曰フモ聽クコトナカレ。國人皆不可ナリト曰ヒテ、然ル後ニコレヲ察シ、不可ナルヲ見テ然ル後ニコレヲ去ル。左右皆殺スベシト曰フモ、聽クコトナカレ。諸大夫皆殺スベシト曰フモ、聽クコトナカレ。國人皆殺スベシト曰ヒテ、然ル後ニコレヲ察シ、殺スベキヲ見テ然ル後ニコレヲ殺ス。故ニ國人コレヲ殺スト曰フナリ。カクノ如クニシテ然ル後ニ、コレ民ノ父母タルベシ。』

四〇四 子ノタマハク、人能ク道ヲ弘ム。道人ヲ弘ムルニアラズ。

水戸の「弘道館」といふ名稱はここら出てゐる。「弘」は「大きくする」といふこと。第二句は初句に對する言葉のあやで、大した意味はない。考へ方によつては道が人を弘めることもあるではないか、などと理窟を言つては困る。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「道はもろん人を待つて存するものではないけれども、人を待つて擴大強化されるものぢや。すなはち人が道をひろめるもので、道が人をひろめるのではないから、人

たる者は道を弘めんがために立志努力すべきである。』

伊藤仁齋曰く、

『コレ聖人専ラ成ルヲ人ニ責ムルナリ。ケダシ道ハ大ナリト雖モ、シカモ爲スコトナシ。人ハ小ナリト雖モ、シカモ知ルコトアリ。イヤシクモ學ヲカメ徳ヲ修ムレバ、スナハチ各其才ニ隨ヒテ聖ト爲リ賢ト爲リ、文章徳業天下ヲ被覆スルニ足ルナリ。ケダシ堯舜ノ聖アリテスナハチ唐虞ノ威アリ。湯武ノ君アリテスナハチ殷周ノ治アリ。上孔孟ヨリ下羣賢ニ至ルマデ、各其人ニ從ヒテ文學徳業隨ヒテ廣狹アリ。皆人ノ弘ムル所ニシテ、道ノ弘ムル所ニアラズ。コレ孔門ノ學問ヲ貴ブ所以ナリ。』

四〇五 子ノタマハク、過チテ改メザル、コレヲ過チト謂フ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「過ちは致し方ないが、過つても改めないのが、本當の過ちといふものぢや。』

孔子様は、過つなどは言はれない。過つたら改めると言はれる(八・二二九)。又顔回をほめるにも、過ちをしなかつたとは言はず、過ちをふたたびしなかつたのがえらいと言はれる(二二二)。子夏や子貢も其意を受けて、過ちをかざるを小人とし過ちをあらためるを君子とする(四七六・四八九)。孟子(公孫丑下篇)に、『古ノ君子ハ過チテハスナハチコレヲ改ム。今ノ君子ハ過チテハスナハチコレニ從フ。』とあるのも、同じ流れの考へ方だ。

四〇六 子ノタマハク、ワレカツテ終日食ハズ終夜寢ネズ、以テ思フ。益無シ。學ブニ如カズ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『わしは前方まへかた、一日飯も食はず、一晚マンシリともせず考へたが、得る所がなかつた。學ぶに限る。』

孔子様は「思」と「學」と平行すべしと言はれるのだが(三一)、ここでは「思ヒテ學バザル」者ニ對して投棄されたのである。そしてこれは假設ではなくて體驗らしい。現に自身で、「憤ヲ發シテハ食ヲ忘レ」たと

言はれた(一六五)。

四〇七 子ノタマハク、君子ハ道ヲ謀リテ食ヲ謀ラズ。耕スヤ餒其中ニ在リ、學ブヤ祿其中ニ在リ。君子ハ道ヲ憂ヘテ貧ヲ憂ヘズ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『君子たる者が學問をするのは、いかにしたら道を求め得ようか、といふのがねらひで、衣食をはかるのではない。農民が耕すのは食を得るのが目的だらうが、いくら耕しても凶年にあへば食を得ないで餓えることもあるではないか。反對に、學問するのは衣食が目ではないけれども、學成ればおのづから俸祿を受けることにもなるのぢや。それ故に君子は、道の得られざるをこそ心配すべけれ、用ひられずして貧賤なのを心配する理由はないぞよ。』

四〇八 子ノタマハク、知コレニ及ブモ、仁能クコレヲ守ラザレバ、コレヲ得ト雖モ必ズコレヲ失フ。知コレニ及ビ、仁ヨクコレヲ守ルモ、莊以テコレニ泄マザレバ、民敬セズ。知コレニ及ビ、仁能クコレヲ守リ、莊以テコレニ泄ムモ、コレヲ動

カスニ禮ヲ以テセザレバ、未ダ善カラザルナリ。

X . X . X . X .

孔子様がおつしやるやう、「人君たる者、知が其位に適應しても、仁徳を以て其位を守ることができなければ、其位を得てもやがてそれを失ふであらう。知が其位に適應し、仁が其位を守るに足りても、威嚴を以て民に臨まなければ、民は君を敬はぬであらう。知が其位に適應し、仁が其位を守るに足り、威嚴を以て民に臨んでも、民を使ひ動かすに禮を以てしなければ、まだ理想的でない。」

参照——一九・三六

四〇九

子ノタマハク、君子ハ小知セシムベカラズシテ大受セシムベシ。小人ハ大受セシムベカラズシテ小知セシムベシ

本章の「君子」「小人」は、徳不徳又は上下よりは、むしろ大人物小人物。

X . X . X . X .

孔子様がおつしやるやう、「大人物には、區々たる小技術を扱はせ得ないが、國家の盛衰興亡を引受けさせ得る。小人物には、天下の大事は擔任させ得ないが、雜用小事務は扱はせ得る。」

古註に曰く、

『君子ノ務ムルモノハ大ナリ。書算米鹽一切ノ巧緻ナル技藝ノ如キハ、必ずシモ多能ナラズ。コレ小知セシムベカラザルナリ。孤ヲ託シ命ヲ寄セ（一九〇）、君ヲ堯舜ニシ、人民ニ澤スル等ノ如キハ、其重任ヲ受クルニ足ル。コレ大受セシムベキナリ。』

四一〇 子ノタマハク、民ノ仁ニ於ケルヤ、水火ヨリモ甚シ。水火ハワレ踏ミテ死スル者ヲ見ル。未ダ仁ヲ踏ミテ死スル者ヲ見ザルナリ。

X . X . X . X .

孔子様がおつしやるやう、「水と火は人民日常生活の必要物で、これなくしては一日片時も生存

し得ないが、仁を失つたら人の人たる所以が無くなり、生きがひのないことになるのだから、仁の方が人間に取つて水や火よりも大切である。其上水や火は、生きるために必要ではあるけれども、時には水の底火の中に踏み込んで溺れ死に焼け死ぬ者をも見ることがだが、わしはまだ仁の道を踏んで死んだ者を見たことがない。それなのに人はなぜ仁に赴くことをためらうのであらうか。

「水火を踏んで死ぬ勇者は見るが、仁を踏んで死ぬ勇者を見たことがない。」といふ意味に解する人もある。それも面白いが、初句との續きがうまく附かないやうだ。

四一一 子ノタマハク、仁ニ當リテハ師ニ讓ラズ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『仁を行ふには、先生に遠慮はいらぬ。』

佐藤一齋曰く、

『讓ラズトハ、猶ホ後レズト言フガ如シ。勇往ノ心ヲ狀スルノミ。』

中井履軒曰く、

『仁ヲ爲スニ讓ルベカラザルハ、父母ニ孝スルガ如キ、人ニ讓リテ先ヅ孝ヲ爲サシメ、孺子ノ將ニ井ニ入ラントスルヲ見ルガ如キ、人ニ讓リテ先ヅ救ハシメ、身ヲ殺シテ仁ヲ爲スガ如キ、人ニ讓リテ先ヅ死セシム、アニ此理アラシヤ。讓ラザルノ甚シキコトハ、師ト雖モ亦讓ラザルナリ。』

四一二 子ノタマハク、君子ハ貞ニシテ諒ナラズ。

「貞ハ正シクシテ固キナリ。諒ハスナハチ是非ヲ擇バズシテ信ニ必スルナリ。」とある。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『君子は、道理の正しい所は固く守つて動かぬが、理非曲直を擇ばず、に初一念に執着するやうなことがない。』

四一三 子ノタマハク、君ニ事ヘテハ、其事ヲ敬シテ其食ヲ後ニス。

孔子様がおつしやるやう、國家の官吏としては、職責を重んじ所管事務に精勵することがまつ第一で、食祿俸給などを問題にすべきでない。』

X

X

X

X

四一四 子ノタマハク、教へ有リテ類無シ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、人は教育によつて善とも惡ともなるもので、はじめから善人惡人の類別があるわけではなう。』

参照—四三三

四一五 子ノタマハク、道同ジカラザレバ相爲メニ謀ラズ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『根本主義が違つては相談にならぬ。』

これだけでは意味がハッキリしないが、皆川棋園の左の説明で大體見當がつきさうだ。

『靈公兵ヲ強クシテ以テ威ヲ立テント欲シ、夫子ハ道ヲ修メテ民ニ仁セント欲ス。コレ道同ジカラザル者ナリ。ソレ道同ジカラザレバ、スナハチ各其趣ヲ殊ニス。カレノ好ム所ノモノハ、ワレノ惡ム所ノモノナリ、カレノ重ンズル所ノモノハ、ワレノ輕ンズル所ノモノナリ。ソレカレハワガ惡ミ且輕ンズル所ノモノヲ以テス、シカルニワレコレガ爲メニ對ヘ、コレガ爲メニ謀ル。コレ詔ヒニアラザレバ、スナハチ詐リナリ。親附ヲ求メテ其身ヲ利センコトヲ欲スル者ノミ、君子ノ「其食ヲ後ニスル」(四一三)ノ義ニアラザルナリ。コレ故ニ、夫子ノ對ヘズシテ行リシモノハ、軍旅ノ事ヲ知ラザルニアラズ、スナハチ道ノ同ジカラザルヲ以テノ故ナリ。』

四一六 子ノタマハク、辭ハ達シテ已ム。

「辭」は、「辭命」で外交文書だ、とする説もあるが、廣く一般の言語文章と見る方が宜しい。「達センノミ」とよむ人もある。それだと「達すればそれでよろしい」といふ意味が強くなる。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「言語文章は意味の通することが肝心ぢや。」

支那は元來が言語文章の國であり、又孔子様の門人には、子貢をはじめ口達者文章上手が多かつたらうから、つひむやみと美辭麗句をつらねてかへつて意味が通らなくなるなどもありさうだ。そこで孔子様がかう言つて引きしめられたのだ。しかし「達スル」といふのは、「意味さへわかれば」といふのではなく、意味が十分に通すること、すなはち、「達意」である。それ故ただ短かければよいといふのではない。論語と孟子とをならべて見ると、孔子様は口數が少なく、孟子はおしやべりなのが、實に好對照であつて、しかも双方共に名文である。そして論語は短文だけれども、その含みが多く、かみしめればかみしめるほど味が出て來ることは、今まで讀み進んだ所でもよくわかるのであつて、これが本當の「辭ハ達シテ已ム」もの、孟子の「これでもか、これでもか」とたたみかけるのよりかへつて効果的だとも言へる。「歌よみはへたこそよけれあめつちが動き出してはたままるものか」といふ狂歌があるが、孔子様はけつして、言語文章は「へたこそよけれ」と言はれるのではない。本當に上手な言語を語り文章を書けと言はれるのだ。新生日本の最大問題の一つは國

字國語問題であつて、漢字制限文章平易化の持論いよいよ實現の時節到來と喜んでゐるが、此際くれぐれ希望するのは、「わかりさへすれば」といふ誤解のないことだ。本文を「達センノミ」とよまずに「達シテヤム」とよんだのも、多少は其意味だが、「達シ」たかしら。

四一七

師冕見ユ。階ニ及ブ。子ノタマハク、階ナリ。席ニ及ブ。子ノタマハク、席ナリ。皆座ス。子コレニ告ゲテノタマハク、某ハココニ在リ、某ハココニ在リ。師冕出ヅ。子張問ヒタイハク、師ト言フノ道カ。子ノタマハク、然リ。モトヨリ師ヲ相クルノ道ナリ。

X X X X X

盲樂師の冕が來訪した。孔子様が自身出迎へて案内され、階段まで來ると、「段々ですよ。」と言はれ、座敷へ來ると、「サア御席ですよ。」と言つて著席させる。そして一同の座が定まると、「あなたの右は何さんです、左はだれそれです。」といふ風に同席者の名前と席順とを一々告げられた。師冕が歸つた後、子張が「あれがめくら法師と語る作法でござりますか。」とおたづねしたら、孔子様がおつしやるやう、「さうぢや。そもそも盲人はああいふ風に介抱すべきものぞ。」

盲人に同情的敬意をあらはれたことは前にも出てゐたが（二二四）、孔子様が老ひたる音楽師を接待される懇切な様子が目に見えるやうだ。

季氏第十六

此篇は他の篇と多少體裁を異にしてゐる。元來論語には其昔「魯論」「齊論」「古論」の三系統があつたと言はれる。「魯論」は魯國に傳はつたもの、「齊論」は齊國に傳はつたもの、「古論」は例の孔子様の舊宅の壁の中から發見されたものといふのだが、どれもそのままにはのこつて居らず、現行のものは魯論を元にし齊古兩論を參考して出來たものらしい。そこで本篇は「齊論」系統だといはれるのだが、なるほど「子曰」とせず「孔子曰」となつてゐること、「三友」「三樂」「三愆」「三戒」「三畏」「九思」などといふものなべてある點など、調子が違ふ。もつとも右の「孔子曰」は、本篇が首章の外はすべて門人以外に對する言葉だからだといふ人もある。ともかくも第二章以下の「曰」は「ノタマハク」でなく「イハク」とよみ、現代語譯の方も「孔子が申すやう」として、言葉づかひもていねいにして置いた。

四一八 季氏將ニ顓臾ヲ伐タントス。冉有季路孔子ニ見エテイハク、季氏將ニ顓臾ニ事有ラントス。孔子ノタマハク、求ヨ、スナハチナンヂコレ過ツ無キカ。ソレ顓臾ハ、昔者先王以テ東蒙ノ主ト爲セリ。且邦域ノ中ニ在リ。コレ社稷ノ臣ナリ。何ゾ伐ツコトヲ以テ爲サン。冉有イハク、夫子コレヲ欲ス。ワガ二臣ノ者ハ皆

欲セザルナリ。孔子ノタマハク、求ヨ、周任言ヘル有リ。イハク、カヲ陳ベテ列ニ就キ、能ハザレバ止ムト。危クシテ持セズ、顛リテ扶ケズンバ、スナハチ將タナンゾカノ相ヲ用ヒン。且ナンデノ言過テリ。虎兇狎ヨリ出デ、龜玉櫝中ニ毀ル、コレ誰ノ過チゾヤ。冉有イハク、今ソレ顛叟ハ固クシテ費ニ近シ。今取ラズンバ後世必ズ子孫ノ憂ヲ爲サン。孔子ノタマハク、求ヨ、君子ハカノコレヲ欲スト曰フヲ舎キテ必ズコレガ辭ヲ爲スヲ疾ム。丘ヤ聞ク、國ヲ有チ家ヲ有ツ者ハ、寡キヲ患ヘズシテ均シカラザルヲ患ヘ、貧シキヲ患ヘズシテ安カラザルヲ患フト。ケダシ均シケレバ貧シキコト無ク、和スレバ寡キコト無ク、安ケレバ傾クコト無シ。ソレカクノ如シ。故ニ遠人服セザレバ、スナハチ文德ヲ修メテ以テコレヲ來シ、既ニコレヲ來セバスナハチコレヲ安ズ。今由ト求ト夫子ヲ相ケ、遠人服セズシテ來スコト能ハズ、邦分崩離析シテ守ルコト能ハズ、而シテ干戈ヲ邦内ニ動カスコトヲ謀ル。ワレ恐ル、季孫ノ憂ハ顛叟ニ在ラズシテ蕭牆ノ内ニ在ランコトヲ。

「顛叟」は魯の屬國。

「周任」は「古ノ良史」とある。「史」は史官。

「分崩離析」は、古註に「民に異心アルヲ分トイヒ、去ラント欲スルヲ崩トイヒ、會聚スベカラザルヲ離析トイフ」とある。「干」はタテ、「戈」はホコ、そこで「干戈」で戦争といふことになる。ここで一つ脱線させてもらふが、ズット以前の事、朝鮮を旅行して三韓の遺蹟を探つたことがある。新羅の慶州、百濟の扶餘、高麗の開城と濟ませて、さて高句麗の遺蹟と樂浪の古墳とを視るために平壤に行つたが、京城の總督府の好意で平安南道道廳にあて、「ホヅミハクシコセキチヨウサニユクテハイタノム」といふやうな電報を打つてくれた。そこで平壤に着いて取敢ず道廳に顔出しして見ると、何と戶籍簿を取揃へて待つてゐるではないか。親族法の専門家が「コセキ」を調査に行くといふのだから間違へるも無理からぬと大笑になつたことだが、其時見せてもらった樂浪古墳からの出土品なる漢の王者時代の銘のある武器の中で、これが干、これが戈、といふ實物を示されて、なるほどと感心したことだ。

X X X X

魯の大夫季孫氏は、公領の半分までを私領にしてゐるにもあきたらず、屬國の顛叟を切り取らうとくはだてた。其時季氏の家臣だつた冉有と季路（子路）とは、後に先生に叱られても困ると思つたか、孔子様におめにかかり、「季氏が顛叟にいくさをしかけようとして居ります。」と申し上げ

た。すると孔子様は冉有に向つて、『求よ、もしさやうの事に賛同したのならば、それはお前の大過失ではないだらうか。一體顓臾は其昔天子が東蒙山下に領地を興へて其山の祭をつかさどらせた由緒ある國であつて、今は魯の領地内にはいつて居り、既に此國の一部分であるのを、いまさら征伐する理由があらうか。』とがめられた。冉有は少々テレて、『實は主人の希望でありまして、私共兩人は不賛成なのでござります。』と辯解した。そこで孔子様はかさねて、『求よ、不賛成ならばなぜ諫めぬ。昔、良記録官といはれた周任の言葉に、「力の限りを盡して職を勤めよ。それができぬのなら退職せよ。」とある。臣が君の過ちを救はぬのは、盲人があぶない所へ行くのを止めず、ころぶのを助け起さぬやうなもので、それならば手引などはいらぬではないか。主人の一存で、自分たちの知つたことでない、といふ風にお前は申すが、其言分は甚だ間違つて居るぞ。番をしてゐる虎や野牛が檻を破り、預つてゐた龜の甲や玉が櫃の中でこわれたならば、それは一體誰の過失なのぢや。』と追究されたので、冉有は苦しまぎれにさらに理由を設け、『しかしかの顓臾なる所は、要害堅固で且季氏の領地の費に近いことでありますから、今のうちに始末をして置きませぬと、將來季氏の子孫の心配の種にならうと存じます。』と言つた。孔子様が叱つておつしやるやう、『求よ。實は私も同意なのでありますと卒直に言はずに、あれこれと言ひ草を設けるのは、君子のにくむ所ぢやぞ。季氏が領地を廣めんとするのは、人口ますます多く物資いよいよゆたかならんと

とを欲するのであらうが、國持の諸侯や家持の大夫たる者は、物資のとほしきを憂へずして配分の均一ならざるを憂へ、生活の貧困を憂へずして人心の不安を憂ふべし、とわしは聞いてゐる。配分が均一ならば誰が貧しいといふこともなく、人々仲よく譲り合へば物がとほしいといふこともなく、人心が安定すれば家や國の傾きくつがへる心配もない。さやうな次第ぢやから、もし遠國の民が服しないならば、こちらの文化徳教を振興しておのづから慕ひ寄らしめ、既になつて來たらば、これを同化安堵せしむべきであつて、武力で征服するなどとは以ての外ぢや。今由と求とが季氏を輔佐しながら、領外の人民を慕ひ寄せせることもできず、國內四分五裂しても收拾が附かず、其上にも領内に戦争を起さうと計畫するとは何事ぞ。わしは心配する、季孫氏將來の憂ひは、遠い顓臾にはなくして、近く垣根の内であらうぞ。』

子路と冉有と二人で孔子様の前に出たのだが、年長でもありいつもなら先に立つて口をきく子路がだまつてゐて、冉有が物を言ひ、孔子様も「求よ」「求よ」と冉有にのみほこさきを向けられるのは、おそらく此事については冉有が執事としておもに關係したのであり、且冉有には季氏のために税を取り立てた前科がある（二六九）からであらう。安井息軒も

『子路ハ冉有ヨリ長ズ。而シテココニ先ツ冉有ヲ書スルモノハ、顓臾ノ事季氏專ラ冉有ト謀リタレバナリ。

故ニ門人先ヅ冉有ヲ書シテ、以テ夫子專ラ冉有ヲ責ムルノ意ヲ明ニス。下文孔子ニ子ヲ呼ブニ至リテ、スナハチ由ヲ先ニシテ求マ後ニセルハ、其齒ニ從フナリ。』

と言つてゐる。事によつたら子路が、また「ワガ徒ニアラザルナリ」とやられるぞ、と冉有を先生の前へ引つばつて行つたのかも知れない。そして季氏顯叟を伐つとの事が歴史に見えてゐない所を見ると、孔子様に釘をさされてふたりが季氏を諫止したのであらう。又其後季桓子が家臣の陽虎に囚へられるといふ騒動が起つた。「聖人ノ言昭トシテ明驗アルコト此ノ如シ。」と孔子様フアンは隨喜してゐる。「寡キヲ患ヘズシテ均シカラザルヲ患フ」といふ言葉は、戦時中からの配給生活にすこぶる適切なので、よく用ひられたものだ。

四一九

孔子イハク、天下道有レバ、スナハチ禮樂征伐天子ヨリ出ヅ。天下道無ケレバスナハチ禮樂征伐諸侯ヨリ出ヅ。諸侯ヨリ出ヅレバ、ケダシ十世失ハザルハ希ナリ。大夫ヨリ出ヅレバ、五世失ハザルハ希ナリ。陪臣國命ヲ執レバ、三世失ハザルハ希ナリ。天下道有レバ、スナハチ政^{マツリゴト}大夫ニ在ラズ。天下道有レバ、スナハチ庶人議セズ。

「陪臣」は「又家來」で、天子からいへば大夫だが、ここでは諸侯からかぞへて大夫の家來のこと、當時の魯

では陽虎がそれだ。日本で言へば、天皇・足利公方・三好・松永といふ關係。

X

X

X

X

孔子が申すやう、『正しい道が天下に行はれる時代には、禮樂征伐の命令が天子から出ます。天下に道が行はれなくなると、禮樂征伐の命令が諸侯から出るやうになります。命令が諸侯から出るやうになつては、おそらく十代も政權を失はぬことは稀でありませう。それが大夫から出るやうになつては、五代も續くことは稀でありませう。其又家來が國の政權を取りしきるやうになつては、三代續くことも稀でせう。天下に道が行はれば、政權が大夫の手などにはないはずで、天下に道が行はれば、平民が政治の批判をしなくなります。』

最後の一句は言論壓迫の意味ではない。古註に「上ニ失政無ケレバスナハチ下ニ私議無シ。其口ヲ箝シテ敢テ言ハザラシムルニアラズ。」とある。もし天下道無くして言論を壓迫すると、徳川末期に「庶人議スル」落首や川柳が流行したやうなことになる。

四二〇

孔子イハク、祿ノ公室ヲ去レルコト五世ナリ。政ノ大夫ニ速^{オホ}ベルコト四世ナリ。

故ニカノ三桓ノ子孫微ナリ。

これは前章と同時の言葉だらう。

魯の大夫仲孫（孟孫）・叔孫・季孫の三家は桓公の末なので「三桓」と云ふ。

X X X X X

孔子の申すやう、『爵祿附與の權が魯の公室を離れてから五代になります。政治が大夫の手に移つてから四代になります。先に「五世希ナリ」と申したやうな次第で、かの三家の子孫が衰微して來たのも、さうあるべきことであります。』

四二一

孔子イハク、益者三友。損者三友。直^{チヨク}ヲ友トシ、諒^{リョウ}ヲ友トシ、多聞^{タブン}ヲ友トスルハ、益ナリ。便辟^{ベンベキ}ヲ友トシ、善柔^{ゼンジュウ}ヲ友トシ、便佞^{ベンテイ}ヲ友トスルハ、損ナリ。

X X X X X

孔子の申すやう、『益友が三種類 損友が三種類あります。直言して隠す所なき者を友とし、信

實にして裏表なき者を友とし、博學多識な者を友とするのは、益であります。體裁ばかり飾つて卒直でない者を友とし、顔附だけをよくするへつらひ者を友とし、口先ばかりで腹のない者を友とするのは、損であります。』

四二二

孔子イハク、益者三樂。損者三樂。禮樂ヲ節スルヲ樂シミ、人ノ善ヲ道^イヲ樂シミ、賢友ノ多キヲ樂シムハ、益ナリ。驕樂ヲ樂シミ、佚遊^{イツユウ}ヲ樂シミ、宴樂ヲ樂シムハ、損ナリ。

本章の「樂」の音は「ガウ」訓は「コノム」とするのが通説のやうだが、さやうに凝るにも及ぶまい。「ラク」 「タノシム」で結構だ。

X X X X X

孔子の申すやう、『有益な楽しみが三つ、有害な楽しみが三つあります。禮儀音樂をほどよく實行演ずるのを楽しみ、人の善言善行をうはさすることを楽しみ、賢い友人の多いことを楽しむのは、有益な楽しみであります。我儘勝手を楽しみ、なまけ遊ぶことを楽しみ、宴會遊興を楽しむの

は、有害な楽しみであります。』

右の中で今日特に心がけたいのは「人ノ善ヲ道ヲ樂シム」こと、すなはち「人ノ美ヲ成ス」(二九四)ことだ。とかく人のアラを拾ふことを楽しむのは困つたものだ。

四二三

孔子イハク、君子ニ侍スルニ三愆有リ。言未ダコレニ及バズシテ言フ、コレヲ躁ト謂フ。言コレニ及ビテ言ハザル、コレヲ隱ト謂フ。未ダ顔色ヲ見ズシテ言フ、コレヲ瞽ト謂フ。

本章で「君子」とは、地位なり年齢なりで「目上の人」の意味。

「躁」は「輕躁」「サワガシイ」「ソソツカシイ」。

「隱」は「隱險」。

「瞽」は「メクラ」、ここでは「目先が見えぬ」「氣がきかぬ」。

×

×

×

×

孔子の申すやう、「目上の人の前に出たとき犯しやすい三つの過失があります。先方から言葉のないうちにツケツケ物を言ふのを、「さしでがましい」と申します。言葉があつたのにだまつてゐるのを、「へだてがましい」と申します。先方の顔色もうかがはずに口をさくのを、「みさかひがない」と申します。」

「顔色ヲ見ル」といふのは、鼻息をうかがふ意味ではない。其場の見はからひをすることだ。」

現職に奉仕して特に本章の眞實を感じる。

四二四

孔子イハク、君子ニ三戒有リ。少キ時ハ、血氣未ダ定マラズ、コレヲ戒ムルコト色ニ在リ。ソノ壯ナルニ及ビテヤ、血氣方ニ剛ナリ。コレヲ戒シムルコト闘ニ在リ。ソノ老ユルニ及ビテヤ、血氣既ニ衰フ。コレヲ戒ムルコト得ニ在リ。

×

×

×

×

孔子の申すやう、「君子たるべき者に三つの警戒すべき事があります。青年期には血氣定まらず感情を制し得ぬ故、警戒すべきは女色であります。中年期は血氣さかんな時代故、警戒すべきは闘

争であります。老年期にはいと、血氣が衰へて其代り勘定高くなる故、警戒すべきは慾心であります。』

ならんでゐる「三何」の類の中で、本章と次章は特に適切で、現代にもあてはまる。

四二五

孔子イハク、君子ニ三長有リ。天命ヲ畏レ、大人ヲ畏レ、聖人ノ言ヲ畏ル。小人ハ天命ヲ知ラズシテ畏レズ。大人ニ狃レ、聖人ノ言ヲ侮ル。

X X X X X

孔子の申すやう、『君子には三つの畏れがあります。天命に畏れ従ひ、長者先輩を畏れ敬ひ、古聖人の言葉を畏れ守ります。ところが小人はこれに反し、天命の畏るべきを知らずして勝手にふるまひ、長者先輩に心安立ての無禮を働き、古聖人の教を古くさいなどとばかにします。』

「今時論語でもあるまじ」などといふ若人のあることを、孔子様はチャンと承知してござる。

四二六

孔子イハク、生レナガラニシテコレヲ知ル者ハ上ナリ。學ビテコレヲ知ル者ハ次ナリ。困ミテ學ブ者ハ又其次ナリ。困ミテ學バザル、民コレヲ下ト爲ス。

X X X X

孔子の申すやう、『人物に四等級があります。生來道理を知る者があれば、これは最上級の聖人です。ありますが、それは望み得ません。志を立て學問につとめて道理を知る者は其次でありまして、自分などはまづ其邊でありませうか。はじめは學問に志さず行きつまつてから發憤して學ぶ者は又其次であります。行きつまつても學ぶ氣持にならず平氣である者に至つては、最下級の人物でありまして、何とも手が付けられませぬ。』

四二七

孔子イハク、君子ニ九思有リ。視ルニハ明ヲ思ヒ、聽クニハ聰ヲ思ヒ、色ニハ
濫ヲ思ヒ、貌ニハ恭ヲ思ヒ、言ニハ忠ヲ思ヒ、事ニハ敬ヲ思ヒ、疑ニハ問ヲ思ヒ、
忿ニハ難ヲ思ヒ、得ルヲ見テハ義ヲ思フ。

X X X X X

孔子の申すやう、「君子には九ヶ條の思慮すべき項目があります。視るについては、蔽フサはるることなく明かに見たいと思ひます。聽くについては、諛ウソまることなく耳さとく聽きたいと思ひます。顔附きはいつも溫和でありたいと思ひます。容貌は上品に恭しくありたいと思ひます。言葉は忠實で行動と一致したものでありたいと思ひます。仕事は慎重で手違ひのないやうと思ひます。疑が起つたらさつそく誰かに問はうと思ひます。腹が立つたらこの腹立まぎれにやつたらどんな後難をひきおこすかも知れぬぞと思ひます。利得がありさうだつたらこれを取つて道義にかなふだらうかと思ひます。」

四二八

孔子イハク、善ヲ見テハ及バザルガ如クシ、不善ヲ見テハ湯ヲ探ルガ如クス。ワレ其人ヲ見ル、ワレ其語ヲ聞ケリ。隱居シテ其志ヲ求メ、義ヲ行ヒテ以テ其道ヲ達ス。ワレ其語ヲ聞ケリ、未ダ其人ヲ見ザルナリ。

X X X X X

孔子の申すやう、「善事を見ては、あだかも逃げる者を追ひかけて追ひつゝ得ず見失ひはせぬかをおそれるやうな氣持になり、不善を見ては、あだかも熱湯の中に手を突つ込みびつくりして急い

で手を引つ込ますやうな氣持になる、さういふ言葉を聞いたこともありすし、現にさういふ人物を見て居ります。道が行はれぬ時には野に隠れながらしかも世と絶たずして其志を他日に行はんとを期しつつ徳を修め、國道あれば表面に立ち正義を行つて經國濟民の志を成就する、さういふ言葉を開いてはゐますが、さういふ大人物はまだ見たことがありません。」

四二九

齊ノ景公馬千駟シ有リ。死スルノ日民徳トシテ稱スル無シ。伯夷叔齊首陽ノ下ニ饑ユ。民今ニ到ルマデコレヲ稱ス。孔子イハク、誠ニ富ヲ以テセズ、亦祇ニ異ヲ以テス、トハ、ソレコレノ謂カ。

此本文については問題が二點ある。第一に、原文には前記カッコ内の文句が無いのだが、それでは「ソレコレノ謂カ」と言つて見ても、何の「謂」かわからない。そこで學者が詮索の結果、顔淵第十二「子張問崇徳辨惑」章（二八八）の末段の詩の二句が元來ここにはいるべきのを、編者が過つて前に出したのだ、といふ考になつた。なるほどさうらしいから、カッコに入れて本文を補つた。

第二に、本文には「子曰」も「孔子曰」もない。これは外にも二三の例があるが、編者が落したのだらう。それならどこに入れるかについて、最初といふ説と、例の詩句の上といふ説とある。どちらでもよささうだ

が、假りに後説に従つて、右カッコ内の最初に「孔子曰」を補つて置いた。

×

×

×

×

齊の景公は馬四千匹をもつてゐたといふほどの富貴を極めたが、其死後人民が誰一人徳有りとしてほめる者がなかつた。伯夷叔齊は首陽山のほとりで餓死するといふ悲惨な最期を遂げたが、人民は今日までも其徳をたたえる。孔子が此事實を指摘して申すやう、「詩に「人がほめるのは富の故ではなくて、人に異なる徳の故だ。」とあるのは、この所である。」

四三〇

陳亢伯魚ニ問ヒテイハク、子モ亦異聞有ルカ。對ヘテイハク、未ダシ。カツテ獨リ立テリ。鯉趨リテ庭ヲ過グ。イハク、詩ヲ學ベルカ。對ヘテイハク、未ダシト。詩ヲ學バザレバ以テ言フコト無シト。鯉退キテ詩ヲ學ベリ。他日又獨リ立テリ。鯉趨リテ庭ヲ過グ。イハク禮ヲ學ベルカ。對ヘテイハク、未ダシト。禮ヲ學バザレバ以テ立ツコト無シト。鯉退キテ禮ヲ學ベリ。コノ二者ヲ聞ケリ。陳亢退キテ喜ビテイハク、一ヲ問ヒテ三ヲ得タリ。詩ヲ聞キ、禮ヲ聞キ、君子ノ其子ヲ遠ザクルヲ聞ケリ

「陳亢」は門人子禽（一〇）。「伯魚」は孔子の子、名は鯉（二六〇）。

×

×

×

×

陳亢が伯魚に「あなたは外の門人と違つて先生と御親子の間柄ですから、何か特別の教訓を聞かされたことがあるでせう。」とたづねたら、伯魚が答へて言ふやう、「今までまださういふ事はありませんでした。ただいつか父がひとりで縁側に立つてゐるとき、私が小走りして庭先を通り過ぎましたら、呼び止めて、「お前は詩を學んだか。」と言ひました。「まだでござります。」と答へましたら、「詩を學ばなくては口がきけぬぞ。」と申しました。そこで私はさつそく詩の勉強を始めました。其後又或日の事、父がひとりであるとき、私が小走りして庭先を通り過ぎましたら、「禮を學んだか」と言ひました。「まだでござります。」と答へましたら、「禮を學ばなくては根本が立たぬぞ。」と申しました。そこで私はさつそく禮の勉強を始めました。特別に聞いたと申さうなら、まづそんな所です。」陳亢が其場をさがつてから、喜んで言ふやう、「一を問うて三を聞き得た。詩の大切さを聞き、禮の大切さを聞き、そして君子は自分の子でも特別待遇はせぬものだといふことを聞いた。」

異聞有ルカ」を、外の門人にそれぞれ其人に應じた特別の教訓をされると同様にあなたにも亦特別の教訓をされるかの意味に解する人もある。なるほど「亦」とあるのでさうも取れるが、やはり「外の門人以上の特別教訓」と見る方が自然で面白い。又「遠ザク」を文字通りに解して、他の門人よりもわが子の方を冷遇する事取り、それが人情にかなふとかかなはぬとかの論もあるが、「遠ザク」はすなはち「近ツケズ」で、特にヒイキをせぬ、の意味に解する方がよからう。そして冷遇ではないが、「學ベリヤ」「學バザレバ立ツコト無シ」とだけで突つ放して、こちらから「教へてやらう」と持ちかけぬ所に、孔子流の教育法があることを注目すべきだ。

参照——一九二・三〇七・四四〇・四四一

四三一

邦君ノ妻ハ君コレヲ稱シテ夫人ト曰フ。夫人自ラ稱シテ小童ト曰フ。邦人コレヲ稱シテ君夫人ト曰フ。コレヲ異邦ニ稱シテ寡小君ト曰フ。異邦ノ人コレヲ稱シテ亦君夫人ト曰フ。

本章にも「子曰」又は「孔子曰」が附いてゐないので、孔子様自身の言葉かどうか判然せぬが、おそらく何かの場合にかやうな事まで名分を正す意味で説明されたのを、門人が筆記して置いたのであらう。「夫人」の「夫」は「扶」で、内助の意味の由。「小童」は謙遜の言葉だが、わが國でも同じく「わらは」といふ。「君夫人」は「主夫人」の意味。「寡」は「寡徳」で謙遜の言葉。君主は自身を「寡人」といふ。

x

x

x

x

國君の妻は、國君はこれを「夫人」ととなへ、夫人は自身を「小童」といふ。國人はこれを「君夫人」と稱し、外國に對しては「寡小君」と呼ぶ。外國人はこれを國人と同様「君夫人」ととなへる。

陽貨第十七

本篇には、世衰へ道行はれざることをなげいての、當局者・門人乃至一般人への警告が多いやうに思はれる。

四三二

陽貨孔子ヲ見ント欲ス。孔子見エズ。孔子ニ豚ヲ歸ル。孔子ソノ亡キヲ時トシテ往キテコレヲ拜ス。コレニ塗ニ遇ヘリ。孔子ニ謂ヒテイハク、來レ、ワレナシト言ハン。イハク、其實ヲ懷キテ其邦ヲ迷ハスハ仁ト謂フ可キカ。イハク、不可ナリト。事ニ從フヲ好ミテシバシバ時ヲ失フハ知ト謂フ可キカ。イハク、不可ナリト。日月逝ク、歳ワレト與ニセズト。孔子イハク、諾、ワレ將ニ仕ヘントス。

陽貨はすなはち例の陽虎、季氏の家臣だが、主人季桓子を押しこめて國政を専らにした。そしてしきりに孔子を招いた。其教を受けて道を行はうといふのではなく、孔子をまるめこんで批判を避け、又國民の尊敬する孔子を引附けて自分の重みを附けようといふのらしき。

X

X

X

X

魯の大夫に押し上つた陽貨がしきりに孔子を招いて會はうとするが、孔子が應じないので、何とかして孔子が來訪せねばならぬやうにしむけようと思ひ、孔子に豚の贈物をした。大夫から物を贈られたときには、其家に行つて拜するのが禮といふことになつてゐたからである。しかし孔子はどうしても陽貨に面會したくないので、わざと陽貨の不在の時をねらつて訪問し、禮を言ひ置いて歸らうとしたら、折あしく歸り道で陽貨とバッタリ出あつた。そこで陽貨は孔子に向ひ、『まあ宅へ來なさい、話がある。』と言ふので止むを得ず其家に行つて對談し、次のやうな問答があつた。『せつかくの寶を懷中で持ち腐れにし、國が亂れ民が苦しむのを傍觀して居るのは、仁と謂ふべきだらうか。』『仁とは申せません。』『政治をするはきらいでないのに、しばしば其機會をとりはづすのは、知と謂ふべきだらうか。』『知とは申せません。』『歲月流るるが如く、お前さんもだんだん年を取る、何とか思索したらどうだらうか。』『心得ました。いづれ其うちには御奉公致すこともござりませう。』

孔子様を最高顧問にでも迎へようと思ふならば、いはゆる三顧の禮を盡すべきなのに、自分の方へ呼び附け

ようとするのみか、大才を自國に施さず又諸國をめぐつて志を得なかつたことを仁でない知でないと言附けがましく批難して、それで孔子を承服させようとは、無禮はもちろん、愚の骨頂だが、孔子様はかやうな無法者を相手にしてもつまらぬと思はれ、當らずさはらずの挨拶をして歸られたのだ。

四三三 子ノタマハク、性相近シ、習ヒ相遠シ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「人間の生れ得た本性は大體似たり寄つたりの近いものだが、其後の習慣教養で善悪賢愚の遠いへだたりが出来る。心すべきは環境と教育ぢや。」

私が子供の時漢文の手ほどきとして讀んだのは、これ亦澁澤祖父から貰つた『三字經』で、繰返し音讀してほとんど全文を暗誦した。其書物は大切に持ち続けたが、戦災で焼いてしまひ、惜しいことをした。この『三字經』なるものは、兒童用の絶好な儒教入門で、うちの子供らにも論語の前にまづこれを讀ませたが、其書出しに『人之始。性本善。性相近。習相遠。』とあつて、この論語の本文から出てるのだ。

四三四 子ノタマハク、タダ上知ト下愚トハ移ラズ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「人は習ひによつて賢とも愚とも移り變るが、ただ最上級の賢人と最下級の愚者とだけは、かれは「生レナガラニシテ知ル者」であり、これは「困ミテ學バザル者」であるから、移りやうがない。」

本章は前章と續いてゐたのに誤つて「子曰」がはさまり別章になつたのだ、といふ説がある。なるほどさかも知れない。

参照——四二六

四三五

子武城ニ之キテ弦歌ノ聲ヲ聞ク。夫子莞爾トシテ笑ヒテノタマハク、鶏ヲ割クニナンゾ牛刀ヲ用ヒン。子游對ヘテイハク、昔者偃ヤコレヲ夫子ニ聞ケリ。ノタマハク、君子道ヲ學ベバスナハチ人ヲ愛シ、小人道ヲ學ベバスナハチ使ヒ易

シト。子ノタマハク、二三子、偃ノ言是ナリ。前言ハコレニ戯レシノミ。

X

X

X

X

孔子様が二三人の門人を連れて、子游(名は偃)が町長をしてゐる武城に行き、子游の案内で町を見物して居られると、家々から琴に和して歌ふ聲が聞えた。それがいはゆる「鄭聲」などではない。正統の雅樂なので、子游が其町を禮樂で治めてゐることを知り、ニツコリと笑つて、「鶏を料理するに何も牛切脰丁には及ぶまい。」と言はれた。すると子游はこれを、これくらゐの小さな町を治めるのに禮樂とは大げさ過ぎる、といふ意味にとり、「偃は以前に先生から「君子道ヲ學ベバヌナハチ人ヲ愛シ、小人道ヲ學ベバヌナハチ使ヒ易シ。」といふ言葉をうかがつたことがあります。それ故私は小さい町ながら禮樂で治めたいと考へて人民たちに雅樂を教へてをりますのに、鶏に牛刀と仰せられるのは其意を得ません。」と開き直つて眞正面から理窟を言つた。孔子様は、實は子游のやうな國家をも治め得る大才にかやうな小さな町の町長くらゐはもつたいない、といふ意味でシヤレと言はれたのだが、お前の思ひ違ひだとは言はれないで子游の顔をたて、門人たちを顧みておつしやるやう、「イヤ全く偃の言ふ通りだ。さつきの偃は冗談ぢやよ。」

孔子様が冗談など言はれるはずがないといふのでいろいろ理窟をならべる學者もあるやうだが、さう孔子様を「人を教へる道具」にしてもらつては困る。孔子様どうして中々冗談も言はれる。明治の新川柳(岡田三面子すなはち朝太郎博士の作)に「惜しいかなシヤレのわからぬ男にて」といふのがあるが、子游こそ「文學の子游」とも言はれるのに(二五五)、さても「シヤレのわからぬ男」かな。なほ子游が武城を治めるのに人を得たといふ話が、前に出てゐる(一三二)。

四三六

公山弗擾費ヲ以テ畔ク。召ク。子往カント欲ス。子路説バズシタイハク、之クコトナキノミ。何ゾ必ズシモ公山氏ニコレ之カン。子ノタマハク、ソレワレヲ召クハアニ徒ナランヤ。モシワレヲ用フル有ラバ、ワレハソレ東周ヲ爲サンカ。

公山弗擾は季氏の家老であり、例の陽虎の棒組で、主人の季桓子を押込めたりしたが、陽虎が出奔した後に残り、費に立籠つて季氏にそむいたのである。

X

X

X

X

公山弗擾が費を根據として謀叛し、孔子様を招いたので、行く氣になられた。子路が面白からず

● 思つて、『行くのはおやめなさい。何も公山氏などの所に行くことはないではありませんか。』とおとめした。すると孔子様がおつしやるやう、『ああやつてわしを招く以上は、まんざら無意味でもあるまい。誰でもあれわしを用ひてくれるならば、わしは周の文王武王の道をこの東方魯の國に復興させて見たいのぢや。』

次の次の章(四三八)と併せてみても、このところ孔子様も大分あせり氣味だ。天下萬民を救はんとの御志はさることながら、大義名分を唱へる孔子様ともあらう者が、亂臣賊子と事を共にされようとは甚だ以て其意を得ない。これは子路が悦ばなかつたのが至極もつともな話で、結局どちらも實現しなかつたらしいが、さあるべき事だ。

四三七

子張仁ヲ孔子ニ問フ。孔子ノタマハク、能ク五ツノモノヲ天下ニ行フヲ仁トスト。コレヲ請ヒ問フ。ノタマハク、恭・寛・信・敏・惠ナリ。恭ナレバズナハチ侮ラレズ、寛ナレバズナハチ衆ヲ得、信ナレバズナハチ人任ジ、敏ナレバズナハチ功有リ、惠ナレバズナハチ以テ人ヲ使フニ足ル。

本章は例の「齊論」らしいと言ふ。

古註に「子張ノ足ラザル所ニ因リテ言フ」とあるが、どれもこれも「應病爲藥」としてしまふのもいかなもの、本章などは正に一般抽象論だ。

×

×

×

×

子張が仁について孔子様におたづねしたら、『よく五つの徳を以て天下を治めるのが仁である。』と答へられた。さらに五つとは何々かを伺ひたい、と言つたので、孔子様がおつしやるやう、『恭・寛・信・敏・惠の五つぢや。恭は己れを持する徳であつて、うやうやしければ人の侮りを受けない。寛は上に居る者の徳であつて、寛大なれば衆望を集める。信は人に交はる徳であつて、信義を守り言行一致ならば人が信賴する。敏は事を處する徳であつて、勤勉敏活であれば仕事の成績が擧がる。惠は民を待つ徳であつて、よく恩を施せば人民はわが用を爲すを樂しむ。すなはち此五徳を備へれば仁を天下に行ふことが出來よう。』

四三八

佛肸召ク。子往カント欲ス。子路イハク、昔者由ヤコレヲ夫子ニ聞ケリ。マハク、親ラ其身ニ於テ不善ヲ爲ス者ニハ君子ハ入ラズト。佛肸中牟ヲ以テ畔

ク。子ノ往クヤコレヲ如何。子ノタマハク、然リ、コノ言有ルナリ。堅キヲ曰ハズヤ、磨スレドモ磷ガズ、白キヲ曰ハズヤ、涅スレドモ緇マズ。ワレアニ匏瓜ナランヤ、イヅクンゾ能ク繫リテ食ハレザラン。

X X X X X X

晉の大夫趙簡子の家老の佛肸が謀叛を起し、孔子様を招いたので往く氣になられた。すると子路が、『以前に由は先生から、「其人自身不善を行ふやうな者の仲間入を君子はせぬものだ。」とうかがつたことがあります。然るに預りの代官所中牟を押領して主にそむいた佛肸の所へ行かうとされるのは、いかがなものですか。御言葉に矛盾するやうに存じます。』と諫めた。孔子様がおつしやるやう、『なるほどさう言ふ事を言つたこともあるが、それは修養中の者についての話で、道を天下に行はんとする者の志は又違ふ。そしてともかくもわしほどになれば、不善の人の中に投じても、かれらを感化善導こそすれ、まさか不善に化せられることはあるまい。諺にも、堅い物のことを、いくら磨つても薄くならぬと言ひ、白い物のことを、いくら塗つても黒くならぬと言ふではないか。わしは食用にもならずにはなりたくないぞ。』

前々章と本章とは、どうも子路の方に軍配が上げたい。本章のやうな辯解を子路がしたら、孔子様は必ず「コノ故ニカノ佞者ヲ惡ム。」(二七七)と言はれただらう。

四三九

子ノタマハク、由ヤ、ナンヂ六言ノ六蔽ヲ聞ケルカ。對ヘタイハク、未ダシ。ノタマハク、居レ、ワレナンヂニ語ラン。仁ヲ好ミテ學ヲ好マザレバ其蔽ヤ愚、知ヲ好ミテ學ヲ好マザレバ其蔽ヤ蕩、信ヲ好ミテ學ヲ好マザレバ其蔽ヤ賊、直ヲ好ミテ學ヲ好マザレバ其蔽ヤ絞、勇ヲ好ミテ學ヲ好マザレバ其蔽ヤ亂、剛ヲ好ミテ學ヲ好マザレバ其蔽ヤ狂。

本章も「齊論」らしいと言はれる。

X X X X X

孔子様が子路に向つて、『由よ、お前は「六言ノ六蔽」すなはち仁・知・信・直・勇・剛の六つの言葉であらばされた美德に六つの蔽はれる所、謂はば暗黒面、がある、と言ふことを聞いたか。』と問はれたので、子路が起立して、『イエエまだ聞いたことがござりません。』と答へた。そこで孔子

様がおつしやるやう。『さあすはれ、話してやらう。いかなる美德も學問をして義理を辨へ本末輕重の見さかひがつかぬと、せつかくの美德が蔽はれて脱線墮落する。これを「蔽」と言ふのぢや。そこで、仁を好んで學を好まぬと、蔽はれて馬鹿正直になる。知を好んで學を好まぬと、蔽はれて誇大妄想になる。信を好んで學を好まぬと、蔽はれて過信輕信迷信になり、人を利せんとしてかへつて人をそこなふ。直を好んで學を好まぬと、蔽はれて苛酷非人情拘子定規になる。勇を好んで學を好まぬと、蔽はれて亂暴狼籍になる。剛を好んで學を好まぬと、蔽はれて狂氣のさたになる。これが「六言ノ六蔽」ぢやよ。』

四四〇

子ノタマハク、小子何ゾカノ詩ヲ學ブコトナキヤ。詩ハ、以テ興スベク、以テ觀ルベク、以テ羣スベク、以テ怨ムベシ。コレヲ邇クシテハ父母ニ事ヘ、コレヲ遠クシテハ君ニ事フ。多ク鳥獸草木ノ名ヲ知ル。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『若者どもよ。なぜあの詩を學ばないのか。詩と言ふものは、人の心を感奮興起させ、人情風俗治亂興亡を觀察させ、衆人と群れてやはらぎ樂しませ、人を怨み政を怨

むにも上品に怨ませる。そして家に於ては親に事へ、國に於ては君に仕ふる事まで、すべて詩によつて感得される。其上に多く鳥獸草木の名を識るといふ效用まであるぞよ。』

紀貫之の「古今集」の序に

『力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。』

とあるのを思ひ出させる。

「以テ怨ムベシ」が面白い。古註に「怨ミテ怒ラズ」とある。やきもちをやくにも、黒こげでなく狐色にコンガリとやく方がかへつて効果的で、かの伊勢物語の「風吹けば沖津白波立田山、よはにや君がひとり行くらん」などは、正に「怨ムベシ」の好標本だ。支那の詩にも「閨怨」などと題する上品なやきもちやきがあつて、それが詩歌なら出来る。「風吹けばどころか女房大あらし」では色消した。又天下國家の事については、「怨ハ上ノ政ヲ刺ルナリ」。「コレヲ言フ者罪無ク、コレヲ聞ク者戒ムルニ足ル。故ニ以テ怨ムベキナリ。」とある。政府を非難攻撃するも結構だが、モット上品に、すなはち詩的に、「以テ怨ムベシ」と行かぬものか。近頃のやり方は、關西語で言へばいかにもエゲツない。あれではせつかくの正論にも同情がもてず、かへつて効果的であるまじ。

「多ク鳥獸草木ノ名ヲ識ル」といふのも面白い。先頃宮内省圖書寮の藏書展觀の時新井白石編纂の「詩經禽獸

草木圖鑑」といふやうなものが出てゐたのを興味深く見た。同時に陳列されてゐた萬葉集についての同様の圖録は、一層大したものだ。さらに遡つて三十何年前英國ストラットフォード・オン・エヴオンのシエクスピア生誕の家を見に行つたとき、裏庭に沙翁劇に出て来る草木の植物園があつたことを思ひ出す。

四四一 子伯魚ニ謂ヒテノタマハク、ナンヂ周南・召南ヲ爲ビタリヤ。人ニシテ周南・召南ヲ爲バザレバ、猶ホ正シク牆ニ面シテ立ツガゴトキカ。

周南・召南は詩經の始めにある各十篇の詩で、王公大夫の夫婦生活を中心とする修身齊家の道を歌つてある。

X

X

X

X

孔子様がお子さんの伯魚におつしやるやう、『お前は周南・召南の詩を勉強したか。周南・召南は治國平天下の出發點たる修身齊家の道を歌つた詩だから、人たる者周南・召南を學ばなくては、鼻に鼻突き合せて立つたやうなもので、一步も進めず一物も見得ないであらうぞ。』

参照——三〇九・四三〇・四四〇

四四二 子ノタマハク、禮ト云ヒ禮ト云フ、玉帛ヲ云ハンヤ。樂ト云ヒ樂ト云フ、鐘鼓ヲ云ハンヤ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『禮・禮と云ふが、それは玉や絹の禮式用度を云ふのであらうや。樂・樂と云ふが、それは鐘や太鼓の樂器を云ふのであらうや。心の敬が形にあらはれたのが禮であるから、心の敬を失つたら、どんな上等の玉帛を用ひても禮にはならぬ。心の和が音にあらはれるのが樂であるから、心の和を失つたらどんな妙音の鐘鼓を用ひても樂にはならぬ。』

参照——四三

四四三 子ノタマハク、色厲シクシテ内在ナルハ、コレヲ小人ニ譬フレバソレ猶ホ穿窬ノ盜ノゴトキカ。

「穿」は壁をくりぬく、「箴」は塀を乗り越える、合せてコソコソ泥棒のこと。

X
X
X
X

孔子様がおつしやるやう、『うわべばかりえらさうにかまへてゐて内心卑怯未練の人物は、これを細民にたとへて見ると、平氣な顔をしながら内心ビクビクものコソコソ泥棒のやうなものぢや。』

四四四 子ノタマハク、郷原ハ徳ノ賊ナリ。

「原」は「愿」と同じ。「謹」の意味。

X
X
X
X

孔子様がおつしやるやう、『一郷での律義者といはれる者が、かへつて徳をそこなふ八方美人の食はせ者ぞ。』

古註に『眞ノ非ハ以テ人ヲ惑ハスニ足ラズ。タダ是ニ似テ非ナル者ハ最モ以テ人ヲ惑ハシ易シ。故ニ夫子以テ徳ノ賊ト爲ス。』とある。又孟子（盡心下篇）に本章の詳解が出てゐる。曰く

『萬章曰ク、一郷皆原人ト稱ス。往ク所トシテ原人タラザルハ無シ。孔子以テ徳ノ賊ト爲スハ何ゾヤ。曰ク、コレヲ非トセントスルモ擧グベキ無ク、コレヲ刺ラントスルモ刺ルベキ無ク、流俗ニ同ジクシ汚世ニ合シ、コレニ居ルニ忠信ニ似、コレヲ行フニ廉潔ニ似タリ。衆皆コレヲ悦ビ、自ラ以テ是ト爲ス。シカモ與ニ堯舜ノ道ニ入ルベカラズ。故ニ徳ノ賊ト曰フナリ。』

四四五 子ノタマハク、道ニ聽キテ塗ニ説クハ、徳ヲコレ棄ツルナリ。

本文から「道聽塗説」といふ熟語が出来てゐる。

X
X
X
X

孔子様がおつしやるやう、『今途中で聞いた事をそのまま途中で話してそれきりかけ流しにするやうでは、せつかく善い事を聞いても、身に附かず心の養ひにならぬ。これは全く徳を棄てるといふものぢや。聞いた事をトツクリと玩味し善いと思つたら實踐せよ。』

荀子勸學篇に「口耳ノ學」といふのがそれだ。曰く、
『小人ノ學ハ、耳ニ入りテ口ニ出ツ。口耳ノ間ハスナハチ四寸ノミ。ナンゾ以テ七尺ノ軀ヲ美ニスルニ足ラ
ンヤ。』

四四六 子ノタマハク、鄙夫ハ與ニ君ニ事フベケンヤ。ソノ未ダコレヲ得ザルヤ、コレ
ヲ得ンコトヲ患フ。既ニコレヲ得レバコレヲ失ハンコトヲ患フ。イヤシクモコ
レヲ失ハンコトヲ患フレバ、至ラザル所無シ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「人格下劣げれつのともがらとは、とうてい一緒に御奉公できぬ。まだ官職
權勢を得ない間は、それを得ることばかり心配し、一旦それを得ると、これを喪ふことばかり心配
する。そしてこれを喪ふことを心配する以上、目的は手段を擇ばず、地位保全のためにはどんなこ
とでもし兼ねないのぢや。』

四四七 子ノタマハク、古者民ニ三疾有リ。今ヤ或ハコレコレナシ。古ノ狂ヤ肆、今ノ
狂ヤ蕩トウ。古ノ矜キョウヤ廉レン、今ノ矜キョウヤ忿フン戾レイ。古ノ愚ウヤ直、今ノ愚ウヤ詐サノミ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「昔の人に狂・矜・愚の三癖へきがあつたが、其癖さへも今では墮落して
しまつた。狂は氣位が高過ぎることで、昔の狂は小節せうせつに拘泥こうでいせぬ程度だつたが、今の狂はでたらめ
である。矜はおのれを持つことが嚴げんに過ぎることで、昔の矜は物事に角かどが立つのだつたが、今の
矜は強情我慢である。愚はすなはち馬鹿だが、昔の愚は馬鹿正直であり、今の愚は馬鹿するいのぢ
や。』

四四八 子ノタマハク、巧言令色鮮シ仁。

これは全然重出(三)なので、すべてを略して、思ひ出した江戸笑話の一つ書いて置かう。
儒者の塾に忍び込みし盗人を内弟子たちが捕へて突き出さうとするを、師匠が止めて懇々説諭し、過つて
改むるに憚るなかれと、錢そくばくを握らせて放してやる。盗人手をあけて見て『鮮シ仁』と言うた。

四四九 子ノタマハク、紫^{ムラサキ}ノ朱^{アカ}ヲ奪^アフヲ惡^ミム。鄭聲ノ雅樂ヲ亂スヲ惡^ム。利口ノ邦家ヲ覆^{クツガ}ヘスヲ惡^ム。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『間色たる紫がそのなまめかしさの故に正色の赤を壓倒することがにくむべきと同様、鄭國の俗樂が耳に入りやすきが故に先王の正樂を混亂し、多辯の佞人が君にへつらひ善人を陥れて國家を危くするは、にくむべき極みである。』

参照——三八六

四五〇 子ノタマハク、ワレ言フコト無カラント欲ス。子貢イハク、子モシ言ハズンバ、スナハチ小子何ヲカ述ベン。子ノタマハク、天何ヲカ言フヤ。四時^{シイ}行ハレ、百物生ズ。天何ヲカ言フヤ。

X X X X

孔子様が『わしはもう何も言ふまいと思ふ。』と言はれた。子貢が驚いて、『もし先生が何もおつしやらなかつたら、私ども門人は何を據り所として先生の教を宣傳致しませうや。』と言つた。そこで孔子様がおつしやるやう、『天は何か言ふかね。天は何も言はぬけれども、春夏秋冬の四季は時を違へず、百物は日に日に成育する。天は何か言ふかね。』

伊藤仁齋は本章を説明して

『コレ學者ノ言語ニ求メズシテ深ク其實ヲ務メンコトヲ欲スルナリ。ソレ實有リテ言フコト無キハ以テ患ヒト爲スニ足ラズ、言フコト無シト雖モ必ズ行ハルルヲ以テナリ。モシ言フコト有ルモ而カモ其實無ケレバ、スナハチ巧文麗辭天下ノ辯ヲ極ムト雖モ益無シ。』

と言つてゐるが、少々見當違ひではないだらうか。本章はむしろ「ワレナンヂニ隱スコト無シ」(一七〇)と對應する。すなはち、口で言つて聞かせずともわしの一舉一動をそばで見えてゐるのだから、わしの趣旨はわかるはずや、と言はれたのだと思ふ。自らを天に比した所に孔子様の抱負の大なるを見る。

四五一 孺^コ悲孔子ニ見^ミエント欲ス。孔子辭スルニ疾^ヤヲ以テス。命^{オコナ}ヲ將^マフ者戸ヲ出ヅ。瑟^セヲ取リテ歌ヒ、コレヲシテ聞カシム。

X X X X

孺悲なる者が孔子様にお目にかかりたいとて來訪した。孔子様は病氣だと言つてことはらせた。取次の者が部屋の戸口を出て玄關に行くと、孔子様はすぐに二十五弦琴を取り上げてかきならし、それに合はせて聞こへよがしに歌をうたひ、實は假病なのだといふことを知らせた。

孔子様がなぜ假病までつかつて面會謝絶をされたかはハッキリしない。孺悲が前に何か不始末があつて、ノメ顔が出せる義理でなかつたのに、押強くやつて來たので、會はぬ譯があつて會はぬのだといふことを暗に知らせ、孺悲の反省をうながされた、といふやうな次第であらう。

四五二

宰我問フ。三年ノ喪ハ期スデニ久シ。君子三年禮ヲ爲サズンバ、禮必ズ壞レン。三年樂ヲ爲サズンバ、樂必ズ崩レン。舊穀既ニ没キテ新穀既ニ升ル。燧ヲ鑽リ、火ヲ改ム。期ニシテ已ムベシ。子ノタマハク、カノ稻ヲ食ヒ、カノ錦ヲ衣ル、ナンヂニ於テ安キカ。イハク、安シト。ナンヂ安クバスナハチコレヲ爲セ。ソレ君子ノ喪ニ居ル、旨キヲ食ヘドモ甘カラズ、樂ヲ聞ケドモ樂シマズ、居處安

カラズ、故ニ爲サザルナリ。今ナンヂ安クバスナハチコレヲ爲セ。宰我出ツ。子ノタマハク、予ノ不仁ナルヤ。子生レテ三年、然カル後父母ノ懷ヲ免カル。ソレ三年ノ喪ハ天下ノ通喪ナリ。予ヤ其父母ニ三年ノ愛アルカ。

「期」は「期限」の意味にも「一年」の意味にも用ひる。宰我の言葉のうち、始の「期」は前者、次の「期」は後者。

「燧ヲ鑽リ火ヲ改ム」——昔は、木の板に凹みを作り同じ木の棒の一端をそこに當て錐をもむやうにして火を取つた。其木が四季で違ふ。春はニレ・ヤナギ、夏はナツメ・アンズ、秋はハハソ・ナラ、冬はエンジュ・マユミ、そして一年で元に戻る。

「稻」はここではモチゴメ、すなはち米の中で一番美味のもの。

X X X X

宰(我予)が「父母の喪の三年といふのは、期限が長が過ぎはしますまいか。君子が喪にこもつて三年も禮をしなかつたら、禮が必ずみだれませう。三年も樂をしなかつたら、樂が必ずくすれませう。それでは甚だ不都合であります。ところで一年たてば、去年の穀物は食ひ盡されて新しい穀物

が出廻り始めます。木を擦つて火を切り出すのも、一年で其木が一巡します。それ故喪も一年で打切るのが適當でありませう。』と言つた。すると孔子様が、『親が死んでも一年たちさへすれば、おしいもち米の飯をたべ、美しい錦の着物をきて、それでお前は氣安いのか。』と問はれたところ、宰我が『かくべつ氣が咎めませぬ。』と答へたので、孔子様はごきげん宜しからず、『さうか、お前の氣が濟むならさうするがよからう。一體君子の服喪中は、美食をしても口に甘からず、音楽を聞いても耳に樂しからず、よい住居に居ても落着かない、それ故に衣食住を簡素にするのだが、お前は美衣美色安住して心安いなら勝手にさうしなさい。』と苦り切つて言はれた。それで宰我は面目を失つて引下がつたが、あとに残つた門人たちに向つて孔子様がおつしやるやう、『さても予は不仁非人情な男かな。子供は生れてから三年でヤット父母の懐からはなれるものだ。それ故三年の喪が天子より庶人に至るまで上下一般に通ずる定例になつてゐる。全體予は兩親から三年の愛を受けなかつたのだらうか。』

四五三

子ノタマハク、飽食終日、心ヲ用フル所無キハ難イカナ。 博奕トイフモノアラズヤ。コレヲ爲スハ猶ホ已ムニ賢レリ。

「博」は昔の雙六の類。「弈」は圍碁、すなはちここで「博奕」といふのは賭博(ばくち)ではない。

X X X X

『終日腹一杯たべてただぶらぶらして居り、何にも心を働かせないのも困つたものだ。雙六とか碁とかいふものがあるではないか。あんな暇つぶしの勝負事でも、何もしないよりはましぢや。』

もちろん勝負事を奨励するのではないが、孔子様は碁將棋もいけなすといふほどの「やほ」ではない。

参照——三九二

四五四

子路イハク、君子ハ勇ヲ尙ブカ。子ノタマハク、君子ハ義以テ上ト爲ス。君子勇有リテ義無ケレバ亂ヲ爲ス。小人勇有リテ義無ケレバ盜ヲ爲ス。

「君子」には「有徳者」「有位者」の二義があると前に言つたが、本章中第一第二の「君子」は前者、第三は後者。

X X X X X

子路が『君子は勇をたつとぶものでござりますか。』とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、『君子は勇をたつとぶが、勇よりもさらに義をたつとぶ。すなはち爲すべき所と爲すべからざる所との判別に重きをおくのぢや。上級者に勇があつて義がないと反亂を起し、下級者に勇があつて義がないと盗みをするぞ。』

子路らしい問であり、そして孔子様が子路に答へられさうな答だ。

参照——一八六・四三九

四五五

子貢イハク、君子モ亦惡ムコト有ルカ。子ノタマハク、惡ムコト有リ。人ノ惡ヲ稱スル者ヲ惡ム。下流ニ居テ上ヲ訕ル者ヲ惡ム。勇ニシテ禮無キ者ヲ惡ム。果敢ニシテ望ガル者ヲ惡ム。ノタマハク、賜ヤ亦惡ムコト有ルカト。微ヒテ知ト爲ス者ヲ惡ム。不孫ニシテ勇ト爲ス者ヲ惡ム。訐キテ直ト爲ス者ヲ惡ム。

ここで「君子」といふのは、孔子を指す。それ故孔子様も自分の事として答へられた。

X X X X X

子貢が『先生のやうな君子にも嫌ひな人がおありになりますか。』と問うたので、孔子様が『それはあるとも。他人の悪事を言ひ立てる者がさらひぢや。下位に在つて上位の者を惡し様にそしる者がさらひぢや。勇のみあつて禮の無い者がさらひぢや。思ひ切りはよいが道理のわからぬ者がさらひぢや。』と答へられた。そして子貢に向つて、『賜も亦さらひな人があるか。』と問はれた。答へて申すやう、『知と勇と直とは結構な事ではありますが、人の言ふこととするこの先くぐりをして知なりとする者がさらひであります。傲慢無禮を勇なりとする者がさらひであります。他人の内證事をあばき立てて直なりとする者が嫌ひであります。』

孔子様と子貢とが今の日本に居たら、さぞかしさらひな者が多くて困るだらう。孔子様と子貢とのきらぶ所、すべて現狀に適切だ。他人の言行を惡意にのみ解釋して思ひやりがなく、反抗鬭争を以て民主的と思ひ、無禮無作法傍若無人、暴露摘發を以て痛快なりとする。これが君子國の君子人に有らうことか。

参照——六九

四五六 子ノタマハク、タダ女子ト小人トハ養ヒ難シトナス。コレヲ近ヅクレバスナハチ不遜、コレヲ遠ザクレバスナハチ怨ム。

この「小人」は奴僕下人。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『女と小者こものはどちらも扱ひにくい。近づければ圖に乗るし、遠ざければ怨む。』

論語五百章中、民主にして男女對等の今日として不都合千萬なのは此一章で、さすがの孔子フアンも辯護の言葉がない。しかし孔子様の言はれたのは、一般論ではなからう、といふことも考へねばならぬ。何かの折に孔子様もよくよく持て餘してかう言はれたのだらう。孔子様だけではない落語家も言ふ、『女といふものは始

末がわるい。可愛がれば甘えるし、叱ればふくれるし、ぶてば泣くし、殺せばばけて出る。』と。御婦人方、まあまあ柳眉を逆立てずに、われとわが身に立ち返つて下さい。

四五七 子ノタマハク、年四十ニシテ惡ミマルレバソレ終ランノミ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『不惑の年の四十歳にもなつて、何ひとつ善行もなく、君子ににくまれるやうな事では、もうおしまひじや。』

参照——二二七

微子第十八

本篇は多く孔子自身をも含めて聖賢の出處進退を載せてある。

四五八

微子^{ヒシ}ハコレヲ去リ、箕子^{キシ}ハコレガ奴^ドト爲リ、比干^{ヒカン}ハ諫メテ死ス。子ノタマハク、殷^{イン}ニ三仁有リ。

「微子」の微は國名、子は爵、名は啓、殷王乙の長子で紂の庶兄。「箕子」の箕も國名、名は胥餘、朝鮮の開祖といはれ、平壤に箕子廟がある。比干とともに紂王のをぢ。

×

×

×

×

殷の紂王^{チウウ}が無道だつたので、微子と箕子と比干とが諫めたが聞かれず、微子は國を去り身を全くして先祖の祭を存し、箕子は囚へられて奴^{やつて}となつたが、狂人をまねて命を助かり、比干は極諫したため紂の怒にふれて殺された。三人の行跡はそれぞれに違ふが、いづれも出處進退の宜しきを得た。

ものなので、孔子様は『殷に三人の仁者があつた。』とほめられた。

古註に曰く、

『孔子曰ク、身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成ス有リト。死シテ仁ヲ成ストキハ、死スルヲ仁ト爲ス。死スレドモ以テ仁ヲ成スニ足ラザルトキハ、必ズシモ死ヲ以テ仁ト爲サズ。仁ハ死ニモ在ラズ、亦死セザルニモ在ラズ。三人ノ仁ハ、去ルト奴タルト死セルトヲ以テ仁ト爲スニアラザルナリ。商紂ノ時、天安カラザルコト甚ダシ。而シテ微子・箕子・比干ハ皆能ク亂ヲ憂ヘ民ヲ安ンゼントス。故ニ孔子コレヲ歎ゼシナリ。』

四五九

柳下惠^ナ士師ト爲リテ三タビ黜^{シリツ}ケラル。人イハク、子未ダ以テ去ルベカラザルカ。イハク、道ヲ直クシテ人ニ事^{ツカ}フレバ、イヅクニ往クトシテ三タビ黜ケラレザラン。道ヲ枉^マゲテ人ニ事フレバ、何ゾ必ズシモ父母ノ國ヲ去ラン。

×

×

×

×

柳下惠が裁判官になつて、三度免職された。そこで或人が『こんなにはしばしば退けられるのだから、もう大いにして此國を去り、他國へ行つて身を立てたがよさうなものではないですか。』

と言つた。すると柳下惠が言ふやう、『私がやめられるのは、正道を守つて殿様や大夫に迎合した御奉公をしないからです。此調子では今の世の中にどこの國へ行つたつて三度や四度免職されないでせうか。もし正道をまげて御奉公するくらゐならば、何を好んで父母の國たる此國を立ちのきませうや。ここでさういふ御奉公をします。ともかくも私としては正しきを行ひさへすればよいので、免職されるか否かは私の知つたことでありません。』

此本文には、これに對する孔子様の評語が附いてゐたのが、落ちたのだらうといふ。なる程さうらしい。

柳下惠のことは前にも出てゐたが(三八九)孟子(公孫丑上篇)の左の一節が其人物をあらはしてゐる。

『柳下惠ハ、汗君ヲ羞デズ、小官ヲ卑シトセズ、進ミテ賢ヲ隱サズ、必ズ其道ヲ以テシ、遺佚セラレテ怨ミズ、窮スレドモ憫ヘズ。故ニ曰ク、ナンデハナンデナリ、ワレハワレナリ、ワガ側ニ祖^{クニ}裸程(肌ヲヌギハダカニナル)スト雖モ、ナンデイツクンゾ能クワレヲ浼^{ケガ}サンヤト。故ニ由然トシテコレト與ニシ、自ラ失ハズ。』

四六〇 齊ノ景公孔子ヲ待ツニイハク、季子ノゴトクスルハ、スナハチワレ能ハズ、季孟ノ間ヲ以テコレヲ待タント。イハク、ワレ老イタリ、用フル能ハザルナリト。

孔子行ル。

X

X

X

X

孔子様が齊の國に行かれたとき、齊の景公が、採用しようかどうか、採用するならどのくらゐの待遇で、といふことを近臣と相談して、『魯の大夫のうちで上席の季氏ほどの待遇をすることは力及ばず、さりとて末席の孟氏程度では氣の毒故、まづ季孟の中間ぐらゐの所で待遇しようか。』と話し合つたが、やがて氣が變つて、『わしももう年が年だから、孔子のやうな遠大の謀を爲す者を用ひてもしかたがない。』と言つた。孔子様が洩れ聞かれて、待遇問題はともかく、このあんばいではどうてい志は行はれぬと斷念して、齊を去られた。

四六一

齊人女樂ヲ歸ル。季桓氏コレヲ受ケテ三日朝セズ。孔子行ル。

X

X

X

X

魯の國が孔子様を用ひて、國が大に治まつたので、隣國の齊が恐れて、これを妨げようと思ひ、美人八十人の歌舞團を送つてよこした。大夫の季桓氏が喜び受けこれにうつつを抜かして三日も政

務を見なかつた。孔子様はせつかく魯の國を振興しようとした望みを失ひ、辭職して國を去つた。

此時の事情は「史記」の「孔子世家」に詳しく出てゐるが、定公の十四年孔子五十六才の時の事といふ。大司冠となつて國政に參與し、惡大夫の小正卯を誅して綱紀を肅正し、魯の國が大に治まつた。そこで齊が孔子様の禮樂政治を妨げんがために、艶麗卑俗な女樂を送つたところ、季桓氏が定公をも勸めて連日これを見物し、政務を怠つたのである。

四六二

楚ノ狂接輿歌ヒテ孔子ノ門ヲ過ク。イハク、鳳ヤ鳳ヤ、何ゾ徳ノ衰ヘタル。往ク者ハ諫ムベカラズ、來タル者ハ猶ホ追フベシ。ヤミナン、ヤミナン。今ノ政ニ從フ者ハ殆シト。孔子下リテコレト言ハント欲ス。趨リテコレヲ辟ク。コレト言フヲ得ザリキ。

「之門」の二字がなくて、「孔子ヲ過ク」とよめる本もある。それだと孔子様が道を車で通られた時の話になり、後の「下リテ」は車からおりることになる。そして「接輿」は固有名詞ではなく、「輿ニ接スル者」の意だといふ人もある。

X X X X

楚の國で狂人といはれる接輿なる者が、歌をうたひながら孔子の家の門前を通り過ぎた。其歌は孔子様を鳳凰にたとへたもので、其意味は「鳳凰よ、鳳凰よ。汝は靈鳥であるといふのに、この亂れた世に出るとは、何と其靈徳の衰へたることよ。今までの事は致し方がないが、今後としては改めるにまだおそくない。やめなさい、やめなさい。今日の政治の當局者たるはあぶないことぢや。」といふのであつた。孔子様はこれ聞きつけ、道を以て天下を救ふ志のやみ難さを告げようと思はれ、堂を下つて門外へ出て見られたが、接輿は小走りに避けて通り過ぎてしまつたので、これと語ることが出来なかつた。

當時の隱者仲間にも「簞ヲ荷フ者」(三七一)があつたが、孔子の政治運動を非難し冷笑し又は心配する者があり、孔子様としても「道無ケレバ即チ隱ル」(一九七)といふ理論と自身の行動との矛盾を多少感じて居られるだけに、外間の批判を氣にして辯解したがつて居られた様子が見える。次の二章に於ても同様。

四六三

長沮・桀溺耦ビテ耕ス。孔子コレヲ過ギ、子路ヲシテ津ヲ問ハシム。長沮イハ

ク、カノ與ヲ執ル者ハ誰トカ爲ス。子路イハク、孔丘ト爲ス。イハク、コレ魯ノ孔丘カ。對ヘテイハク、コレナリ。イハク、コレナラバ津ヲ知ラント。桀溺ニ問フ。桀溺イハク、子ハ誰トカ爲ス。イハク、仲由ト爲スト。コレ魯ノ孔丘ノ徒カ。對ヘテイハク、然リ。イハク、滔滔タル者天下皆コレナリ。而シテ誰トトモニカコレヲ易ヘン。且ナンデソノ人ヲ辟クルノ士ニ從ハンヨリハアニ世ヲ辟クルノ士ニ從フニ若カンヤト。種シテ輟マズ。子路行キテ以テ告グ。夫子憮然トシテノタマハク、鳥獸ハ與ニ羣ヲ同ジクスベカラズ。ワレコノ人ノ徒ト與ニスルニアラズシテ誰ト與ニカセン。天下道有ラバ丘ハ與ニ易ヘザルナリ。

×

×

×

×

川ぞひの畑で長沮・桀溺といふ二人の隠者がならんで、土をすいてゐた。たまたま楚から蔡への旅行中の孔子様が馬車でそこを通りかかられたが、子路に命じて渡し場を問はせた。馬を御してゐた子路は手綱を車上の孔子様に預けて車からおり、兩人に近づいて問ひかけた。すると長沮が言ふよう、「あの手綱を執つてゐるのは誰か。」子路が答へて「孔丘です。」「それは魯の孔丘か。」「そうです。」「魯の孔丘ならば、あちこちあるさまわる男だから、渡し場ぐらゐ知つてゐるはず

ぢや。」かう言つて教へてくれない。しかたがないから今度は桀溺にたづねた。桀溺が言ふや、「お前さんは誰か。」「仲由であります。」「それでは魯の孔丘の門徒か。」「さうです。」「今日の有様を見るに、あの川水のドンドン下に流れてかへらざる如く、道義頽廢して救ふべからざるごと、天下の人例外なしだ。お前さんの師匠は一體誰と一緒に此亂世を變へて太平の世にしようとするのか。孔丘はしきりに己を用ひる明君賢大夫をさがして東奔西走するが、今時そんな人のあらはずがない。お前さんも、孔丘のやうなあの人もいけない此人もだめだと一人一人の人を避けるに附いてあるくよりも、超然と世を避けて隠れ耕やすわれわれの仲間入りする方がよいではないか。」桀溺はかく言ひ捨てて長沮とふたりセツセと蒔いた種にかぶせた土をならし、見かへりもしない。子路は取り附く島もなく、車に歸つて委細を申し上げたところ、孔子様は本意なげに歎息しておつしやるやう、「如何に世を避ければとて、まさか鳥獸の仲間入りもできない。人と生れた以上は、天下衆人の仲間入りせずして誰と事を共にしようぞ。もし天下に道があれば、わしは何も世直しをしようと骨を折りはしない。天下に道がなければこそ、どうかして世を安んじ人を救はんものと東奔西走もするのぢや。」

子路從ヒテ後ル。丈人ノ杖ヲ以テ蓑ヲ荷フニ遇フ。子路問ヒテイハク、子夫子

ヲ見タルカ、丈人イハク、四體勤メズ、五穀分タズ、孰ヲカ夫子ト爲スト。其杖ヲ植テテ芸ル。子路拱シテ立ツ。子路ヲ留メテ宿セシメ、鶏ヲ殺シ黍ヲ爲リテコレヲ食ハシメ、其二子ヲシテ見エシム。明日子路行キテ以テ告グ。子ノタマハク、隱者ナリト。子路ヲシテ反リテコレヲ見シム。至レバスナハチ去レリ。子路イハク、仕ヘザレバ義無シ。長幼ノ節ハ廢スベカラズ。君臣ノ義コレヲイカンゾ、ソレコレヲ廢セン。其身ヲ潔クセント欲シテ大倫ヲ亂ル。君子ノ仕フルヤ、其義ヲ行ハントナリ。道ノ行ハレザルハ、スデニコレヲ知レリ。

X X X X X

子路が孔子様の御供をしての旅行中、道におくられて孔子様を見失つた。たまたま杖の先にアヅカ（モッコの類）を引つかけてかついだ老人に出會つたので、『あなたは私の先生を見かけませんでしたが。』とたづねた。老人は『口ばかり動かして體を働かせず、いね・むぎ・さび・ひえ・まめの五穀の區別も知らぬくせに、先生もないものぢや。』と言ひ放ち、杖を地に突き立てて草刈を始めた。子路の事だから定めしムツとしたらうが、相手が老人なので、手を組み合せて敬意を表しながら、なほも答を待つて立つてゐた。老人もそれに好感をもつたか、もう日も暮れるから今から追

ひかけてもだめだらうと、家に連れ歸つて一泊させ、鶏を料理しきび飯を焚いてもてなし、二人の息子呼び出して、長者を拜する禮を行はせた。翌日子路が孔子様に追ひついて其の事を申し上げたら、孔子様が『世を避けた賢人だらう。わしの本意を知らせたいものぢや。』とおつしやつて、子路に今一度引返して様子を見させた。行つて見ると老人は留守だったので、子路はふたりの息子に向ひ、かう言ひ置いて歸つた。『人たる者出でて仕へなければ君臣の義がないことになる。昨夜御尊父が兩君に拙者を拜させたのは、長幼の序を重んじられたのでござらうが、長幼の序さへ捨ててならぬのに、それよりも更に大事な君臣の義をどうして廢する事が出来ませうや。ただ亂世にけがされざらんことのみを欲し、一身だけをいさぎよくしようと思つて君臣の大義を亂すべきではありませんまい。君子が出でて仕へるのは、名聞利祿のためではなく、全く君臣の大義を行はんためでございます。今日の天下に正しい道の行はれぬ事は、とくに承知覺悟致して居ります。』

前章に孔子様が「天下道有ラバ丘與ニ易ヘズ。」と言はれ、本章に子路が「道ノ行ハレザルハスデニコレヲ知レリ。」と言つたのが、やむにやまれぬ孔子様の本音と思ふ。孔子様は「道有レバアラハレ道無ケレバ隠ル」といふ支那流の理論を説き（一九七）、かく行つた人を賞讃されるが、しかしそれは孔子様のがらにない事で、「かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ」救國済民の悲願こそ、孔夫子本來の姿なのである。

それ故孔子様としてはむしろ、傳統的支那思想にこだはらず、當初から「君子ノ仕フルヤ其義ヲ行ハントナリ」と打ち出された方が徹底したと思ふ。惜しい事だ。

四六五

逸民ハ伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・柳下惠・少連ナリ。子ノタマハク、其志ヲ降サズ、其身ヲ辱シメザルハ、伯夷・叔齊カト。柳下惠・少連ヲ謂フ、志ヲ降シ身を辱シム、言ハ倫ニ中リ行ハ慮ニ中ル、ソレコレノミト。虞仲・夷逸ヲ謂フ、隱居シテ言ヲ放マニシ、身清ニ中リ、廢權ニ中ル。ワレハスナハチコレニ異ナリ。可モ無ク不可モ無シ。

X

X

X

X

古來の「超越人」とでもいふべき非凡の賢人は、伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・柳下惠・少連である。孔子様が評して言はるるやう、「志を立つること高尚にして降し曲ぐるることなく、身を守ること廉潔にして辱しめ汚さるることなき者は、伯夷・叔齊であるかな。」次に柳下惠・少連を評して、「伯夷・叔齊とちがつて志を降し身を辱しめるけれども、言葉は義理にかなひ、行は常識にあたる。」さらに虞仲・夷逸を評して、「隱居して仕へず、一身の清淨を守り、言ひたい放題を言

ふやうだが、しかし言つて善い事悪い事を踏みはづさない。」さて御自身のことを言はるるやう、「わしは、これらの「超越人」とはちがつて、可もなく不可も無い平凡人ぢや。」

伯夷・叔齊・柳下惠以外の傳はわからない。朱張に対する批評がないが、おそらく落ちたのだらう。

「可モ無ク不可モナシ」をかの「適モ無ク莫モ無シ」(七六)すなはち必ずかうときめてしまはずに時に隨つて善處するといふ意味に解するのが通説だが、試みに今日用ひると同じ意味に解して見た。すなはち一方では平凡人なりと謙遜されると同時に、他方では超越人ならずして偉大な平凡人たることを誇りとされたのではな

うかと思ふ。

四六六

大師摯ハ齊ニ適キ、亞飯干ハ楚ニ適キ、三飯繚ハ蔡ニ適キ、四飯缺ハ秦ニ適キ、鼓方叔ハ河ニ入り、播鼗武ハ漢ニ入り、少師陽・擊磬襄ハ海ニ入ル。

以下三章、いづれも「子曰」がないが、おそらくは皆孔子様の言葉であらう。

本章は、孔子様がせつかく魯の國の樂を整備振興したのに、政治が衰へたので樂師たちが魯を去つて四散してしまつたことをなげかれたのである。

天子諸侯は毎食間に樂を奏させるので、其受持の樂師を「何飯」といふ。本文にある上に「初飯」があるのだらう。「亞」は「次」。

「樂長の摯は齊に行き、亞飯の干は楚に行き、三飯の繚は蔡に行き、四飯の缺は秦に行き、鼓打ちの方叔は河内かたひに入り、振り鼓の武は漢中に入り、副樂長の陽と磨打ちの襄は離れ島に渡つてしまつた。實に惜しい事ぢや。」

四六七

周公魯公ニ謂ヒテ曰ク、君子ハ其親ヲ施テズ。大臣ヲシテ以ヒラレザルヲ怨マシメズ。故舊大故無ケレバヌナハチ棄テズ。備ハルヲ一人ニ求ムルコト無カレ。

「周公が其子伯禽の魯公に封ぜられて入國した時、訓戒して、「人の上に立つ者は、親族を見捨てゝるな。大臣が不適任ならば免職するもやむを得ぬが、在職中は十分に信任して、其言の聽かれざるを怨ましめるやうなことをするな。古なじみの者は重大な理由がなければ棄てるな。又人には能不

能長所短所があるもの故、人を使用するには、その能くする長所を活かし、能くせざる短所を責めず、すべての事が一人に揃ふことを求めるな。」と言はれた。これが魯の國の始まりぢや。」

四六八

周ニ八士有リ。伯達・伯适・仲突・仲忽・叔夜・叔憂・季隨・季騫。

「昔の周には、一家に伯達・伯适・仲突・仲忽・叔夜・叔憂・季隨・季騫といふ八人の英才が生れた。盛んな事かな。今ではさやうな人物の輩出が望めない。」

子張第十九

本篇は全部高弟たちの言葉であつて、もちろん先生の教を「習ヒテ傳ヘタル」ものであるが、各人の特色も或程度あらはれてゐる。子夏の言葉が最も多く、子貢がこれに次ぐ。

X X X X X

四六九 子張イハク、士ハ危キヲ見テハ命ヲ致シ、得ルヲ見テハ義ヲ思ヒ、祭ニハ敬ヲ思ヒ、喪ニハ哀ヲ思フ、ソレ可ナランノミ。

「可ナランノミ」につき、古註に曰く、

『可トハ僅ニ足ルノ辭、能クコトゴトク此數事ヲ行ハバ士ト爲スニ庶シト言フノミ、以テ止ムベシト曰フニハ非ズ。』

X X X X X

子張の言ふやう、「士たる者は、君父の危難を救はんためには命をも差出し、利得問題があつたら道理上取つて然るべきか否かを思ひ、祭に臨んでは誠を盡さんことを思ひ、喪に在つてはかなしみを極めんことを思ふべきだ。これだけが揃へば、まづ士と謂つてよからう。」

これは全く孔子様の受賣であること明かだ(五二・六六・三四四・四二七等)。

四七〇 子張イハク、徳ヲ執ルコト弘カラズ、道ヲ信ズルコト篤カラズンバ、イヅクンゾ能ク有リト爲シ、イヅクンゾ能ク亡シト爲サン。

X X X X

子張が言ふやう、「徳を行ふならば、ひろく併せ行はねばならぬ。道を信ずるならば、其信念が強く實踐の志が堅くなくてはならぬ。もし一善を行つて自ら得たりとする如き狭くかたまつた氣持であつたり、たちまち信じたたちまち疑ふやうな薄い信仰であつては、道徳が有りとも言へず、無しとも附かず、あふはち取らずになつてしまふぞ。」

伊藤仁齋曰く、

「徳ハ執ルニ在リ。然レドモ弘カラザレバスナハチ徒ラニ狷介ノ士ト爲ル。道ハ信ズルニ在リ。然レドモ篤カラザレバスナハチ必ズ塗説(四四五)ノ流ト爲ル。故ニ徳ヲ執ルコト必ズ弘ク、道ヲ信ズルコト必ズ篤ケレバ、スナハチ以テ君子ト爲ルベシ。然ラザレバスナハチ、其始メハ得ルコト有ルガゴトシト雖モ、然レドモ道徳ハツヒニ己ノ有ト爲ラズシテ、亦必ズ亡カラシム。」

四七一

子夏ノ門人交リヲ子張ニ問フ。子張イハク、子夏ハ何トカ云ヘル。對ヘテイハク、子夏ハ、可ナル者ハコレニ與ミシツノ不可ナル者ハコレニ拒ゲ、ト曰ヘリ。子張イハク、ワガ聞ク所ニ異ナレリ。君子ハ賢ヲ尊ビテ衆ヲ容レ、善ヲ嘉ミシテ不能ヲ矜メト。ワレノ大賢ナランカ。人ニ於テ何ゾ容レザル所アラン。ワレノ不賢ナランカ、人將ニワレヲ拒ガントス。コレヲイカンゾソレ人ヲ拒ガン。

X X X X X

子夏の門人たちが子張に友と交はる道をたづねた。子張の言ふやう、「子夏は何と言つたか。子夏先生は、交つて益のある者とは附合ひ、益のない者を受附けるな、と言はれました。」「わしが大

先生にうかがつた所とは違つてゐる。大先生は「君子たる者は、賢人を尊ぶと同時に、ひろく衆人を受け入れ、一善の取るべき者あらばこれを重んじ、又無能の者にも同情をもつものぞ。」と仰せられた。自分が賢ければ誰を受け入れても影響される心配はないことだし、自分が賢くなければ、他人がこちらを受け附けぬといふことはあるにしても、こちらが人を受け入れぬといふ筋はあるま

5.1

氣の大きな子張と、用心深い子夏と、いはゆる「師ヤ過ギタリ商ヤ及バズ」(二六八)のそれぞれの人物があらはれてゐる。どちらの意見がよいか議論もあらうが、結局論點が違ふやうだ。子夏は「心友」を擇ぶ道を説いて「己ニ如カザル者ヲ友トスルナカレ」(八)と教へ、子張は一般交際すなはち「面友」を論じて「汎ク衆ヲ愛シテ仁ニ親シム」(六)べきを言つたのであつて、いづれも孔子様の教の一面を傳へたものだ。

四七二

子夏イハク、小道ト雖モ必ズ觀ルベキモノ有リ。遠キヲ致スニハ恐ラクハ泥マシ。コレヲ以テ君子ハ爲サザルナリ。

X X X X

子夏の言ふやう、『一技一藝の小さい道にもそれぞれ取り得はあるが、遠大なる聖人の道を成就せんと志す者としては、さやうの末技にたづさはると、それに引つかかつて大成を妨げる心配があるから、君子はそれをせぬのである。』

法師にならうと志した者が、檀家から迎の馬をよこしたときに乗れなくては不都合だとて馬術を習ひ、法事の後に酒が出た場合に何か隠し藝がなくては殺風景だと思つて小歌を稽古したところ、その二つがだんだん面白くなつて、つひ經を讀むことを學ぶ時がなくなつた、といふ徒然草のいくさりを思ひ出す。

四七三

子夏イハク、日ニソノ亡キ所ヲ知り、月ニソノ能クスル所ヲ忘ルルコト無キヲ、學ヲ好ムト謂フベキノミ。

X X X X X

子夏の言ふやう、『毎日毎日自分のまだ知らない所を知り得て知識を廣め、毎月毎月既に知り得た所を忘れぬやうに心がけてこそ、眞に學を好む者と謂ふべきぢや。』

参照——一四・二七

四七四

子夏イハク、博ク學ビテ篤ク志シ、切ニ問ヒテ近ク思フ。仁其中ニ在リ。

X X X X X

子夏の言ふやう、『仁に志す者は、まづ博く學ばねばならぬ。しかし博く學んでもそれを實行に移す志が篤くなくては、何の役にも立たぬ。又學ぶに當つて疑が起つたならば、熱心に師友に質問して完全に理解することを期すべく、又いたづらに心を高遠の理想にのみ馳することなく、身近かの實際問題に引き當てて思案工夫することを要する。この博學・篤志・切問・近思は、それが直ちに仁とは謂へないが、それによつてのみ仁に達し得るのである。』

四七五

子夏イハク、百工ハ肆ニ居テ以テ其事ヲ成シ、君子ハ學ビテ以テ其道ヲ致ス。

X X X X X

子夏の言ふやう、『職人が職場に在つて仕事に打ち込む如く、君子は一心不亂に學んで其道を成

就せねばならぬ。」

四七六 子夏イハク、小人ノ過チヤ必ズ文ル。

X X X X X

・子夏の言ふやう、『君子は過つて改むるに憚らぬが、小人が過ちをすると、色々につくりかざつて言譯を言ひ、人を欺き自らを欺き、過ちを重ねる。』

殷の紂王は、暴君悪王として有名だが、けつして愚者ではなく、「智ハ以テ諫ヲ拒グニ足リ、言ハ以テ非ヲ飾ルニ足ル」智者辯者であつた。その「智」と「辯」とが危険なのである。

参照——八・二二九・四〇五・四八九

四七七 子夏イハク、君子ニ三變有リ。コレヲ望メバ儼然タリ、コレニ即ケバ温ナリ、其言ヲ聽ケバ厲シ。

X X X X

子夏の言ふやう、『君子の容態には三變化がある。遠くから望み見ると威儀堂々として畏るべく、近く接すれば顔色温和にして親しむべく、しかも其言葉を聴くと嚴正にして犯し難い。』

「君子」とあるが、おそらく「温ニシテ厲シク、威有リテ猛カラヌ」孔子様其人について言つたのであらう（一八四）。

伊藤仁齋曰く、

『コレヲ望ミテ儼然タルハ禮ノ存スルナリ、コレニ即キテ温ナルハ仁ノ著ルルナリ、其言ノ厲シキハ義ノ發スルナリ。ケダシ盛徳ノ至リニシテ光輝ノ著シキ、自ラコレカクノ如シ。謝氏曰ク、「コレ變ズルニ意アルニアラズ、ケダシ竝ビ行ハレテ相悖ラザルナリ。良玉ノ潤温ニシテ栗然タルガ如シ」ト。』

四七八

子夏イハク、君子ハ信ゼラレテシカル後ニ其民ヲ勞ス。未ダ信ゼラレザレバ、スナハチ以テ己ヲ厲マシムト爲ス。信ゼラレテシカル後ニ諫ム。未ダ信ゼラレザレバ、スナハチ以テ己ヲ謗ルト爲ス。

子夏の言ふやう、『君子が人民を使ふには、十分に信用を得た上で勞役させる。さうすれば人民は喜んで勤勞奉仕をするが、信服させないで働かせると、人民は自分たちを苦しめるものとして怨むことになる。又君に對しても、十分に信用を得た上で諫める。信任なくして諫めると、君は自分をそしめるものとしてうとむことになる。上に對しても下に對しても、まごころを傾けて信賴を得ることが第一だ。』

四七九

子夏イハク、大徳閑ヲ踰エズンバ、小徳ハ出入ストモ可ナリ。

「閑」は「閑」で、出入を止める「テスリ」。

子夏の言ふやう、『君に忠父母に孝といふやうな根本の大道徳が軌道に乗つてゐれば、應對進退の如き末節に多少の出入があつてもさしつかえなう。』

X X X X X

「大徳ハ閑ヲ踰エズ。」と切るよみ方もあるが、いはゆる「大行ハ細謹ヲ顧ミズ」の意味に取られてはこまる故、「踰エズンバ」とよんだ。小徳にこだはつて大徳を失ふな、といふ方の意味なのである。

四八〇

子游イハク、子夏ノ門人小子、洒掃應對進退ニ當リテハスナハチ可ナリ。ソモソモ末ナリ。コレヲ本ヅケバスナハチ無シ。コレヲ如何。子夏コレヲ聞キテイハク、噫、言游過テリ。君子ノ道ハ、イヅレヲカ先ニシ傳ヘ、イヅレヲカ後ニシ倦マン。コレヲ草木ノ區ニシテ以テ別アルニ譬フ。君子ノ道ハイヅクンゾ誣フベケンヤ。始有リ卒有ル者ハ、タダソレ聖人カ。

X X X X X

子游(言游)が『子夏君門下の青年たちは、水をまいたり掃除したり來客の接待や進退作法などはよくできる。しかしそれらは元來末の事で、根本の倫理については一向教へられて居らん。どしたものでや、』と言つた。子夏が後にこれを聞いて言ふやう、『イヤハヤ言游君も飛んだまぢがた事を言ふものかな。君子たるの道は、どれを先に教へ、どれはめんどうだから後廻しにする、』

いふ風にきまつてゐるものではない。たとへば草木も其種類に應じて育て方が違ふやうなものだ。君子道を教へるに無理をすべきだらうか。始めと終りすなはち道の本末を同時に兼ね備へ得るのは聖人だけで、其以下の者に至つては、小より始めて大に終らざるを得ないのだ。」

四八一 子夏イハク、仕ヘテ優ナレバスナハチ學ビ、學ビテ優ナレバスナハチ仕フ。

安井息軒が

『或ハ疑フ、學ビテノ句ハ當ニ仕ヘテノ句ノ前ニ在ルベシト。……今案ズルニ、學ビテ優ナレバスナハチ仕フルハ士子ノ常ナリ、人皆コレヲ知ル。既ニ仕フレバ、行ツテ餘力有リト雖モ多クハ復タ學バズ。子夏ノ意、主トスル所ハココニ在リ。故ニ仕フルノ句ヲ以テ前ニ置クノミ。』
と言ふのは至極もつとも故、其意味で兩句を顛倒して現代語譯して見た。

X X X X X

子夏の言ふやう、『學問が十分に進んで餘力が出来たらはじめて仕官すべきである。そして仕官した以上全力を役向にそそぐべきは當然だが、しかし餘力があつたら學を廢することなく絶えず勉

強して、智徳を増進し人物を大成すべきである。ところが仕官をすると學問を抛棄してしまふのが官吏の通例で、それは甚だ宜しくない。』

四八二 子游イハク、喪ハ哀ヲ致シテ止ム。

「カナシミヲキハメンノミ」とよんでもよからう。

X X X X X

子游の言ふやう、『父母の喪は結局悲哀の眞情を盡すだけの事で、其以上の虚禮はいらぬ。』

四八三 子游イハク、ワガ友張ヤ、能クシ難キヲ爲ス、然レドモ未ダ仁ナラズ。

X X X X X

子游の言ふやう、『友人子張君は、常人の能くし難い事を爲し遂げる大才があるが、誠意が缺け人情が薄い故、まだまだ仁とはいへぬ。』

四八四

曾子イハク、堂堂タルカナ張ヤ。與ニ竝ビテ仁ヲ爲シ難シ。

×

×

×

×

曾子の言ふやう、『堂堂たる大人物なるかな、子張君は。しかしどうも調和的でないので、一絡に助け合つて仁を爲すことがむづかしい。』

四八五

曾子イハク、ワレコレヲ夫子ニ聞ケリ。人未ダ自ラ致ス者有ラズ。必ズヤ親ノ喪カ。

×

×

×

×

曾子の言ふやう、『私が先生からうかがつたことだが、人間が特につとめずして自發的に其眞情の限りをあらはすといふことは、中々有り得ない。有るとすれば、まづ親の葬式の時ぐらゐのものか。』

四八六

曾子イハク、ワレコレヲ夫子ニ聞ケリ。孟莊子ノ孝ヤ、其他ハ能クスベシ。ソノ父ノ臣ト父ノ政ヲ改メザルハ、コレ能クシ難キナリ。

「孟莊子」は魯の大夫仲孫速。父は獻子。

×

×

×

×

曾子の言ふやう、『私が先生からうかがつたことだが、孟孫子の親孝行も、外の事はまだまねもできるが、父の死後其舊臣をそのまま召使ひ、其政治振りを改めずにそのまま受け継いだことは、餘人には出来ない事だ。』

伊藤仁齋曰く、

「獻子ハ魯ノ賢大夫、ソノオヲ用ヒ政ヲ立ツル、モトヨリ觀ルベキモノ多シ。而シテ莊子皆能ク遵守シテ改メズ。夫子言フ。其他ノ孝行人ノ能クセザル所ノモノアリ、然レドモ皆此事ノ最モ能クシ難シト爲スニ若カザルナリト。ソレ孝ハ、善ク人ノ志ヲ繼ギ、善ク人ノ事ヲ述ブルモノナリ。父ニ善政良法アリテ、而シテコレガ子タル者奉行スルコト能ハズ、或ハタヤスクコレヲ變更シテ以テ其ノ好ム所ニ絢フ者、世毎ニコレアリ。」

今莊子、父ノ臣ト父ノ政トヲ改メザルハ、スナハチタニ元徳ヲ辱メザルノミナラズ、且ツ以テ祖業ヲ光ニスベシ。アニ其他ノ孝行ノ能ク比スベキ所ナランヤ。シカルニ後世ノ史氏ノ孝子ヲ傳スル者、専ラ孝行ノ能クシ難キモノヲ取りテコレヲ稱スルハソモソモ末ナリ。』

参照——一

四八七

孟氏陽膚ヲシテ士師爲ラシム。曾子ニ問フ。曾子イハク、上其道ヲ失ヒテ民散ズルコト久シ。モシ其情ヲ得バ、スナハチ哀矜シテ喜ブコトナカレ。

— X X X X X

魯の大夫孟子が曾子の門人の陽膚を裁判官に任用した。そこで陽膚が曾子に裁判官としての心得方をたづねた。曾子の言ふやう、『今や上たる政府が政道の宜しきを失ひ、下々の人民が生活難に陥り、民心離散し道義頹廢せること年久しい。犯罪の起るのもひつきよう其人のみの罪ではなく、悪政が民を驅つて罪を犯さしめるのである。それ故嫌疑者が「恐入りました」と白状したとき、あかわいさうな氣の毒な、とあはれみかなしめ。ゆめゆめ喜んではいけません。』

「法律家が論語を読む」といふ講演をしたことがあるが、論語には、今まで其場所場所で指摘したやうに、今日の政治法律に適切な言葉が中々ある。この「喜ブコトナカレ」なども、判事検事警察官が永久に「紳ニ書スベキ」(三八一)金言である。

狹生徂徠も

『情トハ獄情ヲ謂フ。獄情ハ得難シ、故ニコレヲ得レバスナハチ喜ブハ、獄ヲ聽ク者ノ常ナリ。』

と言つてゐるが、大正以來ややもすれば人權蹂躪問題が起つたのも、結局犯罪を「物」にして「シメタ」と喜ぶ氣持があつたからだ。私はかの「帝人事件」の際、無實の罪に陥らんとする友人のための特別辯護に立つたとき、本章を引用し、『檢事諸公は本件の審理中喜ばれたことはなかつたでせうか。』と論じた。

四八八

子貢イハク、紂ノ不善ハカクノ如クコレ甚シカラザリシナリ。コレヲ以テ君子ハ下流ニ居ルコトヲ惡ム。天下ノ惡皆歸スレバナリ。

X X X X X

子貢の言ふやう、『殷の紂王は暴君惡王の標本のやうに謂はれるが、實際は評判されるほどひど

くもなかつたのだらう。ただその度重つた不善の行状のために、あれも紂の悪政これも紂の淫亂、といふことになり、殘忍無道の間屋にされてしまつたのであつて、ちようど地形の低い所に汚水が集まりたまるやうなものだ。それ故君子は下流の地ともいふべき不善の境遇に身を置くことを嫌ふ。天下の悪名が皆一身に集まるからである。』

大岡政談などが反對の例だ。大岡越前守が名判官だといふことになると、ほかの人のした裁判までも「大岡さばき」として傳へられることになる。

四八九 子貢イハク、君子ノ過チャ日月ノ食ノ如シ。過ツヤ人皆コレヲ見ル、更ルヤ人皆コレヲ仰グ。

X X X X X

子貢の言ふやう、「君子でも過失はあるが、君子の過失は小人の過失と違ふ。君子の過失は日蝕月蝕の様なもの、少しも隠し立てをしないから、衆人がこれを見て、あの君子にして此過ちあるかと驚くこと、日蝕月蝕を見て太陽が黒くなつた月が暗くなつたと驚き怪しむやうなものである。」

しかし其過ちはさつそく改められるので、人々がさすがは君子だと感服すること、蝕が終つて後の日月が忽ち再び圓かにして光輝前に倍するのを仰ぎ見る如くである。』

さすがは「言語」の子貢で、言ふ事がいつも氣がきいてゐる。以下數章とりどりに面白い。

四九〇

衛ノ公孫朝子貢ニ問ヒテイハク、仲尼イツクニカ學ベル。子貢イハク、文武ノ道未ダ地ニ墜チズシテ人ニ在リ。賢者ハソノ大ナルモノヲ識シ、不賢者ハソノ小ナルモノヲ識ス。文武ノ道有ラザルコトナシ。夫子イツクニカ學バザラン。而シテ亦何ノ常師カコレ有ラン。

X X X X X

衛の大夫の公孫朝が子貢に、「仲尼先生はどこで誰に就いて學ばれたのか。」とたづねた。子貢の言ふやう、「周の文王武王の道はまだ亡び盡さずして人に残つてゐます。すなはち其大道は賢人が知つて居り、其小道は不賢者も心得てゐる次第で、文武の道は天下至る所に存するのであり、そして先生は下問を恥ぢず誰にでも道を問はれるのですから、先生はどこで學ばれなかつたといふこと

もないと同時に、誰といふさまつた師匠はもたなかつたのです。』

参照——一六六

四九一

叔孫武叔、大夫ニ朝ニ語リテイハク、子貢ハ仲尼ヨリ賢レリト。子服景伯以テ子貢ニ告グ。子貢イハク、ユレヲ宮牆ニ譬フルニ、賜ノ牆ヤ肩ニ及ベリ。室家ノ好キヲ窺ヒ見ル。夫子ノ牆ハ數仞ナリ。其門ヲ得テ入ラザレバ、宗廟ノ美百官ノ富ヲ見ズ。其門ヲ得ル者或ハ寡シ。夫子ノ云フコト、亦宜ナラズヤ。

「夫子」——始のは孔子、後のは叔孫武叔。

X X X X

魯の大夫の叔孫武叔が、朝廷での大夫仲間の雑談の際、「子貢は師匠の仲尼よりすぐれてゐる。」と言つた。同僚の子服景伯が後に其事を子貢に告げたところ、子貢の言ふやう、「飛んでもない話です。先生と私とはまるで人物の桁が違ひます。御殿の扉に譬へて見ますと、私の扉はヤット人の

肩に届くくらゐですから、扉越しに中の家作の小ざれいなのが見えます。ところが先生の扉は高さ數丈ですから、入口の門をさがしあててそこからはいらなくては、其中の御靈屋の美しさ、そこに百官が袖をつらねた盛んな光景を見ることが出来ません。そして其門に入り得る人が事によると少ないのですから、叔孫武叔がさやうに言はれるのも、無理からぬことではありませんか。』

暗に叔孫武叔が人を知らざるの甚しきを遺憾としたのである。古註に曰く、

『賢人ヲ知レバスナハチ聖人ヲ知ル。武叔ヲシテ果シテ子貢ノ子貢タル所以ヲ知ラシメバ、スナハチ孔子ノ孔子タル所以モ亦略知ルコトヲ得ベシ、アニ此言ヲ爲スニ至ランヤ。スナハチ武叔ハ特ニ孔子ヲ知ラザルノミナラズ、亦子貢ヲ知ラズト爲ス。』

四九二

叔孫武叔仲尼ヲ毀ル。子貢イハク、以テ爲スコト無カレ。仲尼ハ毀ルベカラザルナリ。他人ノ賢者ハ丘陵ナリ。猶ホ踰ユベシ。仲尼ハ日月ナリ。得テ踰ユルコト無シ。人自ラ絶タント欲スト雖モ、ソレ何ゾ日月ヲ傷ランヤ。マサニ其量ヲ知ラザルヲ見ルナリ。

これは子貢が其場で武叔に言つたのか、前章のやうに後に傳聞して他人に言つたのかハッキリしないが、前章のやうに「夫子」と言はずして「仲尼」と言つてゐるところを見ると、其場の應答らしい。武叔が何の意趣がしきりに孔子様を悪口するの、子貢も腹に据え兼ね、面と向つて痛烈にやつつけたものらしい。

X

X

X

X

叔孫武叔が孔子様を悪口したので、子貢がこれに向つて言ふやう、『おやめなさいませ。仲尼をそしられてもむだであります。賢人にもピンからキリまであります。普通の賢人といふのは。謂はば地面よりわづかに高い築山か岡見たやうなものですから、踏み越えようと思へば越えられます。仲尼は日月の如く地上からかけはなれた上空にあります。越えようとしたつて及びもつかぬことです。人間が日月をそしつてこれと絶交して見たところで、少しも日月の光を損することにはならず、ただ自分が身のほどを知らぬことを暴露するのみであります。』

伊藤仁齋曰く、

『其智イヨイヨ深ケレバ、スナハチ聖人ヲ知ルコトイヨイヨ深シ。其學イヨイヨ至レバ、スナハチ聖人ヲ尊ブコトイヨイヨ至ル。孔子ノ喪ニ、子貢家上ニ盧スルコト六年ナリシガ如キハ、聖人ヲ知ルノイヨイヨ深ク

シテ、聖人ヲ尊ブノイヨイヨ至レル者ト謂フベキナリ。』

四九三

陳子禽子貢ニ謂ヒテイハク、子ハ恭ヲ爲スナリ。仲尼アニ子ヨリ賢ランヤ。子貢イハク、君子ハ一言以テ知ト爲シ、一言以テ不知ト爲ス。言ハ慎マザルベカラザルナリ。夫子ノ及ブベカラザルヤ、猶ホ天ノ階シテ升ルベカラザルガトキナリ。夫子ニシテ邦家ヲ得バ、イハユルコレヲ立ツレバココニ立ち、コレヲ導ケバココニ行キ、コレヲ緩ズレバココニ來リ、コレヲ動カセバココニ和ギ、ソノ生クルヤ榮エトシ、ソノ死スルヤ哀シム。コレヲ如何ゾソレ及ブベケンヤ。

子禽は孔子様の門人か子貢の弟子かと前に言つたが(一〇)、本章で見ると後者らしい。

X

X

X

X

子貢がしきりに孔子様を讚美してとうてい及ぶ所にあらずと言ふのを聞いて弟子の陳子禽が子貢に向ひ、『先生はあまり御謙遜が過ぎます。仲尼大先生だつて何も先生よりさう立ちまさつて居られたわけではありません。』と言つたので、子貢がこれをたしなめて言ふやう、『君子たるもの、

一言で智慧が知れ又一言で無智が知れるのだから、言葉はつつしまねばならぬ。お前もそんな輕卒な事を言ふな。大先生がわれわれの及びもつかぬえらい方であつたことは、正に天がはしごをかけたも登れぬやうなものだ。もし大先生が天下の政治に當り得たならば、昔の言葉にいはゆる「民を養へば其生活が確立し、民を指導すれば其教のままに付き従ひ、民を撫で安んずれば遠方の人も來り集まり、民を激勵すれば喜び勇みやはらぎ樂しむ。その生ける時は民は此人と共に榮え、その死する時は民が父母を失へる如く悲しむ。」といふことになつたであらう。どうしてどうしてわれわれ風情の及ぶ所であらうぞ。」

古註に

『生クルヤ榮エ、死スルヤ哀シムトハ、聖人ノ一世ニ關係アルノ形象ヲ言フ。聖人ノ生クル、邦家皆立ち、皆行き、皆來リ、皆和グ。太陽ノ一タビ出デテ萬物皆忻然トシテ色ヲ生ズルガ如シ。コレ榮ナラズヤ。聖人死スレバ、邦家立タズ、行カズ、來ラズ、和ガズ、太陽ノ一タビ没シ萬物色ヲ失ヒテ闇黒ナルガ如シ。コレ哀シカラズヤ。ソノ廣大ナルコトカクノ如シ。イカンゾソレ及ブケンヤ。』

とある。

この「死スルヤ」とある所を見ると、此問答は孔子様歿後の事だらうと思ふ。死後時經ると、其人を見ず又は

よく知らなかつた者は、そんなにえらい人だつたのだらうか、などと言ひ出すことにもなるものだ。孔子様に ついてもさういふことがあつたらしい。すこし釣合の取れぬ話かも知れぬが、私は、子供の時に九代目市川團十郎を見せて置いてくれたことを、兩親に感謝してゐる。そして此絶世の名優を見たことのない近頃の劇評家がややもすれば、團十郎團十郎といふが大したことはあるまい、などと言ふのを聞いてかたはらいたく思ふ。まして師匠思ひの子貢が、お前の方がまさつてゐるだらうと言はれて、喜ぶどころか憤慨するのは、もつともなことだ。そして編者が子貢の孔子絶讃辭四章を以て論語の實質上の結びとしたのは、大に意を用ひた所と思はれる。

堯日第二十

堯曰篇は論語の最終篇で、三章から成つてゐるが、おそらく元來は第一章一文だけで、次の二章は後に附加へられたものではなからうか。そして第一章は必ずしも孔子の言葉ではなく、孔子が堯舜文武の道を傳へたことにならぬ、編者が古來帝王相傳ふるの道を述べて、論語の結びとしたのではないかと思はれる。

四九四

堯イハク、アアナンチ舜、天ノ曆數ナンチノ躬ニ在リ。マコトニ其中ヲ執レ。四海困窮セバ、天祿永ク終ヘント。舜モ亦禹ニ命ズ。イハク、ワレ小子履、敢テ玄牡ヲ以テ敢テ昭カニ皇皇タル后帝ニ告グ。●罪有ルハ敢テ赦サズ。帝臣蔽ハズ、簡プト帝ノ心ニ在リ。朕ガ躬罪有ラバ、萬方ヲ以テスルコト無ケン。萬方罪有ラバ、朕ガ躬ニ在ラント。周二大賚有リ。善人コレ富ム。周親有リト雖モ、仁人ニ如カズ。百姓過チ有ラバ、ワレ一人ニ在リ。權量ヲ謹ミ、法度ヲ審カニシ、廢官ヲ脩メバ、四方ノ政行ハレン。滅國ヲ起シ、絶世ヲ繼ギ、逸民ヲ舉グレバ、天下ノ民心ヲ歸ス。重ンズル所ハ、民ノ食・喪・祭ナリ。寛ナレバ

スナハチ衆ヲ得、信ナレバスナハチ民任ジ、敏ナレバスナハチ功有リ、公ナレバスナハチ民説ブ

×

×

×

×

堯が天下を舜に譲つたとき、舜に告げて「ああお前舜よ、天の命數がお前の身に歸したので位を譲るのだが、天命を受けて天子となつた以上は、萬事過不及なき中庸の道をしかと守つて民を治めよ。もし政を失つて四海萬民を困窮に陥しれたならば、一旦受け得た天の恩命も永く斷絶するであらう。」といましめた。舜も亦禹に天下を譲るに當つて、同様の言葉を與へた。かくして禹は子孫に傳へて夏の國が續いたが、桀王に至つて無道だつたので、殷の湯王がこれを滅ぼして天子の位に即いた。其時諸侯に宣言して、「朕が桀を伐つた時天を祭つて、「ふつつかなる拙者履（湯王の名）黒牛のいけにえを捧げて天を祭り、至上至高なる上帝に明かに申し上げます。かの桀は大罪赦し難くこれを討伐するのでありますが、上帝の御家來とも申すべき賢人はこれを見失ふことなく採用いたしませう。而してかれらを選抜いたしますにも、けつして私意をさしはさまず、上帝の御心まかせにいたしませう。」と誓つたことであるが、今天子となつた以上は、政治上の責任はすべて朕に存する。もし朕の身に過失があつた場合には、萬民に責任を負はせるやうなことはいたしません。

もし萬民に過失があつたならば、其責任は朕が一身に歸せしめよ。』と言つた。さて殷の末に至り紂王が暴逆だつたので、周の武王がこれを討伐したが、其時も天に誓つて、『周には天から授かつた大きなたまものがある。それは善人の多いことであります。殷にはかの微子・箕子・比干のやうな近親はあるが、紂王がそれを用ひずして其心が離反し居り、周の仁人が心を合せて私を助けるには及びませんから、必ずこれを滅ぼして天下を安んずることを得ませう。』と言つた。そして天子となつた後は、度量衡を嚴格にし、禮樂法制を適正にし、すたれた官職を復活したので、四方の政が成績を擧げた。又滅亡した國を復興し、斷絶した家を再建し、棄てられてゐた賢人を採用したので、天下の民が心を寄せた。而して最も重んじた所は、人民の食生活と、父母の葬式と、先祖の祭とであつた。要するに堯舜より文武に至るまで先王の天下を治むる道は、孔子の説かれる『寛ナレバスナハチ衆ヲ得、信ナレバスナハチ民任ジ、敏ナレバスナハチ功有リ、公ナレバスナハチ民説ブ。』といふ寛・信・敏・公の四徳に盡きるのであつて、この先王の治を萬世に繼ぐことが、すなはち孔子様の大願であつたのだ。

最後の一段は前に類似の句があり(四三七)、或は「食・喪・祭」までが本文で、末段は後にまぎれ込んだのではないかと思はれるが、試みに前後の連絡を附けて見た。

四九五

子張孔子ニ問ヒテイハク、イカニセバココニ以テ政ニ從フベキカ。子ノタマハク、五美ヲ尊ビ、四惡ヲ屏ケバ、ココニ以テ政ニ從フベシ。子張イハク、何ヲカ五美ト謂フ。子ノタマハク、君子ハ惠ニシテ費サズ、勞シテ怨マレズ、欲シテ食ラズ、泰クシテ驕ラズ、威アリテ猛カラズ。子張イハク、何ヲカ惠ニシテ費サズト謂フ。子ノタマハク、民ノ利スル所ニ因リテコレヲリス、コレ亦惠ニシテ費サザルニアラズヤ。勞スベキヲ擇ビテコレヲ勞ス、又誰ヲカ怨ミン。仁ヲ欲シテ仁ヲ得タリ、又ナンゾ貪ラン。君子ハ衆寡ト無ク、小大ト無ク、敢テ慢ルコト無シ、コレ亦泰クシテ驕ラザルニアラズヤ。君子ハ其衣冠ヲ正シクシ、其瞻視ヲ尊クシ、儼然トシテ人望ミテコレヲ畏ル、コレ亦威アリテ猛カラザルニアラズヤ。子張イハク、何ヲカ四惡ト謂フ。子ノタマハク、教ヘズシテ殺ス、コレヲ虐ト謂フ。戒メズシテ成ルヲ見ル、コレヲ暴ト謂フ。令ヲ慢ニシテ期ヲ致ス、コレヲ賊ト謂フ。猶ク人ニ與フルナリ、出納ノ吝ナル、コレヲ有司ト謂フ。

本章は例の「齊論」から加はつたものらしい。

X X X X X

子張が孔子様に向つて『どうしたら政治を擔當することができませうか。』とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、『五美を尊んで四惡を除けば、政治に従事し得るぞ。』『五美とは何を申しますか。』『人の上に立つ者は、「惠ニシテ費サズ」「勞シテ怨マレズ」「欲シテ貪ラズ」「泰クシテ驕ラズ」「威アリテ猛カラズ」でなくてはならぬ。これが五美ぢや。』『それでは「惠ニシテ費サズ」とはどういふ意味でござりますか。以下順次御説明を願ひます。』『必ずしも金をかけずとも、人民の利益になるやうな施設を工夫して生活の便をはかつてやれば、「惠ニシテ費サズ」ではあるまいか。人民を使役するだけの十分の理由のある仕事を選んで働かせれば、人民は喜んで勤勞する、何で誰を怨まうや。當局者の欲する所が私利でなくて仁であれば、其結果おのづから民心と風俗とが振興される次第であつて、すなはち「仁ヲ欲シテ仁ヲ得タリ」といふことになるのだから、其上何をよくばる必要があらうか。君子は相手が大勢でも小人数でも、事が大きくても小さくても、或は恐れてしりごみしたり或は侮り輕んじたりすることがないから、すなはち「泰クシテ驕ラズ」ではないか。君子は又衣冠をキチンとつけ、目の付け所に心を用ひてキョロキョロしたりし

ないから、「威アツテ猛カラズ」ではあるまいか。』『それでは四惡とは何でござりますか。』『四惡とは、虐・暴・賊・吝ぢや。人民に爲すべき事爲すべからざる事を教へても置かずに、惡事をしたからとてこれを殺すのが、「虐」である。十分に指導し警告もしないで、足元から鳥が立つ如く成績を督促するのが「暴」である。命令をゆるがせにして置きながら期限に合はぬとて罰したりするのは、人民をそこなひ害するものであるから、これを「賊」と謂ふ。どうせ與へねばならぬ金だのに何のかのと出し惜みをするのが「吝」であつて、それが「官僚」といふものぢや。』

この「官吏訓」とでもいふべきものは、恐ろしいほど戦争中から今日にかけてのわが國の行政状態に適切で、いろいろと思ひ當ることがある。「五美」の方では、「勞シテ怨マレズ」が面白い。戦争中から今日にかけて、政府のする事なす事國民に怨まれ通しなのは、どうしたものだ。怨む國民必ずしもすべて正しいとはいへぬが、怨まれる政府のやり口は、いかにもへただと思ふ。第一次世界大戰の初期、私は参戦直前の米國にゐたが、當時大統領ウイルソンは、既にビシビシと統制を行つてゐた。それで私は或る米人に『米國は自由の國と聞いたが、相當不自由ではないですか。ウイルソンも中々デスポティック（專制的）ですね。』と言つたところ、其米人が聞きなほつて、『ノー、ウイルソンがデスポティックなのではない、われわれがデスポティックなのです。』と言つた。なるほどこれが本當のデモクラシーなのだ。デモクラシーとは、指導者なしに國民各

自が勝手氣儘をすることではない。國民全體が指導者を通して秩序ある共同生活を營み、必要に應じては自ら專制をもすることだ。それでこそ「勞シテ怨マレズ」である。最後の「コレヲ有司ト謂フ」に至つては、孔子様も相當に皮肉辛辣だ。役人根性ばかりではない。私交上でも、「ヒトシクコレニ與フル」ならば、氣持よく與へたいものだ。

四九六

子ノタマハク、命ヲ知ラザレバ以テ君子爲ルコト無シ。禮ヲ知ラザレバ以テ立ツコト無シ。言ヲ知ラザレバ以テ人ヲ知ルコト無シ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『君子の身を修め世に處する道は、「知命」「知禮」「知言」の三重點に存する。天命を知つて人事を盡し、如何なる逆境に在つても天を怨みず人を咎めず、信じ且安んじて道を楽しみ得なくては、君子としての眞價が保てぬぞ。禮を知らないといふ、進退度を失ひ品格備はらず、君子としての立場が守れぬぞ。言を知らないといふ、善惡正邪を辨せず、義理人情に通せず、よく人を知るの君子たり得ぬぞ。』

開卷學而第一の第一章に述べた如く、論語は「君子」に始つて「君子」に終る、徹頭徹尾君子の教だ。私が敢てみづからはからず、一家一門の少年少女に繰返し「子ノタマハク」を押賣りし、今又さらにおほげなくも書物にまでもしようといふのは、ただただ新日本を眞君子國たらしめ、新日本人を眞君子人たらしめんの熱望の故のみ。

あとがき

これを以て私の『新譯論語』を終る。前にも申した通り「新譯」などとはおこがましい次第で、せつかくの一字千金寸鐵人を殺す名文を飴のやうにダラダラ引延したに過ぎないが、ともかくも若人たちに、論語なるもの存外時代錯誤でもないな、と思はせることができたならば、本懐至極である。かう申すとすぐに槍が出よう。時代錯誤でないどころか、孔子は二言目には「堯舜」といふ、昔は善かつた今は悪くなつたとなげく、何たる非科學的保守主義ぞや、かういふ非難が必ず出るだらう。これに對して私は、孔子様が言はれたとは違つた用方で、「ソレ然リ、アニソレ然ランヤ。」と申したい。

私は舊約聖書が好きだ。日本文のものではあるが、何遍となく繰返した。他方私は、學生時代に丘淺次郎博士の「進化論講話」に心酔して以來、父が「法律進化論」の研究著述を一生の仕事とした關係もあつて、進化論が好きだ。ところで、舊約が好きで進化論が好きだといふことは、正に「精神分裂」ではないだらうか。舊約聖書創世記第一章には「神其像かたちの如くに人を創造つくたまへり」とあつて、人間は牛馬犬猫以下とは全く類を異にする特製品であるとし、進化論は正反對に、人類は牛馬犬猫以下と同じ祖先の子孫たる動物で、中にも猿とはイトコハトコの親類筋だとする。生物

學者から觀れば、創世記は非科學千萬だし、牧師さんに言はせれば、進化論は不信心至極だらう。現に米國などでも或州では、さほど遠からぬ以前まで進化論を大學で教へることを禁じてゐたといふことだ。

しかしながら創世記と進化論とは決して行き違つてゐない。或は全然行き違つてゐるから衝突しないのだ、と言つた方がよいかも知れない。すなはち、進化論はひたすら現實を語り、創世記は過去の記録なるが如く見えて實は將來の目標なのである。要するに目の著け所が違ふのであつて、どちらの間違ではない。もし間違だといふなら、名前が間違つてゐるのだ。進化論が實は「創世記」であり、創世記が正に「進化論」なのではあるまいか。人が神の像かたちの如くに創造されたと創世記がいふのは、それが事實だといふ過去を主張するのではなく、願くは動物たる現實を脱却して神と同じ姿になりたいものだといふ人較永遠のあこがれの表現である。もし進化論と創世記とを一貫する人類の定義を求めるならば、「人は神に近づきつつある動物なり」といふことになるだらう。私はさう考へつつ舊約聖書を愛讀してゐる。

ここに於て私は、孔子様の堯舜論は進化論的（もしくは退化論的）事實論にあらずして創世記的理想論なり、と強調したい。堯舜傳説に假託して理想の政治を説かれたのだ。それ故、もし歴史家が、堯舜なる者は野蠻未開の酋長に外ならず、其時代は「道遺オールドチタルヲ拾ハズ夜戸ヨルヲ鎖トクサズ」どこ

ろか切取強盜勝手次第な亂世だつた、といふ事實を考證しても、さらに又そもそも堯舜なる者は存在しなかつた事を發見しても、孔子の道德説は微動たもしないのである。近頃一般の問題になり始めた日本上代史の眞偽なども同じ事だ。古事記日本書紀の記事の全部を事實と考へ又教へた所に從來の誤りが存する。記紀に書いてある所が事實でないにしても、それが書かれたことは事實であり、それが書かれたのは當時の日本國民の「かくもあらましかば」のあこがれがあふれ出たのである。「日本は神國なり」は「神國だ」といふ事實の斷定にはあらずして、「神國でありたい」といふ理想なり、と考へたらどんなものだらうか。そこに古事記なり日本書紀なり又論語なりの古くして新らしく新らしくして古き永遠の生命が存する。

最後に孔子をたたえた兩語句を掲げて全卷のむすびとしたい。第一は、幸にも戰災に焼け残つて愛藏してゐる椿椿山筆孔子像つばきさんの篠崎小竹しのざきしょうちくの賛であり、第二は唐の吳道玄の筆として曲阜の聖廟に安置された石刻孔子像の宋の米芾べいひつの賛である。前者は卷頭に筆蹟の寫眞版を掲げた。實物は畫像の上に書いてあるのだが、畫を大きく出すために別刷にした。

x

x

x

x

道與天地比大

德與日月同明

生前陳蔡不足爲厄

身後帝王不足爲榮

宰我謂賢於堯舜

子貢有若謂生民未有

而孟子則謂集大成

吾儕小人呼嗚豈能得而名乎哉

道ハ天地ト大ヲ比シ

德ハ日月ト明ヲ同ジクス

生前ノ陳蔡厄ト爲スニ足ラズ

身後ノ帝王榮ト爲スニ足ラズ

宰我ハ堯舜ニマサレリト謂ヒ

子貢有若ハ生民未ダ有ラズト謂ヒ

而シテ孟子ハスナハチ集メテ大成セリト謂ハリ

ワガトモガラ小人アアアニ能ク得テ名ヅケンヤ

X

X

X

X

孔子孔子大哉孔子

孔子以前既無孔子

孔子以後更無孔子

孔子孔子大哉孔子

孔子孔子大ナルカナ孔子

孔子以前既ニ孔子無ク

孔子以後更ニ孔子無シ

孔子孔子大ナルカナ孔子

格言熟語索引

あ

- 欺^{アサム}クベシ、罔^シフベカラズ 一四三
- 朝^{アサ}ニ道^{ミチ}ヲ聞^クイテ夕^{ユフ}ニ死^シストモ可^シナリ 七四
- 篤^{アツク}ク信^シジテ學^ブヲ好^ムム 一九七
- 迹^{アト}ヲ踐^フマズ、亦^モ室^ニ入^ラズ 二七二
- 訐^{アス}キテ直^ニト爲^ス者^ヲ惡^ムム 四五五
- 危^イキヲ見^テハ命^ヲ授^ク 三四四・四六九
- 過^アチヲ貳^ビセズ 一二一
- 過^アチヲ見^テ内^ヲ自^ラ訟^ム 一一八
- 過^アチヲ觀^テココニ仁^ヲ知^ル 七三
- 過^アツテ改^メザル、コレヲ過^チト謂^フ 四〇五
- 過^アツテハ改^ムルニ憚^ルコトナカレ 八・二二九
- 有^レドモ無^キガ如^シ 一八九

- 威アリテ猛カラズ 一八四・四九五
- 桴ニ乘リテ海ニ浮バン 九八
- 怒ヲ遷サズ 一二一
- 忿ニハ難ヲ思フ 四二七
- 憤リヲ發シテ食ヲ忘ル 一六五
- 異端ヲ攻ムルハコレ害ノミ 三二二
- 一ヲ聞イテ十ヲ知ル 一〇〇
- 一ヲ聞イテ二ヲ知ル 一〇〇
- 一隅ヲ舉グレバ三隅ヲ以テ反ス 一五五
- 一言以テコレヲ蔽フ 一八
- 一簞食一瓢飲 一二八
- 一朝ノ忿ニ其身ヲ忘ル 二九九
- 一以テコレヲ貫ク 八一・三七八

5

- 詐ヲ逆ヘズ、信ゼラレザルヲ億ラズ 三六三
- 出ヅルニ戸ニ由ル 一三四
- 意ナク、必ナク、固ナク、我ナシ 二〇九
- 寢ヌルニ言ハズ 二四三
- 寢ヌルニ戸ヲセズ 二五一
- 古ヲ好ミ、敏ニシテコレヲ求ム 一六六
- 禱ルコト久シ 一八一
- 言ハズ、笑ハズ、取ラズ 三四五
- 戒メズシテ成ルヲ見ル、コレヲ暴ト謂フ 四九五
- 未ダ人ニ事フルコト能ハズ、イヅクンゾ鬼ニ事ヘン 二六四
- 未ダ生ヲ知ラズ、イヅクンゾ死ヲ知ラン 二六四
- 今ヤスナハチ亡シ 一二一・二五九
- 色悪シキハ食ハズ 二四二
- 色難シ 三四
- 色ニハ温ヲ思フ 四二七

色厲シクシテ内荏ナルハ穿窬ノ盗ノ如シ 四四三

隱居シテ其志ヲ求メ、義ヲ行ヒテ其道ヲ達ス 四二八

う

徹ヒテ知ト爲ス者ヲ惡ム 四五五

疑ニハ問ヲ思フ 四二七

内ニ省ミテ疚シカラズ 二八二

生レナガラニシテコレヲ知ル 一六六

倦ムコトナカレ 二九二・三〇三

怨ヲ匿シテ其人ヲ友トス 一一六

沾ランカナ 二一七

憂蕭牆ノ内ニ在リ 四一八

得ルヲ見テハ義ヲ思フ 四二七・四六九

え

益者三友、損者三友 四二一

益者三樂、損者三樂 四二二

遠慮 三八七

お

犯セドモ校ラズ 一八九

奥ニ媚ビンヨリハ竈ニ媚ビヨ 五三

行ヒテ餘力有ラバ文ヲ學ベ 六

誨フルコト無クンバアラズ 一五四

教ヘ有リテ類無シ 四一四

教ヘズシテ殺ス、コレヲ虐ト謂フ 四九五

己ヲ脩ムルニ敬ヲ以テス 三七四

己ヲ脩メテ人ヲ安ンズ 三七四

己ヲ脩メテ百姓ヲ安ンズ 三七四

己ヲ知ルコトナキヲ患ヘズ、知ラルベキヲ爲スヲ求ム 八〇

己立タント欲シテ人ヲ立テ、己達セント欲シテ人ヲ達ス 一四七
 己ニ克チテ禮ニ復ル 二七九
 己ニ如カザル者ヲ友トスルナカレ 八・二二九
 己ニ求メテ人ニ求メズ 三九六
 己ノ欲セザル所人ニ施スコトナカレ 二八〇・三九九
 終リヲ慎ミ、遠キヲ追フ 九
 老ノ將ニ至ラントスルヲ知ラズ 一六五
 多キヲ以テ寡キニ問フ 一八九
 多ク食ハズ 二四三
 思ヒテ學バザレバスナハチ殆シ 三一
 思邪無シ 一八
 慮リテ人ニ下ル 二九八
 唐ルニ容ラズ 二五一
 溫故知新 二七
 溫ニシテ厲シ 一八四

溫良恭儉讓 一〇

か

怪力亂神ヲ語ラズ 一六七
 下學シテ上達ス 三六七
 下問ヲ恥ヂズ 一〇六
 下流ニ居テ上ヲ訕ル者ヲ惡ム 四五五
 下流ニ居ルコトヲ惡ム 四八八
 果敢ニシテ窒ガル者ヲ惡ム 四五五
 牆ニ面シテ立ツガ如シ 四四一
 樂ト云ヒ樂ト云フ、鐘鼓ヲ云ハンヤ 四四二
 學ハ及バザルガ如クスルモノホ失ハンコトヲ恐ル 二〇一
 難キヲ先ニシテ獲ルコトヲ後ニス 一三九
 難キカナ恒有ルコト 一七二
 貌ニハ恭ヲ思フ 四二七

哀^{カナシ}ンデ傷^{イタ}ラズ 六〇

必ズヤ訟^{ソウ}無カラシメンカ 二九一

可ナル者ハコレニ與^イミシ、不可ナル者ハコレヲ拒^{コト}グ 四七一

可モ無ク、不可モ無シ 四六五

カノ人言ハズ、言ヘバ必ズ中^{アタ}ルアリ 二六六

神ヲ祭^{イマ}ルニ神在^{イマ}スガ如シ 五二

上禮ヲ好^イメバ下使ヒ易シ 三七三

間^{カン}然スル所無シ 二〇五

桓^{カン}離ソレワレヲ如何 一六九

寛ナレバ衆ヲ得 四三七・四九四

き

既^キ往^{ワウ}ハ答^{コタ}メズ 六一

義ヲ見^ミテセザルハ勇無キナリ 四〇

聽^{ソウ}クニハ聽^{ソウ}ヲ思フ 四二七

鬼神ヲ敬シテコレヲ遠ザク 一三九

驥^キハ其力ヲ稱セズ、其德ヲ稱ス 三六五

危^キ邦ニハ入ラズ、亂^{ラン}邦ニハ居ラズ 一九七

君君タリ、臣臣タリ、父父タリ、子子タリ 二八九

君タルコト難シ、臣タルコト易^{ヤス}カラズ 三一七

舊^{キウ}惡ヲ念^{オモ}ハズ 一一四

急^クヲ周^スヒテ富メルニ繼^ツガズ 一二二

九^{キウ}思 四二七

九^ク仞ノ功ヲ一^キ筭ニ缺ク 二二三

久要平生ノ言ヲ忘レズ 三四四

恭寛信敏惠 四三七

郷^{キョウ}愿^{ウゲン}ハ德ノ賊 四四四

堯^{キョウ}舜^{シュン}モコレヲ病^ヤメリ 一四七・三七四

恭ナレバ侮^{アト}ラレズ 四三七

恭ニシテ安シ 一八四